

日本写真家協会会報

NO.161
(2016. Feb.)

- TPP 環境での写真著作権
- 第9回 JPS フォトフォーラム「地球を語る！」
- 座談会「写真学習プログラム 10 年の歩み」

JPS



Photo Asai Hidemi

SIGMA

世界初^{*}、開放F値1.4の

フルサイズ用超広角レンズ、誕生。

※35mm判フルサイズをカバーするデジタル一眼レフカメラ用
交換レンズとして(2015年10月現在、当社調べ)

A Art

20mm F1.4 DG HSM

希望小売価格(税別)150,000円 ケース、かぶせ式レンズキャップ(LC907-01)



シグマの新しいプロダクト・ラインについては、こちらへ。

sigma-global.com



At the heart of the image

この高画素、 プロフェッショナル。

被写体もフィールドも問わず、
あらゆるものを探さる。
それがプロフェッショナルの要求に応え
支持される D810 の高画素。
撮像素子、画像処理エンジン、
ピクチャーコントロールシステム。
そして、高解像 NIKKOR レンズ。
他の追随を許さぬ総合画質性能が、
圧倒的な撮影力を実現する。



デジタル一眼レフカメラ

D810

- 有効画素数3635万画素 ■ 新開発のニコンFXフォーマットCMOSセンサー
- 画像処理エンジンEXPEED 4 ■ 常用撮像感度 ISO 64~12800
- 進化したピクチャーコントロールシステム ■ 高精度AF ■ 電子先幕シャッター
- 約5コマ/秒※の高速連続撮影

※CIPAガイドライン準拠。FXフォーマット時。DXフォーマットでEN-EL15以外の電源使用時は約7コマ/秒。

D810 価格: オープンプライス **D810 24-85 VR レンズキット** 価格: オープンプライス 内容:D810, AF-S NIKKOR 24-85mm f/3.5-4.5G ED VR **D810 24-120 VR レンズキット** 価格: オープンプライス 内容:D810, AF-S NIKKOR 24-120mm f/4G ED VR ● 記録媒体は別売です。

0570-02-8000

www.nikon-image.com | 株式会社ニコン・株式会社ニコンイメージングジャパン

9500万本
NIKKOR

■ <i>Gallery</i>	JPS ギャラリー 鈴木一雄、阿部俊一、高城芳治、佐納 徹 5 池田 宏、金瀬 肥、萩野矢慶記、亀田昭雄
■ <i>First Message</i>	2016年の年頭に思う写真の可能性と写真家の在り方 13
■ <i>Focus</i>	TPP 環境での写真著作権~黒船・TPPは写真家をどこへ連れてゆくのか~ 濑尾太一 14
■ <i>Opinion</i>	赤々舎の10年「会社よりも永く残る本をつくりたい」 鳥原学 16
■ <i>Telescope</i>	創立65周年記念「日本の海岸線をゆく—日本人と海の文化—」展 島田聰 18
■ <i>Zooming</i>	写真×写真(連載9)戦後71年目からの「反戦・平和」へ向けて 河野和典 20
■ <i>Wonder Land</i>	座談会「写真学習プログラム10年の歩み」—その成果と今後に向けて .. 22 出席者: 松本徳彦、足立 寛、大野隆志、飯田裕子 司会・進行: 出版広報委員会
■ <i>Archives</i>	10年目を迎えた「日本写真保存センター」 森山眞弓、細田博之、与謝野馨 28
■ <i>Archives</i>	「日本写真保存センター」調査活動報告(20) 松本徳彦 30 家族の暮らし、戦時下の訓練、戦後を生きる
■ <i>Workshop</i>	著作権研究(連載36) TPPと著作権法改正 石新智規 32
■ <i>Topics</i>	賛助会員トピックス 34 朝日新聞出版、ニコンイメージングジャパン、東京工芸大学、キタムラ、クレヴィス、ライカカメラジャパン、サイバーグラフィックス、キヤノンマーケティングジャパン
■ <i>Forum</i>	第9回 JPS フォトフォーラム「地球を語る!」 36 講師: 清水哲朗、前川貴行、高砂淳二 司会: 佐々木広人
■ <i>Report</i>	セミナー研究会レポート 41 平成27年度第1回著作権研究会、平成27年度第2回国際交流セミナー
■ <i>Digital Topics</i>	ニコンの歴史と技術を凝縮したニコンミュージアム 42
■ <i>Education</i>	平成27年度高校写真部顧問を対象とした「デジタル写真講座」報告 44
■ <i>Convention</i>	第41回「日本写真家協会賞」贈呈式 46 受賞者: 「株式会社堀内カラー」
■ <i>Massage</i>	第11回「名取洋之助写真賞」授賞式 受賞者: 鳥飼祥恵、増田貴大(奨励賞)
■ <i>Books</i>	平成27年度会員相互祝賀会
■ <i>Comment</i>	Message Board 48
■ <i>International</i>	JPS ブックレビュー 50
■ <i>Infotmation</i>	写真解説 54
■ <i>Technical</i>	日本写真家協会の沿革(英文) 55
	追悼=名誉会員・土方健介、正会員・坂口よし郎、小西忠一 56 池尻 清/経過報告/編集後記
	エプソンのデジタルプリント最前線 64 JPSと共同企画による写真展を開催!! 迫力ある素晴らしい作品40点を展示
	表紙・浅井秀美、表4・永井 勝

広告
案内

- (株)シグマ
- (株)ニコンイメージングジャパン
- オリンパスギャラリー
- JPCA
- 太田出版
- リコーイメージング(株)
- 富士フイルム(株)
- (株)堀内カラー
- キヤノンマーケティングジャパン(株)
- (株)タムロン
- エプソン販売(株)

オリンパスギャラリーのご案内

オリンパスギャラリーでは、写真文化の普及・向上に貢献することを目的に、さまざまな写真展を行っています。



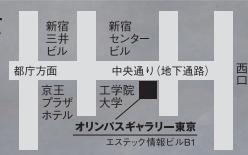
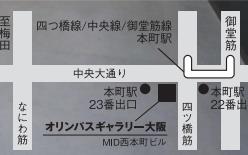
Your Vision, Our Future

オリンパスギャラリー東京

開館時間11:00～19:00
最終日15:00迄(木曜休館)
〒160-0023
新宿区西新宿1-24-1
エステック情報ビルB1
Tel: 03-5909-0191

オリンパスギャラリー大阪

開館時間10:00～18:00
最終日15:00迄(日曜・祝日休館)
〒550-0011
大阪市西区阿波座1-6-1
MID西本町ビル
Tel: 06-6535-7911



寒の戻り——鈴木一雄

写真集・写真展「日本列島—花乃聲—」

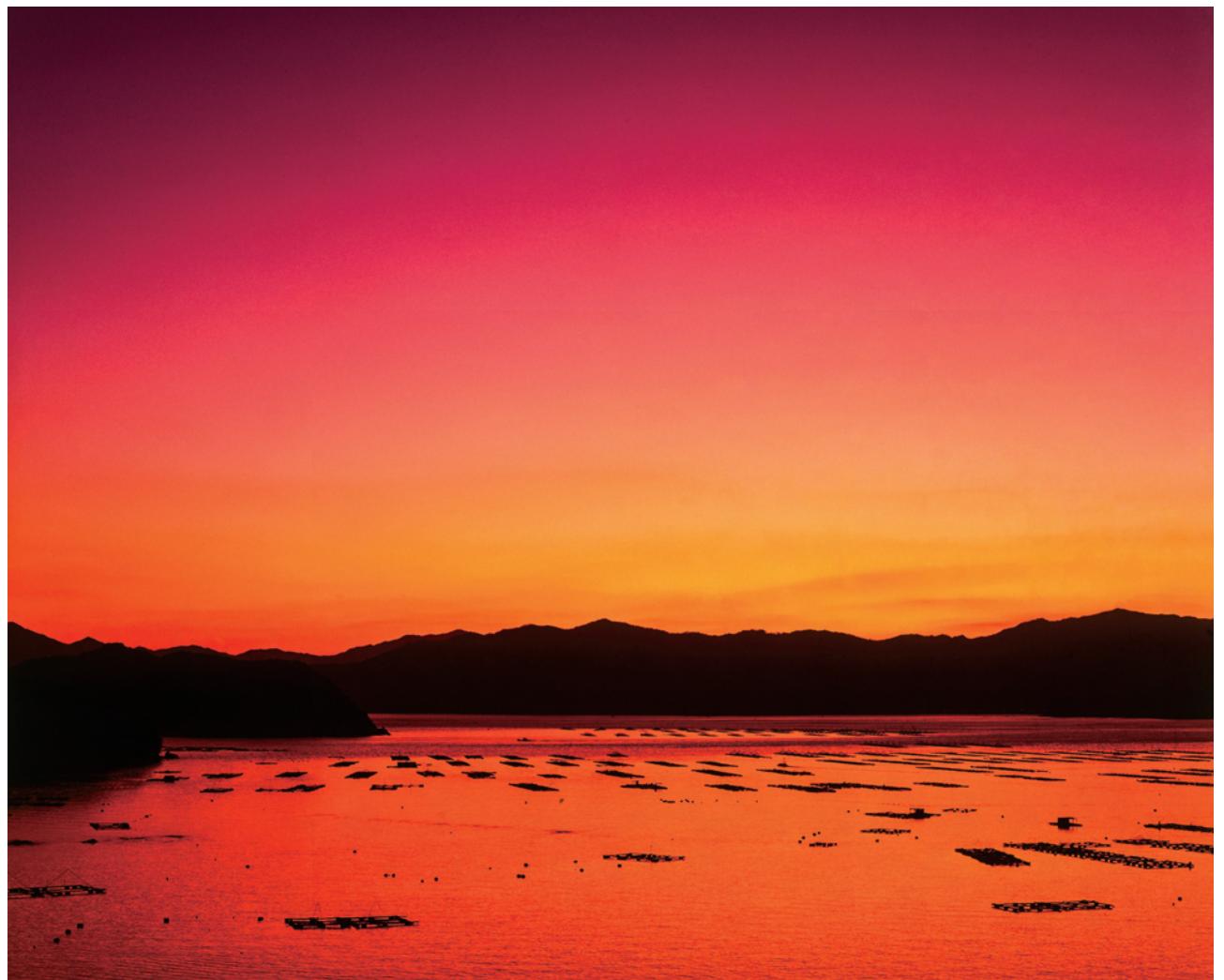


春の畠模様——阿部俊一
写真集『美しき美瑛の光と空』



青い麦 スズメ——高城芳治
写真展「野鳥四季彩」

FUJICHROME



ファンタジックタイム——佐納 徹
写真集『天空の舞い』



南極にて——池田 宏
写真集『南極』



勝鬨橋 2012年1月——金瀬 胖
写真集『路上の伝記』



ボーリング・ゲーム——萩野矢慶記
写真集『街にあふれた子どもの遊び』



樹木に囲まれた流路溝（足尾）——亀田昭雄
写真集『幻影の圏（げんえいのたに）』

2016年の年頭に思う 写真の可能性と写真家の在り方

会長 熊切 圭介

四方を海に囲まれた日本の周辺の海中には、様々な沈没船がありその数は数千艘はあるといわれている。時代を大きく遡れば、遣唐使船を始め御朱印船、南蛮船、元寇船、開陽丸など枚挙に暇がないだろう。

日本の周辺に沈んでいる船のことを知ったのは、井上たかひこ氏の著書『水中考古学』を読んでのことだ。歴史上の様々な出来事が原因で海中に沈んだ船のことや遺跡を発掘、保存、調査し研究する学問のことを「水中考古学」と呼ぶようだ。単に研究するだけではなく、歴史的な意味を体系づけ分類する興味深い分野だ。

協会では2016年の3月1日から東京で創立65周年の記念事業として「日本の海岸線をゆく」という写真展を行うと同時に写真集を出版するが、「海中から見た日本」という視点が加わっていたら面白かったかもしれない。沈没船だけではなく、自然現象などによる水位上昇や災害により水没した街や村の姿など、海岸線をめぐる多様なドラマなども「水中考古学」の対象になっている。

2015年度の第41回「日本写真家協会賞」は株式会社堀内カラーに贈呈したが、その推薦理由は「超大型カラープリント技術の完成度の高さを評価して」だ。プリントした作品は写真家・広川泰士氏の作品「バベル」で、都市周辺の開発により変貌していく光景を、静謐でシリアスな眼差しで撮影した作品だ。 8×10 のカメラで撮影した作品をデータ化し、インクジェットプリントで $1,600 \times 3,000$ という巨大な作品に仕上げて展示した。単なる風景ではなく、現代という時代の持つイメージを色濃く表現した訴求力の強い作品だった。

作品の内容は大きく異なるが、野町和嘉氏の写真展「天空の渚」は、5,060画素という高精細な描写力をを持つデジタルカメラを駆使して、メキシコ、ボリビア、チリ、アルゼンチンなどを撮影し、 $1,500 \times$

$3,000$ という大きなサイズでプリントしている。元倉庫だったスペースをギャラリーに改装した空間での展示は見応えがあり圧倒された。作品の前に立つと、技術的な、また表現力の高さに感じ入る前に、写し撮られた風景や建築物のある空間に、現実に自分自身が佇んでいるような不思議な感慨、つまりカメラや写真の存在を意識していない自分に気がついて感動をもった。

写真機材やデジタル画像の高機能化に加え、表現領域もグローバル化、ボーダレス化が進み、日常生活の中でさりげなく高画素数のカメラを使用していることに改めて驚きと感動を憶える。と共に高機能のカメラが作り出す写真の世界に、限りない可能性を感じる。

カメラ機材やデジタル画像の著しい進歩と変化は、当然のことながら写真に関連した諸環境に変化を促す。デジタル出版に関する諸問題などの他、ジャーナリズムの形態の変化にともなう著作権の保護に関する考え方の変化と写真家の対応の仕方、TPPとの関連で云えば著作権侵害の非親告罪化の問題など今後の大きな課題になるだろう。

写真家協会は写真の著作権問題などを早くから取り組んできたが、紙媒体からデジタル画像へと大きく時代が変化していくなかで、これからは著作権はどうあるべきか、どう考えるべきなど、著作権保護の基本をベースにして、新しい時代に対応した考え方を視野に入れ、写真表現力や写真家の在り方などを考えていく。今回『写真著作権第2版』を出版し写真を取り巻く環境の変化、撮影時、或いは公表時に関わる諸問題について、法律的側面を詳細に考慮しながら記述した内容になっているので、熟読していただきたい。なお『JPS会報著作権関連記事特集号』も合わせて発刊したのでご一読いただきたい。

TPP 環境での写真著作権 ～黒船・TPP は写真家をどこへ連れてゆくのか～

瀬尾太一（日本写真著作権協会常務理事）

1. TPP がやってきた

2015年10月5日、幾多の糾余曲折を経て、TPP(環太平洋戦略的経済連携協定・Trans-Pacific Strategic Economic Partnership Agreement)が大筋合意いたしました。その後、11月5日に合意内容が公表され、初めて私たちはTPPの正式な内容に関する情報に接することができました。内容は巧妙にリークされていたこともあり、ほとんどが既知の内容でしたが、これほど広範な協定が多くの国々によって合意されたことは、それ自体、歴史的な出来事です。そして、この協定はすぐにすべてが実施されるわけではありませんが、今後10年以上にわたり、批准された国々において、実現されていくこととなります。きっと後世の歴史家は、第二次世界大戦後の世界で、冷戦終結後の大きな時代の区切りとして、「TPP以前」「TPP以降」と呼んでいくことになるのではないかでしょうか。

このような大きな変化の中で、TPPは写真家にとってどのような影響を及ぼしていくのでしょうか。今回はTPPが写真家にとってどのような意味を持つのか、そして、新しい知財環境下でどのような対応を行っていくべきなのか、について考えてみたいと思います。

2. TPP の知財関連における3点セット

合意前から、今回のTPPによって著作権分野で検討されている内容については、次の3項目が挙げられており、通称「3点セット」と呼ばれてきました。3点セットを簡略に示せば下記の通りです。

①著作権保護期間の延長

死後50年間著作権が保護される現行法を、死後70年間保護されるように、保護期間を20年延長する。

②著作権侵害罪の非親告罪化

現行法では侵害された本人しか裁判を起こせませんが、これを第三者が起こせるように変更する、ということです。例えば、これまで出版物についての著作権侵害があった場合でも、特別な契約がなければ、出版社は訴訟を起こせず、著作権者である著作者が裁判を起こすしかありませんでした。それを権利者ではない出版社が訴訟を起こせるようになる、ということです。

③法定賠償制度の導入

これまで日本の法律では、どれだけ損害があったか、を基準として損害賠償額が決まっていました。著作権侵害の場合などは比較的損害が少額な場合が多く、裁判を起こしても費用倒れとなり、なかなか訴訟ができにくかった現実があります。それを実際の損害額を算出しなくとも、法律で賠償金額を決めて賠償を行う、という方式です。アメリカのように、さらに「懲罰的な賠償制度」といって、侵害抑止効果を高めるために、実際の損害とはかけ離れた高額な賠償金を課す制度もあります。

あまりに簡略化していますので、実際に運用するにはもっと複雑な内容が含まれていますが、基本的に写真家が理解しておく必要がある内容は上記のとおりです。そして、この内容はすべて権利者にとって有利になる改定ばかりであることにも気づくでしょう。写真家にとって、TPPは歓迎するべきもので、他の肉や農産品などと違って、まったく喜ばしいことばかりだ、と思えるかもしれません。しかしこれには、もっと重大な意味が含まれているのです。写真家にとって、TPPの本当の意味は何か。それを次項でお話しいたします。

3. TPP の意味するところは何か

このようにTPPの要件を並べて、権利者保護を厚くする政策だと理解することは容易です。そしてそれは間違っているわけでもありません。また、このような体制をすでに持っているアメリカは著作権を尊重して、保護の厚い国だと思えることもあるでしょう。確かにアメリカはウォルトディズニーのキャラクターをはじめ、著作権で大変なお金を稼いでいます。そしてその利益を維持していくために、著作権について保護を厚くしている、という現実もあります。日本はアメリカに比べて、権利者の保護が遅れている、このTPPの3点セットを足掛かりにして、日本もアメリカのように著作権の保護を厚くして、経済効果を上げていこう、という話すら聞かれます。

しかし、このTPPはそれほど甘いものではありません。

まず、このような条件は言いかえれば、アメリカ型の権利処理システムが導入される、という意味になります。つまり、

アメリカが他の国においても、自国と同じルールで著作権ビジネスを展開していくことが可能となる、ということです。これはどのような意味を持つか考えてみましょう。

アメリカ型とも呼べる著作権運用の大きなポイントは二つあります。

まず、一つは著作権は著作者が保持するのではなく、多くの場合、出版社など、その利用者に譲渡されることが前提になる、ということです。それでこそ、企業が著作権を活用し、利益を最大化できる、というロジックなのです。アメリカ型の著作権思想においては、著作権は「財」としての側面が強調され、「文化」としての側面はさほど重視されていないように思えます。これは著作者人格権がアメリカにはないことも理解できます。また、日本が手本とした著作権法は、著作権の文化的な側面を重視するヨーロッパの思想であり、アメリカ型の著作権思想とは一線が画されているということもあります。

もう一つは、著作権制度が完全な契約社会、裁判社会において機能する制度となっている、ということが挙げられます。利用する企業が著作権の譲渡を受けて、その利益について、法廷での決着や和解などの交渉を通じて、運用を行っていくというものです。日本のように裁判が日常的なものではなく、一生のうちに裁判を経験しないでその生涯を終える人が大半である国とは根本的に異なる思想ですし、現時点ではなじまないと見える考え方でしょう。

TPP の目指すものは何か。それはアメリカ型の著作権運用を TPP 加盟国に広めるためのものだと言えます。しかし、各国の状況はまちまちで、文化も著作権に関する考え方も異なります。今、日本の著作権者が考えなければならないことは、TPP を機に、このような体制に移行していくこと、そしてそれに対してどのように対応していくべきよいか、理解することではないでしょうか。

4. TPP 時代に必要なことは何か

このような環境が日本に来ます。著作権を保護してくれるんだ、などと浮かれていると、大きな危険にさらされるでしょう。これから、いくつかの要件についてご説明したいと思います。

まず、著作権の譲渡契約が大変増えてくる可能性があります。これは大きな流れの中で止められるものではありません。しかし、写真は撮影後数十年たって、その写真の価値が増していく特殊な性格を持った著作物です。基本的に著作権を保持していないと、本当に価値が出てくる時期に、著作者が著作権を何も持っていないという状況になってしまい

ます。これは写真家という職業を根本から危うくする問題です。たとえ、一時的に無報酬で独占的な利用を認めたとしても、また、一定期間、著作権が移動していたとしても、最終的に著作権を保持できる契約を結ぶべきです。

次に重要なことは、自分が著作者であることを明らかにする努力を、著作者自身が行わなければならなくなるということです。保護期間の延長によって、いわゆるオーファンワーカーと呼ばれる著作者不明の著作物が大量に増加し、それを防止する対策として現在の裁判制度の拡張などが予定されています。これまで著作者は著作物を創作することまでがその役割と思われてきましたが、これからは著作者であることを公に公表していくところまでが責任になると思われます。写真に氏名表示をしたり、自分のホームページを持つなども有効でしょう。また、団体に入れている意味がこれまで以上に重要になります。加入していることで、著作者としての所在を公的に担保できるからです。

最後に最も重要なことがあります。それは著作者が自分の創作した著作物について、著作権があるという当たり前のことを、あらためてきちんと理解すること、著作権とはどのような権利なのかを考えることだと思います。写真家の場合、トラブルがない場合には、ほとんど著作権を意識しないことが多かったように思います。何か問題が起きた時にだけ、著作権について取り組むケースが大半ではないでしょうか。しかしこれからは、著作権によって写真家という職業が成り立っていること、そして TPP 環境においては、まず著作権を保持し、そしてそれを正しく運用することで初めて生涯の職業として写真家が成立するということを理解するべきでしょう。また、そのような運用で生涯、写真家であり続け、時代を切り取り、日本の文化を支えていく創作者たりうるのだと思います。

5. 黒船

以前に TPP を黒船に例えたことがあります。そして実際に TPP の全貌があらわになった今、やはり TPP は黒船だと私は思います。黒船は時代の警鐘です。今こそ写真家はその警鐘を聞き、自ら変化していくことを求められています。変化する時代に、写真家の未来を作っていくのは、今、時代に向けてシャッターを押す一人ひとりの写真家なのです。

瀬尾太一(せお・たいいち)

写真家 2002 年から 2013 年まで文化審議会著作権分科会委員、文化庁各小委員会委員等を歴任して著作権行政にかかわる。(一社) 日本写真著作権協会常務理事、(公社) 日本複製権センター副理事長・専務理事代行(公社)、日本写真家協会著作権委員会委員。

赤々舎の10年

「会社よりも永く残る本をつくりたい」

鳥原 学（写真評論家）

◆直感の実証

「写真集は売れない」と言われ続けてきた。だが出版点数が減る様子はいっこうになく、それどころか印刷コストの低下もあって、年々増えているようでさえある。いったい一年のうちに、どれくらいの写真集が出版されているのだろうか。

そう思い、『日本写真年鑑2015』（日本写真協会刊）の「写真集・書籍」の項をみた。用品カタログや評論集などを除くと、写真集だけでざっと600点は下らない。もちろんそのうち書評に取り上げられたり、写真賞の対象になったりするものはごく僅かにすぎないのだ。

赤々舎の写真集が突出しているのは、月一冊ほどのペースでの出版数にも関わらず、毎年その話題作を提供している点にある。たとえば同社の木村伊兵衛賞受賞作だけを列举しても以下のとおりである。2007年志賀理江子『C A N A R Y』と岡田敦『I a m』、2008年浅田政志『浅田家』、2009年高木こずえ『M I D』、2012年百々新『対岸』、2015年石川竜一『絶景のポリフォニー』と『okinawan portraits 2010-2012』。

いずれも作家の個性とコンセプトを的確に汲んで、それが的確に造本されている。それぞれの作家の体温が、ダイレクトに伝わってくる。月並みだがそう形容したくなるのだ。

同社は2006年に京都で設立されたから、今年でちょうど10年目を迎える。この期間、若い世代の表現動向のある側面をリードし続けたといって過言ではない。

振り返ると、赤々舎はそのスタート時点からすでに注目を集めていた。正確に言えば、それは社長である姫野希美氏に対する関心だ。すでに彼女は京都の青幻舎で、大橋仁『目の前のつづき』（1999）、佐内正史『生きている』（1997）、澤田知子『ID400』（2004）など、若手作家の衝撃的なデビュー作を手掛けていたからである。

その赤々舎が、最初に出版したのは徐美姫の『SEX』だった。出版直後、姫野は『スタジオボイス』7月号で、次

のように独立への思いを語っていた。

「赤々舎は、自分の直感を実証するための仕事だと思っているんです。青幻舎でも新人の写真集を作ることが多かったのですが、例えば大橋仁さんに出会った時に感じたような直感を長らく覚えていなかったので、徐さんは久々に衝動が先立つタイプの作家だったんですよ。それにこうした決断をするために母体の小さな会社を立ち上げたという経緯もありました」



それからの10年は、この「直感を実証するため」の過程であり、おそらく将来においても方向性は変わらないはずである。

◆巻き込まれる力

姫野には職分として、出版社の経営やそこで写真集の編集を行っているという意識が薄い。いや、話を聞くほど自覚的に薄くしているように思われる。

「極端ですが、赤々舎がなくなっても『本さえ残れば』という気持ちがあります。もちろん、会社が存続するために努力をしていますが、極論を言えば本のほうが大事じゃないでしょうか。会社より本の寿命のほうがずっと長いからです。優れたアーティストであれば、そのアーティストがまるごと本の中に生き続ければいい」

職分という意識が薄いのは、編集者という肩書きを好んでいないことからもわかる。そこになにか特別な立場や職能であるとのニュアンスを感じるからで、そもそも自分には編集能力とか目利きの力といった突出した能力はないと言ふ。過去のインタビューでは「素材を形にすることに興味はない」との発言もあった。

「私の場合は『巻き込まれる力』なのかもしれない。そして巻き込まれ始めたときは、その人のことをできるだけ深く知りたいし、深くシンクロしていきたい」

このようなスタンスは、青幻舎時代に佐内や大橋、あるいは彫刻家の舟橋桂との、衝撃的ともいえる出会いのなかで明確になったものだという。自らの能力によって、本づくりをハンドリングしていくことを放棄するしかない、という体験をしたのだ。

能力というのはどのみちたいしたものではない、だから問われるのは、どれだけ作家を深く受けとめていけるかど



うか。

「圧倒的にすごい思考と、それを表現することができる人が世の中にいる。赤々舎という名前をつけてくれたアートディレクターの葛西薫さんが「自分は突出したデザインをやるんじゃなくて、むしろ引っ込んだデザインをやりたい」と仰っていた。突出しても富士山ぐらいだけど、引っ込むと地球の奥まで掘っていけるんだから、そっちのほうが深いんじゃないとか。それを聞いて自分は穴でもいいと思うようになったんです」

とはいって、じつは姫野に「目利き」の能力がないとは思えない。かつては和歌の研究のため大学から院の博士課程まで進み、実作者としても嘱望されてもいたからだ。分析的に作品を見る目がないのではなく、分析できるものに魅力を感じない。求めるのは、言葉を粉碎するほどの肉体性を持った作品である。

「もっとさらわれるよう作りたいですね。既存の分析や批評的なものさしを覆すような力のある何かを。たとえば根こそぎさらわれ、自分が崩れるような感覚と言えばいいのかな。自分の存在やテリトリーが崩壊する快感ですね」

この過剰な受容性への欲求が、赤々舎の本を特別なものにしているといえよう。

◆理想と現実

姫野に大きな影響を与えた出版社がある。1991年にスイスで設立されたSCALO（スカロ）である。やはり個人出版社だったがニューヨークとベルリンにも拠点を置き、1990年代の写真集やアートブックシーンをリードした。しかし2006年に倒産、後に膨大な在庫だけが残った。赤々舎の設立がこの年のことで、なかなか感慨深いものがある。

もちろんSCALOだけでなく、IPCや光琳社などのように膨大な写真集を残して潰れた出版社は日本にも少なくない。冒頭で触れたように、基本的に写真集は売れない。部数の上限は2~3千とされるが、いまでは「写真集を継続して買う層は、どう見積もっても5百人ほどしかいないだろう」と姫野は実感している。

そんな姫野も最初は楽観的だった。設立時には一冊つくるほどの手元資金しかなかったが全部売れば回収でき、次の展開ができる。ルートがなければ大根を売るようリヤカーに乗せて売ればいいとも思っていた。もちろんそんな理想は叶わなかった。時々その苦境を救うような仕事が舞い込み、一時的に息をついていたというのが実情だという。

もちろん待つだけでなく、姫野自身も写真家とともに動いてきた。たとえば昨年2月に渋谷ヒカリエで開催した「AKAAKA スライドショー in 渋谷～写真の種をまく」は、6時間半をかけて15名の写真家が自作を披露するという大型企画で、若い世代を中心に話題を集めた。スライドショーはほかにも国内外で積極的に展開してきたイベントだが、その原点にある風景はいかにものどかだ。

「立ち上げた年の夏、北海道で行ったのが最初です。とても気楽な感じでした。北海道出身の岡田敦くんのお父さん

が高校の校長先生だったので、スライドショーができる高校を紹介してくれて。岡田くん、浅田（政志）くん、石川直樹くんらが



交代で運転しながら旭川まで行って、途中書店で営業をしたりしました。誰も赤々舎なんて知らないし、岡田くんも地元で知名度があるわけじゃない。集客が心配だったから、みんなで繁華街に出てビラを配って客寄せして。今から考えるとびっくりするぐらいヒマだった。

その後、熱海に行ったこともあります。誰かが温泉に行こうと言いだしたら十数人集まって。宿ではみんなお互いのブックを持ってきて忌憚なく意見を言い合いました。高橋宗正くんが考へている展示の仕方に「それは違うだろう」とみんなで突っ込んだりすると、とうとうトイレに立てこもったりして。ほんとうにみんなヒマでした」

そんな「ヒマ」が姫野と若い写真家たち、あるいは若い写真家同士の信頼感を育くむのにどれほど大切な時間となつたことか。ときに彼女は「写真関係の活動家」と呼ばれるが、こうしたエピソードから、その理由の一端がうかがい知れるようだ。

また、一昨年に出版された小野啓の『NEW TEXT』では、制作費のために、写真集では例のなかったクラウドファンディングを行っている。それは写真集のボリュームと価格の矛盾を解決するために、初めて知った手法だった。

「こうした戦術というのはやむを得ず生まれてくる。何とか生み出さなきゃいけないから、そのために絞りだすものに過ぎません」

写真家と出版社がひとつの作品のために理想を共有し、実現しようと共に知恵を絞って活路を見出す。これはモノづくりの方法として、至極まつとうな行き方だと思う。つまり売れるかどうかより、まず売りたいかどうかを大切にするということ。

もちろん、それがビジネス的な成功と結びつくかどうかは別な話だ。それでも姫野自身が楽天的な「写真方面の活動家」である限り、多少の困難は克服していくのだろう。そう思わせるしなやかな強さを、赤々舎は持っているのである。

(撮影／出版広報委員：桃井一至)

鳥原 学(とりはら・まなぶ)

近畿大学卒業。著書に『時代を作った写真 写真が作った写真』(日本写真企画)、『日本写真史(上・下)』(中央新書)。日本写真芸術専門学校講師

日本写真家協会創立 65 周年記念事業

「日本の海岸線をゆく—日本人と海の文化—」展

2016 年 3 月 1 日(火)より東京芸術劇場にて開催!

日本写真家協会創立 65 周年を記念する周年事業の今回の写真展では、日本の海岸線を手がかりに、その風土、風景、そして人々の暮らしを通して、国土と人、文化、社会の姿、ひいては日本の「今」を見つめ直してみることにした。アジア大陸の東縁に沿って連なる数多くの島々からなる日本列島とその国土は、東西南北それぞれ 3,000 キロにも及ぶ広大な領域で、その海岸線は総延長 35,672 キロ(平成 24 年・国土交通省)に達し、世界でも有数の延長線である。

今回の展示会場は東京芸術劇場のギャラリー 1 と 2 で催すが、ギャラリー 1 では、日本列島を海岸線に沿って周遊し、ギャラリー 2 では、会期中にちょうど 5 年目の大震災 3.11 を迎え、被災後の海岸線をとらえた写真も展示する。ギャラリー 1 は、「東京湾岸、房総をゆく」、「三陸沿岸、東北をゆく」、「北の海をゆく」、「日本海をゆく I」、「日本海をゆく II」、「瀬戸内をゆく」、「西の海をゆく」、「南の海をゆく」、「黒潮をゆく I」、「黒潮をゆく II」のタイトルを冠した 10 のブロック順に列島を辿る。ギャラリー 2 は、「震災、その後」と題し、大震災の当日から最近まで、海岸線の風景と人間の生きる姿を大型プリントで展示する。

展示作品は日本写真家協会会員の作品を中心に、古今の優れた写真家や写真愛好家 123 名の 197 点で構成している。海岸線を手がかりにした海の姿、人の姿、それらを捉えた様々な写真から、ビジュアルに日本の今を見つめ直すことで、今回の写真展が未来への価値ある一助となることを願うものである。会期中、休館日は無く、開場時間も最終

日を含め、全日 10 時～20 時までとした。是非ともご来場いただきたい。

日本写真家協会は、これまでに写真を通して記録と表現の両面から現代史を概観する数々の写真歴史展を開催してきた。主に戦後から現代までの時代に焦点を当て、広く日本人とその社会をテーマとしてきた。

創立 55 周年の際には「日本の子ども 60 年 - 21,900 日のドラマ」展を、そして 60 周年には、「おんな」をテーマに、戦後から現代までの女性史をビジュアルに俯瞰した「おんな - 立ち止まらない女性たち -」展を開催した。

さらに特別企画展として、2012 年に写真展「生きる - 東日本大震災から一年」を企画、東京・仙台で開催し、さらにテーマの世界的関心に応えて、国際的写真見本市「フォトキナ 2012」で特別展示を行い、その後、オーストリアを皮切りにドイツ国内を巡回し、写真による戦後史を展観した。

(企画担当常務理事 島田 智)

【特別協賛】富士フィルム／ニコン／ニコンイメージングジャパン／キヤノンマーケティングジャパン

【協賛】タムロン／オリンパス／シグマ／東京カラー工芸社／フレームマン／堀内カラー／キタムラ／学研プラス『CAPA』編集部 日本写真家協会賛助会員各社ほか

東京展

2016 年 3 月 1 日(火)～2016 年 3 月 13 日(日)
会場：東京芸術劇場 5F ギャラリー 1・ギャラリー 2
(東京都豊島区西池袋 1-8-1) JR 池袋駅西口

入場料：一般 800 円／学生・65 歳以上 500 円
開催時間：10:00～20:00 期間中休館日なし
講演会：3 月 5 日(土)14:00～
東京芸術劇場 5F シンフォニースペース
講師：椎名誠
フロアレクチャー：会期中随時、写真集サイン会など
共催：東京都写真美術館
後援：文化庁、国土交通省

京都展

2016 年 6 月 14 日(火)～2016 年 6 月 19 日(日)
会場：京都市美術館本館 2 階南側
(京都市左京区岡崎公園内)

入場料：一般 800 円／学生・65 歳以上 500 円
開催時間：10:00～18:00 期間中休館日なし
後援：文化庁、京都府、京都府教育委員会、京都市、
京都市教育委員会
【巡回展予定】
トンガ王国展：2016 年 9 月 9 日から 2 週間
国際交流基金共催事業
横浜展：2017 年 4 ～ 5 月
会場：日本新聞博物館



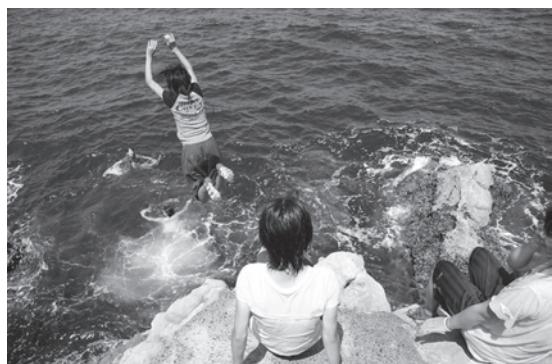
岩崎洋一郎：10m の巨体 千葉・2009年



奥田倉之：南三陸シーサイドパレス跡 宮城・2013年



宇井真紀子：水平線の向こう側 静岡・1997年



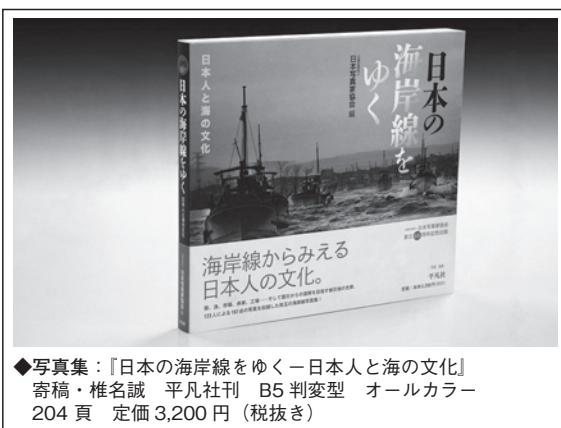
木村恵一：能登のジャンプ女子 石川・2012年



中田 昭：祇園祭巡行、船鉾 京都・2010年



大野隆志：黒島の豊年祭、奉納舞踊「ミルク」 沖縄・1996年



◆写真集：『日本の海岸線をゆく－日本人と海の文化』
寄稿・椎名誠 平凡社刊 B5判変型 オールカラー
204頁 定価3,200円（税抜き）



前田欣一：三保の松原 静岡・2015年

戦後71年目からの 「反戦・平和」へ向けて

河野和典 KOUNO Kazunori (フォトエディター)

戦後1947年生まれで実際の戦争体験のない私だが、昨年ほど、戦争の悲惨さに気づかされた年はなかった。今まで明らかにされていなかった広島、長崎の原爆投下直後の写真をはじめ、つぎつぎと目の前に展開された様ざまな写真には、戦後70年が経つのにまだまだ知らない戦争の悲惨さがあるものだと、驚くとともに涙を禁じ得なかった。

本誌前号の〈戦後70年「戦争を記録する写真」〉では最後に、*「まだまだ「戦争を記録する写真」*には紹介したい作品があるのだが、スペースが尽きた。最後に、江成常夫が今年8月2日と8月15日(終戦記念日)、出身地の相模原市で2つの写真展と講演会(「母国は遙かに遠く」と「まほろし国・満州と戦争孤児」)を行ったこと、そして大石芳野が『大石芳野写真集 戦争は終わっても終わらない』(2015年7月30日、藤原書店、定価3,600円+税)を上梓したことを記しておきたい。締めくくったのだが、大石芳野写真集には、その後の展開があった。立教大学で行われた大石芳野写真展「戦争は終わっても終わらない」(2015年11月6日~14日)と講演会「戦火を生き抜く・平和を生きる」(同11月7日)である。

戦後71年目となる今年になっても、世界中いたところで様ざまな紛争が絶えないし、人間社会からはまさに「戦争は終わらない」のだから、「反戦・平和」もまた、永遠に唱えなければならない。2016年の年頭にあたり、まずはこの写真集と写真展、そして講演会から触れていくことにしよう。

●『大石芳野写真集 戦争は終わっても終わらない』

大石芳野にとってこの写真集は、〈別表〉に掲げたようにインターネットのウィキペディアや最新刊の出版案内を総合すると、共著の3冊を含めると37冊目の著作となる。フォトジャーナリストとしてニューギニアにはじまって、カンボジア、ベトナム、コソボ、ポーランド、ソビエト、アフガニスタン、中国、韓国、東京、広島、長崎、沖縄、福島などをめまぐるしくめぐりまとめられた大石の著作には、さきの江成常夫とも共通するが、写真撮影は当然として、一貫して現地の人びとの話を丹念に聴きながらまとめられたドキュメンタリーであるということが大きな特長である。

写真集の帯にもあるように、この写真集は「国内外で戦争・災害に直面した人びとの姿を正面から撮影してきたフォトジャーナリスト、大石芳野。40年にわたるその活動の中で、日本の戦争が残した傷痕と、それに苦しみながらも不屈に生きる人びとに焦点を当てた作品192点を集成した決定版」である。その中身は、「不屈の人びと——はしがきにかえて」「長崎 Nagasaki」「広島 Hiroshima」(胎内被爆、大久野島、第五福竜丸)「東京大空襲 Bombing of Tokyo」(言問橋、同潤会アパート)「国境の外に Outside the border」(七三一部隊、中国残留婦人、コリアン従軍慰安婦、ニューギニア戦跡)「沖縄 Okinawa」「取材ノート」の順に構成されている。

1970年代初頭から2015年までにわたり撮影された写真は、その場の状況を生き生きと伝え、外連味がないことは言うに及ばず、キャプションには、写された人たちの思いの言葉がていねいに撮影年と共に収録されている。そしてまた、東京印書館のプリントイングディレクター・高柳昇の手によるダブルトーン印刷も階調豊かで写真を良く引き立てている。

●写真展「戦争は終わっても終わらない」と 講演会「戦火を生き抜く・平和を生きる」

写真展と講演会は、立教大学池袋キャンパス チャペル会館1階と同本館2階1202教室で行われた。来場者が接するように観る狭い写真展会場から講演会場の教室へと移動したのだが、ここでも会場に収まらない人が集まって急きょ椅子を増設するという活況を呈した。私の知り合いの写真家は廊下で立ち聞きであった。

前述のように、世界中を取材し大きな成果を上げてきたその行動力は、多くの人が認めるところであるが、さらに今回の講演で驚いたのは、その話しづぶり——沈着冷静に整然と、ニューギニアで日本兵が人肉を食べ



『大石芳野写真集 戦争は終わっても終わらない』は四六倍判変型並製 2色刷・288頁

る話をはじめ、アウシユビツツの強制収容所、沖縄戦、東京大空襲などについて体験者から取材されたときの様子をかみしめながら語る様子——は、戦争体験がないにもかかわらず、まさに、戦争の“語り部”とも言える役割を見事にこなされていました。ただ撮影するだけの写真家の枠から一步も二歩も飛び出しているのである。

その昔、大江健三郎氏に賞賛されたことのある大石作品であったり、大石が「世界平和アピール7人委員会」メンバーであったりするのは、大石自身が分野を軽がると飛び越えて共鳴する力（“コラボ”する力）を持ち合わせているからであり、そもそも差別や偏見などは持ち合はせていない、ひとりわ COMMUNIcateする力が備わっていたからこそ、これだけのドキュメントが実現し、垣根を越えて多くの賞賛を浴びる結果となっているのである。

節目となる「戦後70年」における大石芳野の写真集、写真展、講演会は、これから「反戦・平和」の道しるべとも言えるような見事なものであった。

2013年に出版された写真集『福島 FUKUSHIMA 土に生きる』で、『日本写真年鑑2014』（日本写真協会）の「インタビュー特集」に登場して、写真家として活動する理由を問

講演中の大石芳野さん

われて、「目を背けてはいけない現実に対し、一人でも多くの人に目を向けてもらいたいからです。私はここ

大石芳野（おおいし よしの）略歴

フォトジャーナリスト。日本大学芸術学部写真学科卒業後、1970年代はじめより戦争や内乱、社会の変化によって傷つけられ苦悩しながらもたくましく生きる人びとをドキュメンタリー写真を中心に追い続ける。1982年『無告の民』で日本写真協会賞年度賞、1994年芸術選奨新人賞、2001年『ベトナム凜と』で土門拳賞、2007年エイボン女性大賞、同年紫綬褒章。『愛しのニューギニア』（1978年2月、学習研究社）から始まった写真集・著作は今回の『戦争は終わっても 終わらない』（2015年）までに37冊にのぼる。



大石芳野写真展と講演会の案内

に生きていて、そうした人たちとつながっている。それを示すことで、見た人もつながって欲しい。だから私はそこへ行き続ける。ま

たそれ以外の場所については、撮って伝えてくれた人の積極的読者になることで、私はそことつながる。福島以外の被災地にはあまり行っていないけれど、私自身の想いは福島と同じようにながっています。」と、大石は述べていた。（文中敬称略）



講演を聴く多くの参加者

大石芳野写真集・著書

- （1970年代）『愛しのニューギニア』（1978年2月、学習研究社）、『花黙し』（1979年11月、ブロンズ社）
- （1980年代）『女の国になったカンボジア』（1980年12月、潮出版社）、『パパア人』（1981年3月、平凡社）、『無告の民』（1981年11月、岩波書店）、『ワニの民 メラネシア芸術の人びと』（1983年7月、冬樹社）、『少年パパニー』（1983年10月、弥生書房）、『証言する民』（1984年4月、講談社）、『隠岐の国』（1984年7月、くもん出版）、『ベトナムは、いま』（1985年4月、講談社）、『沖縄に生きる』（1986年8月、用美社）、『沖縄の原像』（中程昌徳共著、1988.5、ニライ社）、『夜と霧をこえて』（1988年9月、日本放送出版協会）、『闘った人びと』（1988年10月、講談社）、『夜と霧は今』（1988年12月、用美社）
- （1990年代）『悲しみのソビエト』（1991年6月、講談社）、『あの日、ベトナムに枯葉剤がふった』（1992年11月、くもん出版）、『カメラを肩に見た世界』（1993年11月、労働旬報社）、『カンボジア苦界転生』（1993年11月、講談社）、『Hiroshima 半世紀の肖像』（1995年3月、角川書店）、『活気あふれて長い戦争のあと』（1997年3月、草土文化）、『小さな草に』（1997年4月、朝日新聞社）、『沖縄若夏の記憶』（1997年6月、岩波書店）、『生命の木』（1998年10月、草土文化）
- （2000年代）『ベトナム凜と』（2000年10月、講談社）、『コソボ破壊の果てに』（2002年6月、講談社）、『アフガニスタン戦禍を生きぬく』（2003年10月、藤原書店）、『見える日本、見えない日本』（養老孟司共著、2003年12月、清流出版）、『コソボ絶望の淵から明日へ』（2004年4月、岩波書店）、『声・映像・ジャーナリズム』（2005年3月、フェリス女学院大学）、『子ども 戦世のなかで』（2005年10月、藤原書店）、『魂との出会い』（鶴見和子共著、2007年12月、藤原書店）、『不発弾と生きる 祈りを織る ラオス』（2008年1月、藤原書店）、『黒川能の里 庄内に抱かれて』（2008年、清流出版）、『それでも笑みを』（2011年3月、清流出版）、『福島 FUKUSHIMA 土と生きる』（2013年1月、藤原書店）、『戦争は終わっても 終わらない』（2015年7月、藤原書店）



＜座談会＞

「写真学習プログラム 10 年の歩み」 —その成果と今後に向けて—



出席者：松本徳彦（JPS 副会長）、足立 寛（JPS 教育推進担当常務理事）、大野隆志（会員）、飯田裕子（会員）
司会・進行：JPS 出版広報委員会

2015 年 12 月 21 日(月)於：JCII 603 会議室

10 年を振り返って

足立 公益社団法人日本写真家協会では、写真に関する創作活動の奨励、人材の育成、教育にかかる事業のひとつとして、小学生を対象とした「写真学習プログラム」を平成 17 年より実施してきました。それまでの写真指導というと、どちらかというと暗室作業など技術面を中心とした指導が多かったのですが、このプログラムは児童に写真を撮ってもらい、何に興味を持ったか、何を写真で伝えたいのか。児童たちの視覚や心に目を向けて、写真を撮ることを通して学ぶ体験型学習を目的としたもので、この 10 年間で指導者はのべ 530 人、対象となった児童の数は約 19,600 人になります。この写真学習プログラムを立ち上げるにあたって、当初の考え方や思いを、松本副会長からまずお話しいただきたいと思います。

松本 公益社団法人として、日本写真家協会は会員に対してだけではなく、もっと広く社会全般に目配りしながら事業活動を進めるという基本方針があります。そのなかでこれまで欠けていた部分は、子どもにもっと写真に興味を持ってもらうという部分でした。そのためにはどうしたらいいだろうというのが、私たちの課題でもありました。そのために富士フィルムのご協力を得て、レンズつきフィルムを使用することになったわけです。

テーマをもうけてやらせるのも一つの方法ですし、

自由に撮らせるのも一つの方法です。どんな方法でもかまわないのですが、皆さんには、技術的な問題だけではなく、写真を撮るために何をしなくてはいけないのか。私たちが一番言いたいのは、ものをしっかりと見ることです。ものを見ることから興味が生じる。そして、興味が生じたものを、どのような形で記録するか。記憶を記録に置き換える。そこが一番大事なのだということを、学校で教えようということにしました。

プログラムを始めた当初、難しかったのは、学校とどうコンタクトをとるか。そこで最初は会員が卒業した学校や近所の学校、お子さんが通っている学校にまず話してみるとことになりました。そして学校の協力をいただいてからやりましょう、ということでスタートしました。

結果として 10 年続けてきましたが、今まできちんとした総括を行っていませんでした。その間、学校の先生を招いて意見を聞いたことはありますが、それ以上のことはしていません。はたして今やっていることが学校教育としては妥当な内容なのか。妥当といえる成果があったのか。実際に指導を体験された皆さんのお話を伺いながら、今までの総括をし、次の時代に向かうにはどうすればいいのかお話しできたらと思います。

足立 飯田さんと大野さんは、どのような気持ちでこのプログラムに取り組んでこられたのでしょうか。

飯田 私は群馬県利根郡川場村という村の撮影を 25

年くらい続けていましたので、その村の学校でこのプログラムをやらせていただきました。村には小学校が一つしかなく、1学年1クラスです。村と連動してプログラムを行ったこと也有って、1回目でいいインパクトがあり、村で予算を組んで頂き8年も継続させて頂いています。

その他、本拠地である千葉で3校。新潟と東京でも1校ずつさせていただきましたが、やはり地域によって小学校の写真教育に対する位置づけが違いますし、大都市では地域の中でも学校によって児童や親御さんの傾向、先生方の考え方も違うため、同じプログラムであっても、手法も展示方法も変わってきます。例えば東京のお子さんは、安全性などの問題から、外でカメラを持って自由に歩ける状態ではない。どうしても被写体が家の中になります。すると太陽光の下で撮るように光量が少ないと写ルンですでは写真表現の楽しさを感じるのは難しいとも感じました。写真の楽しさまで行きつくのが難しい環境だなと感じました。

川場村で取り組んだ8年間で、時代の変化を感じています。1回目の時は、40名ほどのクラスで「自分で写真を撮ったことのある人、手をあげてください」というと、本当に1人か2人しかいませんでした。それが今では、ほぼ全員が手をあげます。親御さんが使っているスマホで普通に撮るし、もしくはデジカメが家にある。フィルムで撮った子も出てきました。このプログラムは6年生が受けるのですが、展示された作品を見て、下の学年の子たちが「私たちも6年になつたら写真の勉強ができる」と楽しみにしているんです。そういうこともあって校長先生が、毎年経費が余るとカメラを買ってくださる。今では40台くらいデジカメがそろい、修学旅行にはみんながそれを持っていき、写真レポートを作っています。

小さな村ですので、村にお住まいの写真同好会の方々にご協力をいただき、チームを組んで授業を開催しています。川場村では毎年村のカレンダーを作っています。以前は写真同好会の方の写真を使っていましたが、それを子どもたちが撮った写真に替えました。すると子どもたちがなんのわだかまりもなく写真を撮ることで、大人の心が氷解し、村が一つになっていった。それにはちょっと、びっくりしました。写真の力とは、こんなに大きいのか、と。

群馬県の教育アワードに児童たちが写真学習の作品を出品して、トロフィーをいただいたこともあります。村の中でも、写真の力があふれ出して3年前から、ディレクターの方と村が一緒になって、「KAWABA NEW-NATURE PHOTO AWAR」というイベントも行っています。

実は、村の子どもたちとはいって、現状は決して平穏ではありません。農村に海外からお嫁さんが来て、ハーフの子もいます。さまざまな現状のなかで、写真が希望的な役割を担うようにもなっている気もします。

例えばこの学習プログラムの中で知り合った一人の少女は勉強が嫌いですが、アクティブなので「写真が向いているよ」と言って一緒に遊んでいるうちに、今年JPS展に出品し18歳以下の部で賞をいただきました。本人もすごく喜んでいました。これからも写真を撮りたいと言っています。

大野 僕は横須賀市で4校、9クラスやりました。きっかけは、妻が小学校の教員で、総合学習の時間に何をやるかで先生方が苦労していると聞いて。他の写真家も呼んで、2人で3クラスやりました。すると教員はけっこう興味を持ってくれて、話を聞いた他の学校がやりたい、と。2校目はデジカメで地元のいいところを撮影するという研究授業をやるので、それと絡めてやりたいということで、3回授業の時間をとってくれました。大楠という横須賀の南に位置する地域で、漁村などもあって、そういう風景を撮ってきた子もいた。教員とうまくコミュニケーションがとれたことで、子どもたちが写真に興味を持ってくれたのかな、という気がします。

失敗からも学びを

松本 500人以上の写真家が参加したので、500通りの授業があるのではないか。教えることも大事ですが、そうではなくて子どもたちが経験を通して考えることも大事です。両方あると思いますが、私たちは後者を取りたい。

かつては、指導というと技術的なことを教える面がややもすれば強かったけれど、そうではなく、まずは観察する。そこが大事なのではないか。というのも現代は情報社会ですから、あらゆる情報が日常的に飛び込んでくる。だから、情報としての知識はすぐを持っているわけです。しかし、どれだけ自分の身体で会得しているか。ものを考える力は、自分で体験し、身体で感じ取って初めて肉になる。

例えば実際に撮影をすれば、失敗もします。そこで、なぜ失敗をしたのかを考える。そこで得られた体験を通して次へのステップに進むことが大事なので、「あまり教えないでいいよ」という言い方をしたわけです。

あのカメラは1mより近くなるとピンボケします。あるいは、カメラを動かすとブレも出る。露出を自分で決めるわけではないので、光が強かったり弱かったりといった失敗もある。今まででは、それを「ダメだよ」とかたづけていた嫌いがあります。失敗したものはダメだ、と。しかし失敗したと言われるものをよく見てみると、これは面白いねえというものもあるし、何か新しい形や表現がある。そういうところに結びつけることによって、子どもに自信を持たせてあげたいということもあります。

表現の世界というのは、決まり通りにやらなくてはいけないというものではない。その人一人一人の感性によって、さまざまなものが作られていく。それをお互いが知ることによって、共通の認識が得られる。そ

こを大事にするという点で、この学習プログラムはよかったですなと思っています。

足立 最初にこのプログラムを始めた頃は、写真の興味への喚起というテーマがありましたけれど、この10年で写真を取り巻く状況がかなり変わっています。そのあたりはいかがでしょう。

飯田 近年、情報としての写真の役割が加速度的に大きくなっています。それだけに、どんな田舎で暮らしていても、世界に対する日本のパブリシティを写真でもできるのではないか、という気もします。同時にデジカメが普及している時代だからこそ、子どもたちには、1枚1枚、瞬間のフレミングを大切にするフィルムでの撮影というのではなく、じっくりものを観察して考える良い機会になっていると思います。

フィルムの場合、デジタルみたいに撮ってすぐに見て、ダメだったら削除する、ということができません。ですから、スマホでいつも撮っているものとは違い、大切に深く表現しようとする。時間の不可逆性も伝えられます。「27回しかチャンスがないんだよ」と言うと、すごく大切に撮ってきててくれる子どももいる。「写真は真（まこと）が写るんだから、『どうでもいいや』という気持ちで撮ったのは、私わかっちゃうよ」と脇かすと（笑）、ちゃんと撮ってくる子もいるし。

あと、大きくプリントする写真を自分で選びたかったという声もありました。ですから、コンタクトシートができてから子どもたち自身が好きなものに丸をつける、ということもしています。それは私が選ぶのと同じ場合もあれば、まったく違うこともある。それを否定せずに、「そうか、これも面白いね」という感じでやっています。

松本 子どもたちは、けっこう失敗するわけです。われわれも同じですが。失敗したら、失敗で終わらせないことが大事ですね。また、失敗したからあれをやらないほうがいい、という言い方もよくない。とにかく、いろいろなことをやってみなさい、と。そこから新しい発見がある。これは写真に限らず、あらゆる教育の中で大切なことではないでしょうか。

例えば高いところから飛び降りながらシャッターを切った子がいます。すると、縦にぶれた写真が生まれる。これも面白い。われわれがやらないことが、子どもたちの世界にはある。これは発見なんです。ある自閉症の子は、27枚中20枚くらいが、ベランダから空と雲だけを写している。なぜかと聞いたら、動物が見える、魚も見える、という答えが返ってきた。これには驚きました。学校の先生が、さらに驚いた。今まで

ほとんどしゃべらない子だったけれど、本人自身の感動なのか、興味なのか、何かそこに反応が出ている。こういうふうに写真を通して、いろいろな次元でコミュニケーションが生まれたり、あるいは何かの学習に活用できたり、写真は非常に幅広いものに利用できるのではないか。表現とはこういうところから生まれるのだ、ということが大事だと思います。

飯田 写真は光がないと写りませんよね。なので、まず太陽がどこに出てどこに沈むかを、意識してもらうようにしています。普段、当たり前すぎて、太陽のことなんか意識しませんよね。それが今は春だからこういう軌跡を通るけど、夏はこうなるから影も変わるんだよと教えると、通年光を観察したりするし、理科への興味にもつながります。それと子どもが常にカメラを持ってうろうろしているので、こんなところにゴミが落ちているとか気がつくんですね。だから、大人もうかうかしていられない。

大野 僕はいくつかテーマを出して、子どもに撮らせていたんです。すると子どもたちから、テーマを決めて写真を撮ったことなんかないと言われました。また、最初の学校で先生から言われたんですが、1から27まで番号をふって、そこに何を撮ったかを書かせるようにしたい、と。すると、何を撮ろうかと考えるようになりますね。

それと写真を選ぶ際も、子どもにまず5枚選ばせた。最初は選ぶだけでしたが、次の学校ではコメントを書かせたんです。すると、子どもが何に興味を抱いたのかがわかります。授業では僕たちが選んだ写真だったけれど、学校に展示するのは先生が別にプリントしたものだったりすることもありました。

足立 自分が「これ」と思っているもの以外が選ばれると、指導者の話を聞いて納得して受け入れる子もいれば、しない子もいるわけです。それも考えなくてはいけない課題ですね。

松本 面白い写真是いっぱいありますね。自分の家の犬にすごく近寄って撮ったら、右の目と左の目が違う色に撮れた。そういうのも発見です。それを持ち帰って家族で話したり、コミュニケーションツールにもなる。それも大事です。あるいは子どもどうしでそういう話をすれば、じゃあ自分はうちの猫で試してみよう、とか。

飯田 レンズの力を借りることで、肉眼で見ているものとは違う世界が生まれる。それが写真で表現することになりますね。本人とは思いもよらないものが子供の視点にあること発見したと、先生方も言っています。



飯田裕子 会員



大野隆志 会員

した。

松本 われわれは教えるというと、手取り足取りしながら形を見せていくことだと思っていたけれど、そうではないんですね。そこから何かを見つけて、発見していく。それを、ある形に置き換える。その点をもつと徹底してやってもいいのではないかと思います。

体系化していくことの重要性

足立 今まで2回で1セットの授業でした。それでは少ないので、という意見も出ています。

大野 僕は3回やっている時もあります。たとえば社会科見学に一緒に行って指導をし、それも含めたり。それと僕は1回につき90分やっています。つまり2コマです。授業以外にも、1回目と2回目の間に学校に何度も足を運び、先生と写真を選んだりしています。

飯田 私もそうです。

松本 物理的な制約で、やむをえない部分もあります。一度プログラムを経験した子が、学年が上がった時に再度経験したらどうなるのか。そうすると、子どもたちが何を会得したのかが、見えてくるかもしれません。しかし50校でなるべく多くの児童に経験してもらうというのが当初のコンセプトでしたので、1校に2回しか授業ができなかった。そこは、われわれの反省点かもしれませんね。リピートによってどんな成果が見えてくるのか、これから授業をする上で考えてもいい課題だと思います。

また、われわれの努力も足りません。例えば、終わった後に学校の先生とどれだけ懇談しているのか。その部分が欠けたまま、結果だけ残して帰ってきがちです。学校の先生はどう感じられたのか。子どもたちはどうだったのか。そういう検証が、今まで欠けていたと感じています。そういう点をまとめて次にどうするかを考えないと。このままやっているだけでは、「子どもが喜んだよ」だけで終わってしまう。

それでは、教育とはいえません。今の学習プログラムを教育のレベルを持っていくには、どうしたらいいのか。お互いに自分たちのやったことを総括しなくてはいけないと思います。

飯田 1回、最初から担任の先生と相談し、学習プログラムと文章と合わせて卒業論文みたいな1冊のレポートをそれぞれ制作したことありました。すると、2回の授業を受けた後に、子どもたちがデジカメでどんな写真を撮っているのかもわかります。それは総合学習の時間でやっていました。

松本 今は、総合学習の時間に私たちのプログラムを

入れてもらっている、という形です。しかしあれわれとしては当初から、これを文科省の学校教育の中にはどう定着させるか、そこを目指しているわけです。だけど、今のようにただ「やった」ということだけでは、十分ではありません。もう少し丁寧に総括をして、ここはこういうふうに改善しよう。そして改善したものでやってみたら、こんな結果が出た、と。

そういう結果の報告をもう少し続けて、こうすれば子どもたちの情操がこんなに伸びていくんだということを文科省に提出できたら、文科省も耳を傾けてくれるかもしれない。今のままでは、ただ勝手にやっているだけです。勝手にやるいい面もありますが、やはりもう少しきちっと体系化しないと、学校教育にはまだまだ取り入れてもらえないだろうと思います。

飯田 現実社会では、子どもはもうスマホでもなんでも撮ってどんどん配信できるし、実際にしている子も多い時代なので。どんな職業であれ、職人さんになる子でも、農業者になる子でも、今は自分で自分の作ったものを撮って発信したり

できないと困る時代ですよね。今は、義務教育が終わったらきちんと自分で写真が撮れるようになっていないと、なかなか国際競争にもついていけない。もちろん、情報のスピード化にはいい面と悪い面がありますが。

それと、心の面ですよね。先ほどの自閉症の子どもの話もそうですが、私の経験でも、他の授業にまったく興味はないし成績も悪かった子が、写真を褒められたことでバンと逆転して、がぜん他の勉強もやる気が出てきたという例があります。ですから写真は、子どもの心の闇に光を当てることのできるツールではないかと実感しています。

デジタル化にどう対応するか

—— 今後このプログラムを続けていくために、こういう点をこうしたほうがいいとか、ここは問題だとか、具体的に感じられたことがあたらお話し下さい。また、どんどん時代はデジタルに行くなかで、ここだけは曲げられない、というのがありますか？

飯田 フィルムは一期一会の時間にきっと対峙して物を見る、いいチャンスになると思います。今は時間がどんどん流れていくので、逆にとどまるための時間になる。ですから私はどちらかというと、デジタルよりも27回のチャンスしかないという点が、いい機会になっているのかなと感じています。なんでもファスト、ファストの時代なので、ステイする感覚をつかむ学習機会になると思うので。



足立 寛 常務理事



松本徳彦 副会長

大野 僕は、デジタルがいいか、フィルムがいいかではなく、1枚1枚を大事に撮ったほうがいいと思うので。そのためには、先生から言わせて始めたことではあります。ノートに番号をふって何を撮ったか書くというのは、よかったです。

飯田 自分の意識がどこに向いているのかがわかりますものね。

大野 ただ、「写ルンです」だと1m以内は撮れないで、制限される部分がある。もっと近くで花を撮りたかったと子どもが言っていたので、そういう点ではデジタルを取り入れたほうがいいかなと感じています。

松本 デジタルもフィルムも、それぞれによさや特徴がある。人間がその道具をどう使うかによって、自分が求めるものができるんだよ、というのは教える必要があるでしょうね。僕は、「デジタルだからって、撮っても消さないでね」と言っています。消すのはいつでもできるから。なぜ失敗をしたのかを考えるには、撮ったものを残しておかないとできない。だから撮つたらすぐに覗かないように、と。

今はプロでも、撮つたらすぐ下を向く。これで本当にいいのだろうか。連写することでシャッターチャンスをカバーできると思っている人もいるようだけど、これはとんでもない大間違いで、瞬間は1回しかない。それを自分が確認して撮つたのか撮らなかったのかは、非常に大きな違いです。それはわれわれがフィルムで



校舎の裏にある里山での撮影風景（撮影・大野隆志）



担任も参加しグループごとに撮影後の話し合い（撮影・大野隆志）

撮つた経験があるから、言えることかもしれません。

とにかく、カメラの機構にわれわれがついていく必要はまったくない。基本はひとつしかないということを、教える必要がある。そういう意味では、カメラの構造とか写り方を教えることも大事ですね。けれど小学校で少ない時間の中でやっていくには、そこは置いておいても、いかに楽しむかということをまず考える。さらには、できあがったものをどう読み解くか。これは選択にもつながっていくことですから。どう読むかによって、内容も変わってきます。

「30,000人の写真展」をやるようになってから、コメントを書いてもらうようになりましたが、自分が撮つたものについて書くのも、すごくいいことです。しゃべる時にはしゃべれても、書くと言葉にならないこともあります。逆に最近の子どもは、書かせたほうが素直に書く。しゃべらせると戸惑って、恥ずかしいという印象があるのかしゃべりたがらない子がけっこういますが、作文を書かせると面白い言葉が出てきます。だから書かせることも並行して行う。これが写真の面白さではないか。一面的ではなく、多面的なことに活用できる要素を持っているツールだから、われわれももっと活用しないと。

実は当初、富士フィルムに話したときに私が考えていたのは中学生でした。ちょうどデジタルカメラが始めた頃で、同じ時間にたとえば北海道の子が撮つたものと沖縄の子が撮つたものを同時配信したらどういうことになるのか。写真を交換したらどうなるのか、提案したことがあります。諸事情で実現しませんでしたが、私たちは同じ日本人でいながら、北と南でこれだけ考え方や見方、光も違う。それを同時に体験できるのはデジタルだし、多様性はそういうところから生まれるのではないか。これからはデジタルでやっていかざるを得ない時代ですが、それをどう活用するかも考えないと発展していくかと思います。

ものの見方の多様性への気づき

足立 写真を撮る上でのルールや約束事も、同時に教えていかなくてはいけないと思います。

松本 それは学校の先生が事前に話していると思いま



自分の作品について撮影意図を発表（撮影・大野隆志）

す。残ったフィルムを家に持ち帰って撮ってらっしゃいと言っても、今はいろいろ難しい家庭もありますし、本人がいいと思っても、家族は写真を撮られるのがイヤな場合もありますから。

大野 僕は、注意書きの大事な点は赤で○をしていくようにと子どもたちに言っています。

松本 子どもが家から学校まで行くまでのわずか15分の間に、何があって、どんな景色があるか。「メモしてごらん」というと、けっこう間違ったことを言うケースもあります。あそこにお地蔵さんがあって、あそこの犬はよく吠えてとかね。意外と記憶としてはあって、記録されていない。そこから写真に入っていくのも、ひとつの手だよと言ったりもしています。

飯田 カメラを手にして初めて、意識して物を見るようになるんですよね。この写真は誰に見られるのかということも意識しますし、家の中だけで見るならいいけれど、クラスメイトに見せるならどうなのか、あるいはぜんぜん知らない人が見る写真ならどうするのか。考えることで、撮り方も変わったりする。また、普段何気なくすごして見えている世界が、改めて意識すると、実はちゃんと見ていなかったことに気がつく。そこも大事かなと感じています。

松本 今日は総括会ですので、こういうことが委員会としてきっちりまとめていけたら、次へのステップの手がかりになるだろうと思います。

— 今は楽しみが多いから、写真が端に追いやられがちです。写真を使ってどう楽しむか、子どもたちにも体験してもらいたいですね。

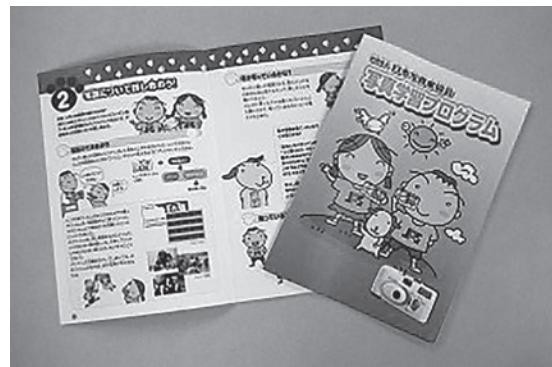
松本 今は新聞をとる家も減っていますが、たとえば同じできごとをA社はどう撮り、B社はどう撮っているのか。どういう位置から撮ると、違いが出るのか。これはジャーナリズム論にもつながりますが、そうやって比較するのも大事だよと話してあげるのもいいことだと思います。

飯田 私は自由に撮らせる中で、必ず「これを撮りましょう」という共通のテーマも出しています。すると、人によって多様な見方があり、撮り方があるという違いが見えてきます。

松本 これから先、協力してくれる企業がデジタルで



はじめてのフィルムネガに興味津々（撮影・飯田裕子）



やってほしいと言えば、そなならざるをえないでしょう。写真そのものは、デジタルでもフィルムでも変わらないで、時代に即して変化していくべきだと思います。ただ、レンズつきフィルムは今後もなくならないでしょう。というのも、小学校で修学旅行に持つていいカメラは、レンズつきフィルムと決めているところも多いので。デジカメだと、なくしたり壊したりという心配がありますから。

飯田 今後たとえデジタルになったとしても、教室でフィルムカメラを見せて、仕組みを説明するのもいいでしょうね。

— 本日はどうもありがとうございました。

(構成／篠藤ゆり、撮影／出版広報委員：小城崇史)



写真と台紙の色のバランスやタイトルの効果も体験（撮影・飯田裕子）



毎日顔をあわせているクラスメートの作品に、知らない一面も感じたり…（撮影・飯田裕子）

10年目を迎えた「日本写真保存センター」

「日本写真保存センター」が行っている写真原板の収集・保存と閲覧に向けての活動に関心が高まっている。まず、収集している写真家の層に厚みが増しバラエティーに富んできたこと、それに伴い写真原板の収集数が増えてきたことだ。ドキュメントでは山端庸介や菊池俊吉の原爆関係、佐伯義勝の砂川や内灘闘争、50～60年代の瀬戸内に暮らす人々を撮った緑川洋一、木村伊兵衛の『前進座』、吉田茂首相を撮った吉岡専造、戦前の内閣情報部が発行した『写真週報』に関する写真から、社寺仏閣建築の渡辺義雄、恒成一訓。女性をテーマとした佐藤明、松島進など写真史を飾る作品が次々と収蔵されている。

ここに至るには約10年を要したが、保存センター設立に向けて大きな弾みとご支援を頂いている森山眞弓、細田博之、与謝野馨先生からのメッセージを、会員諸氏にお伝えする。

(副会長：松本徳彦)

写真保存センターの設立を推進

森山眞弓（談）

2001(平成13)年5月、ときの田沼武能会長が「写真原板の保存の必要性」を提唱し、協会内に設立基金を設けることを決めた。2006(平成18)年3月14日、「日本写真保存センター」設立発起人会を開き、推進するための「日本写真保存センター設立推進連盟」を設立し、代表に森山眞弓、副代表に田沼武能を選び活動を始めた。そのときの様子を松本徳彦が森山先生に伺った。

先生は「そうですね。田沼さんから、師匠の木村伊兵衛のネガ(写真原板)の一部が溶けて無くなっていたと聞いたんです。驚きましたね。フィルムを保存する施設が必要なんですね。戦後間もなく活躍された写真家のフィルムが使えなくなるんですね。困りましたね」と。田沼はすぐさま「JPSでネガを保存する〈日本写真保存センター〉の設立を考えていますが、財源をどうするか悩んでいます。森山先生、文化庁に設立を働きかけたいのですが、先生に発起人代表を務めていただき、設立運動を始めたいのですが…」と懇願する。

森山先生は「保存は大切なことですね。趣旨に賛同しましょう。それには力のある政治家にも発起人をお願いしてはどうでしょう」と応えられ、すぐさま「発起人には元総理の福田康夫さん、文部大臣を務められたことのある河村建夫、鳩山邦夫、中曾根弘文さんと財務大臣だった与謝野馨さん、それに細田博之さんはどうでしょう」と言って、後日連絡が入る。

2006年3月14日、「日本写真保存センター設立推進連盟」を発



文化庁高塩次長ら幹部を前に、森山先生と田沼が設立を要請する。(2006年5月)

撮影：松本徳彦

足させ、5月25日、文化庁に設立要望書を提出する。写真を見ながら先生は「そうでしたね。文化庁で次長など幹部に趣旨の説明をしましたね。2カ月ほどして、次長から予算が取れましたよ。900万円ですがこれでスタートして下さいと返事があった」と、当時の経緯を話された。

文化庁委嘱の調査研究を始める

2006年12月20日、文化庁から平成19年度の委嘱事業「我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」に予算が付き調査活動に入る。

2010年5月、文化庁から相模原のフィルムセンターの収蔵棟の一部(500m²)を写真家協会に貸出することについて、東京国立近代美術館と協議を始める。

文化庁は2011年1月から「文化関係資料のアーカイブ構築に関する調査研究」に発展させ、写真原板の収集およびアーカイブ構築に関する調査研究として費用(1,800万円)の増額が認められた。

森山先生は「そうだったわね。皆さんの努力が認められたんですよ。あとは収集数だけでなく、内容の充実、質を高め、利活用の実績を上げることでしょうね」と抱負を語られた。

その後、森山先生は体調を崩され2013年11月、設立促進連盟の代表を細田博之衆議院議員(自由民主党幹事長代行)に譲られ、自らは最高顧問に就任された。

戦後を撮影した米兵の写真を全米から収集

細田博之

公益社団法人 日本写真家協会の関係者の皆様が、田沼武能前会長を先頭に永年にわたって先人が蓄積された写真を保存し伝承するご努力を重ねておられることに、深甚なる敬意を表します。

私は森山眞弓先生のご指導により、日本写真保存センターの活動推進のために微力をささげておりますことはまことに有意義なことと存じております。

かく申す私は、過去にアメリカ合衆国における終戦直後の我が国の写真を発掘し、出版し伝承の一端を担わせていただいたことを誇りに思っております。

1980年にアメリカのワシントンD.C.に留学した際、私は元駐留軍の陸軍中尉のスチール氏の家に下宿しました。スチール夫妻は日本で知り合って東京で結婚し、親日的で私を歓待してくれました。ある日、スチール氏が当時の日本の写真をポジフィルムで見せ

てくれ、昨日撮影したかと思うほど鮮明なカラー写真に私は驚きました。

私は1983年に再びワシントンD.C.に赴任することとなり、政府の特殊法人石油公団のワシントン事務所長として着任し、早速スチール夫妻と旧交をあたためました。その時に思いついたことは、当時の駐留軍兵士が日本を撮影した写真を全米から収集しようということでした。

スチール氏はこの計画に賛成し、全米の在郷軍人会、退役軍人会に広告を出し、写真集めに着手してくれました。全米から集まつた写真は数千枚、単純に富士山などを撮影した風景写真を除外して、当時の風物、子供達、お祭り、農民、漁民、物売り等々当時の日本を知る貴重な写真を、撮影者の著作権を確認しつつ選定しました。

当時の毎日新聞ワシントン支局の近藤、岸井、鳶、中島各氏と東京本社の岩尾記者の絶大なご努力をいただいて、1985年8月15日毎日グラフ別冊「ニッポン40年前」を出版し、約1万部の売上げとなりました。

戦後日本の戦災のなまなましいツメあと、焼け野原となった東京の写真、広島の原爆ドーム、銀座通り、京都駅前など、貴重な記録も数多く発掘されました。

2016年の今となっては撮影者はすでに95歳以上のはずで、存命者はほとんどなく、写真は完全に散逸されたであります。これが日本の財産として保存されていることは私の誇りでもあります。

写真保存センターの仕事もこの考えの延長線にあります。先人が残した過去の日本の映像、文化、伝統、生活を生き生きと伝えることが写真の最大の特徴です。

関係者各位が、この有意義な仕事を着実に継続されることを祈念し、私もそのお手伝いをする喜びをかみしめております。写真保存センターの未来のために皆様と力を合わせて推進いたしましょう。



与謝野馨 兄弟姉妹 撮影：木村伊兵衛

の写真を撮りたいと言わ
れ、その後そ
れが実現し
『アサヒカメ
ラ』の表紙を
飾った。これ
が2枚目の宝
物である。1
枚目の父母の
写真は木村
先生の写真
集や最近では
『木村伊兵衛
傑作選+エッ
セイ 僕とラ

イカ』にも掲載されている。

今から1年前、母が残した写真を整理していたら、父母の同じ
ような写真を見つけた。キャビネ判で裏にはなにやら署名がある。
そこで写真を田沼先生にお見せしたら、これは自分の署名であり、
従て自分が撮ったものであると言われた。

そこでその写真をスキャナーでパソコンに取り込み、A3まで
伸ばして田沼先生の署名を戴きにあがった。先生は喜んで署名して下さった。これが3枚目の宝物。

失礼であるがその時分、弟子の身分の田沼先生は「ライカ」など
は持つておられなかったと想像している。従て「おい田沼、これ
でお前も撮れ」ということになって、木村先生のライカで撮ったの
ではないかと思う。

しばらくして田沼先生から連絡があり、「木村先生のネガを整理
していたら、あなたが写っているものがある」と言われた。そこで
田沼先生の所にとんで行って拝見したところ、私達4人の子供の
とても表情豊かな集合写真ではないか。先生にお願いしてプロの方に
4枚を伸ばしていただいた。姉妹・弟にこれを手渡したところ皆大喜び、こんな写真があったのかと感心していた。この写真が
4枚目の宝。

余談であるが、私が高校1年生位の時、木村先生はエジプトのカ
イロに行かれた。父がエジプト大使をしており、我が家にも来られた。
私はその当時父のコンタックスで写真を撮っていたが50ミリ
の標準レンズしか持っていないかった。木村先生は私が写真を撮
っていることを知ると「撮った写真を持ってきてごらん」とおっしゃ
った。ベタ焼きの写真を何本分かお見せすると、何枚かを指さして
「これはいいね」と言われた。こんな巨匠にじかに見て頂いたことは
ひそかな自分の誇りである。

私が写真家協会とご縁ができたのは「森山眞弓」先生のおかげ
である。田沼先生はじめ協会は古いフィルムの保存運動に熱心で、
政治の世界でそのリーダーをしていたのが森山先生、私はいわば、
その方々の子分として予算獲得のお手伝いをしていた。

フィルムも経年劣化する。昔の素晴らしい作品を残すためには、
個人の力では限界があり、いわば文化を残すという国民的立場に
立たないといけないと思う。映画の保存も充実してきた。写真の
フィルムの保存にもなお一層、国が力を入れなければならないと思
う。

(2015年12月8日)

私の『宝物4枚の写真』

与謝野 鑫

私の家に飾ってある父母の写真は木村伊兵衛先生の撮ったものである。

昭和26年頃自宅の応接間で撮ったもので『アサヒカメラ』に掲載された。この時私が一部始終を見学していたが、いっぱいシャッターを切るので驚いた。写真は「はいこちら見て、ほほえんで下さい」バチと2~3枚撮るものだと考えていたが、どんどんシャッターがおされるのでフィルムがもったいないのではないかと思った。

この話を田沼武能先生にお話ししたところ「その時は私が、ライ
ト・マンをつとめていたのです」と言われた。弟子の時代の話である。その時私の姉の綾子も一緒に見ていたが、木村先生は今度姉

「日本写真保存センター」調査活動報告(20)

家族の暮らし、戦時下の訓練、戦後を生きる

松本 徳彦（副会長）

写真は時代の空気を端的に記録している。どこにでもある家族の記録にも時代相が克明に写っているから、観るのが楽しい。限られた人たちの道楽とまで言われた写真。写真機は勿論のこと感光材料までを輸入品に頼っていた時代はやむを得ない。昭和に入ってからは次第に戦時色が強まってくる。時の流れには逆らえないプロパガンダ。演出された写真にも真剣さがじみ出ている。敗戦により時代は大きく変化した。そうした変動は撮る人たちにも大きく影響を及ぼしている。当然ながら被写体の選択から捉え方まで、作者の個性が如実に表出している。写真是社会を写す鏡のようだ。

辻本満丸（1877～1940）

家族の歴史をガラス乾板で残す

大正から昭和初期の家族をさまざまにシチュエーションで捉えたガラス乾板 1,081 枚が川崎市市民ミュージアムから寄贈された。そこには辻本家の家族構成から暮らしぶりが丁寧に記録されていた。大正期の着物姿、髪形、家具や調度品などと共に、使用人の立ち居振る舞い、服装に至るまでがしっかりととらえられている。当時の面影を知ることのできる貴重な記録である。たかが「家族写真」ではないかと思われるかも知れないが、そこには撮影者の意図を超えて、時代の影や因習、風習といったものまでを読み解くことができる。辻本家の生活様式、環境と奥深くにまで導かれるから面白い。

辻本氏は明治から昭和初期にかけて活躍された応用化学者で、東京帝国大学を卒業して農商務省工業試験所で油脂化学を研究。「サメの肝油からスクアレンを発見」、「油脂の研究」権威として学士院恩賜賞を受けるなど稀有な学者として知られる。若いころから写真に興味を持ち、風俗や山岳の写真を数多く撮る。その中に含まれる家族の写真は、学者らしい緻密な眼差しが漂っている。



辻本満丸：「家族の記録—乳母と子供たち」
大正末から昭和初期



辻本満丸：「家族の記録—乳母車」大正末から昭和初期

国家宣伝グラフ誌『写真週報』から 戦時下のニッポンを見る

『写真週報』は日中戦争が始まって間もなくの 1938 (昭和 13) 年 2 月 16 日、ときの内閣情報部が政府の広報宣伝政策の一環として、国政や法令などを国民や各官公庁に周知させるために、『官報』の付属刊行物として発行したものである。内容は大衆に読みやすく、親しみやすい、民衆の心を引き付けるものとして、写真をふんだんに使った国家宣伝グラフ週刊誌であった。誌面



撮影者不詳：『写真週報』255 号 1943 年 1 月 20 日号
必殺の一撃 銃剣術の猛訓練 海軍航空隊

構成は「国威発揚」「時局認識」「情報伝達」「知的刺激」からなつていて、オフセット・カラー印刷の見応えのするものであった。発行部数も当時としては最大40万部と破格の扱いであった。撮影は国内外の通信社と内閣情報部、南満州鉄道会社などと、木村伊兵衛(創刊号の表紙)、土門拳、小石清、永田一條、加藤恭平、梅本貞男、光墨弘、不動健治、山端庸介など錚々たるメンバーがあつた。

発行当初の誌面は、日中戦争の華々しさを謳いあげ、銃後の守りを啓発するものが多く、不用品交換即売会、廃品を活かしましょう、国民精神総動員と生産拡大、時局下の学生生活、満蒙開拓青少年団義勇軍といった国威発揚のスローガンが目立つ。国民総動員迫る！銃後の守りは女性の力で、国を挙げての戦争に猛進。掲載写真もそうした戦時体制を煽る記事に満ちていた。

緑川洋一（1915～2001） 瀬戸内の暮らしから国立公園の風景写真

緑川洋一は1915年、瀬戸内に面した岡山県邑久郡で生まれる。旧制中学を卒業し、日本大学歯科医学校に入学。卒業後、東京鎌田の総合病院に就職。1937年郷里に



撮影者不詳：『写真週報』231号 1942年7月29日号 非常呼集の発令。防火訓練 茨城県多賀高等工業学校

衛(創刊号の表紙)、土門拳、小石清、永田一條、加藤恭平、梅本貞男、光墨弘、不動健治、山端庸介など錚々たるメンバーがあつた。

帰り「横山歯科医院」を開業する。1939年頃から緑川洋一の名で作品を発表。『写真サロン』で「静物」が入選し、アマチュア写真家として活動を始める。

1941年『写真文化』に組み写真、「石の出る南の島の瀬戸内海－北木島」を発表し話題となる。引き続き「グラフ塩田 塩は戦時下重要資源である」を、翌年には「農村の記録 二つの農法」、出征兵士の家族の記録や「銃後の生活」などを発表する。戦時体制下で渋々と軍の命令に従いながら発表活動をする。

戦後は岡山市内で先輩の石津良介と写真工房開設。ファッショナブルな女性写真や風景写真を制作し額入り写真を店舗などに貸出すなどした。1947年、石津の紹介で米子の植田正治とともに、東京の「銀龍社」に参加し作品発表を続ける。1953年、二科会に写真部が創設されると「備前の裸祭」を出品し、第1回二科賞を受賞。この頃から精力的に「瀬戸の海」をテーマとする独創的な構成による風景写真を次々と発表する。1958年のキヤノンフォトコンテストで「人形師の娘」が最高賞を受けると、賞金で翌年、ヨーロッパを周遊し嘆美な風景写真を発表。1960年には写真集『ヨーロッパの風景』、『瀬戸内海』を発表し、各種の写真賞を総なめにする。以後、名実ともに色彩の魔術師と言われる個性的な風景写真の第一人者として君臨する。

戦中から瀬戸内の人々の暮らしに興味を持った緑川の、瀬戸の小島で働く人たちを捉えた作品は、ドキュメンタリーとして今日もその的確さが光っている。

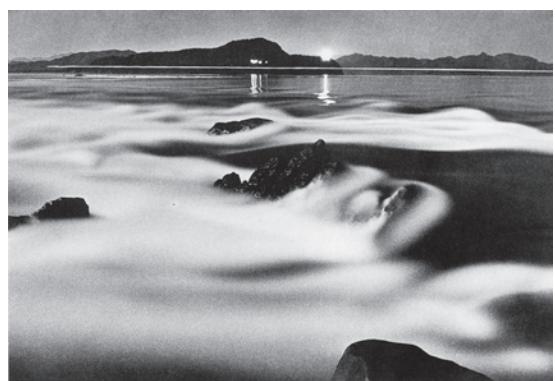
お願い

あなたの写真原板（フィルム、乾板等）は大丈夫ですか？ 現像済みのフィルムは支持体の性質上、時間が経過すると経年劣化が起ります。保管箱を開けて、酢酸臭がするようでしたら、ビネガーシンドロームが起こっています。急いで、「写真保存センター」にお問い合わせください。

TEL:03-3265-7451 又は 03-6272-4331



緑川洋一：「石灰工場の人々」 1954年



緑川洋一：「夜の鳴門急潮」 1950年

石新智規（弁護士）

日本が TPP(環太平洋パートナーシップ)協定に参加表明したのは 2013 年 7 月です。内閣官房の資料には、TPP 協定の意義はモノの関税だけでなく、サービス、投資の自由化を進め、さらには知的財産、電子商取引、国有企業の規律、環境など、幅広い分野で 21 世紀型のルールを構築するものと、意義が強調されています。これまで、著作権委員会を中心に政府の TPP 対策本部による説明会に何度も参加してきましたが、具体的な内容は一切示されず、どのような交渉が進められているのかすら判りませんでした。永い協議を経て、2015 年 10 月参加 12ヶ国により大筋合意が発表されました。今回は私たち写真家に直接関係する著作権保護期間の延長や法廷損害賠償制度、著作権侵害の非親告罪化を中心に著作権分野の解説をお願いしました。

（著作権委員会 堀切保郎）

1. はじめに

2015(平成 27)年 10 月 5 日、さまざま議論を巻き起こした（著作権研究 24 参照）TPP（環太平洋パートナーシップ）協定は合意に至り、各国がその合意内容を履行するステージに移行しました。本稿では、TPP 協定に伴い日本の著作権法の改正が予想される点を紹介します（紙面の関係で一部省略します）。著作権を含む知的財産権については、合意文書の第 18 章（知的財産権）に記載されています。

2. 著作権保護期間の延長

合意文書第 18.63 条「著作権及び関連する権利の保護期間」に定められています。

「各締約国は、著作物、実演又はレコードの保護期間を計算する場合について、次のことを定める。

- (a)自然人の生存期間に基づいて計算される場合には、保護期間は、著作者の生存期間及び著作者の死の後少なくとも 70 年とすること。
- (b)自然人の生存期間に基づいて計算されない場合には、保護期間は、次のいずれかの期間とすること。
 - (i)当該著作物、実演又はレコードの権利者の許諾を得た最初の公表の年の終わりから少なくとも 70 年
 - (ii)当該著作物、実演又はレコードの創作から 25 年以内に権利者の許諾を得た公表が行われない場合には、著作物、実演又はレコードの創作の年の終わりから少なくとも 70 年」

現行法の著作権保護期間は、自然人の著作物の場合、著作者の死後 50 年（著作権法 51 条 2 項）、団体名義の著作物の場合、公表後（未公表の場合は創作後）50 年です（同 53 条）。但し、映画の著作物については、公表後（未公

表の場合は創作後）70 年です（同 54 条）。また、著作隣接権については、起算点について権利（実演家の権利・レコード製作者の権利・放送事業者の権利）ごとに差がありますが、その各起算点から 50 年です（同 101 条）。

したがって、すでに 70 年の保護期間となっている映画の著作物と延長合意の対象から外れている放送事業者（放送・有線放送）の権利を除き、保護期間を 70 年に延長する必要があります。

今後は、延長の可否から、延長に伴う弊害除去のための制度構築へと議論が移行するようと思われます。

3. 技術的保護手段

合意文書第 18.68 条で次のように定められています。「各締約国は、著作者…が自己の権利の行使に関連して用い、…その著作物…（略）…について許諾されていない行為を抑制する効果的な技術的手段に適当な法的保護を与え、…技術的手段の回避に対する効果的かつ法的な救済措置を講ずるため、次の…行為を行う者が第 18.74 条（民事上及び行政上の手続・救済措置）に規定する救済措置について責任を負い、…当該救済措置に従うことを定める。」

問題とされる行為は、(a)著作物の利用を管理する効果的な技術的手段を権限なく回避する（故意又は重過失の）行為と(b)一定の要件を満たす技術的手段を回避するための装置・製品等を製造・販売等する行為です。

①著作物の無許諾利用を制限するために付加された技術的手段（コピー制御信号・アクセス制御信号など）を故意・重過失で回避する行為と②回避するための装置等を製造・販売等する行為に対する法的救済措置・刑事罰を設けることが義務づけられています。

現行法は、技術的手段を破って複製を故意に行う場合、仮に私的複製であっても違法である旨を定めていますが

(著作権法 30 条 1 項 2 号)、複製の前の「回避する行為」それ自体については、それを営利目的で(条文では「業として」)行う場合に刑事罰が科されること(同法 120 条の 2、2 号)を除き、救済措置を定めておりません。

よって、技術的保護手段の回避行為自体について、民事・刑事上の救済措置を講じる必要があると思われます。

なお、前記(b)技術的手段を回避するための装置の製造・販売等について、現行法上、刑事罰が科されます(著作権法 120 条の 2、1 号)、民事上の救済措置については特に定めがありません。しかし、不正競争防止法において、映像の視聴等について制限する手段(アクセスコントロール)を「技術的制限手段」と定義し、それを回避する装置の製造・販売等を「不正競争行為」と位置づけ、差止・損害賠償請求を認めています(同法 3 条)。よって、(b)に該当する行為は、不正競争防止法でカバーされているようにも思われます。TPP 合意と不競法上の「技術的制限手段」とに齟齬がないと判断されれば、この点は改正が不要となるでしょう。

アクセスコントロールの規制は、米国デジタルミレニアム著作権法に倣うものです。日本の著作権法は、これまで、技術的保護手段を「著作権侵害行為を回避する手段」に限定してきました。これに対し米国法は、著作権侵害行為(コピー等)のコントロールに留まらず、著作物にアクセスする行為のコントロールの回避も禁止した上で、個別具体的な例外規定のほか、3 年に一度、議会図書館長が著作権局の推奨に基づき例外を創設することができる仕組を採用しています(昨年の 10 月に新たな例外が認められたばかりです)。

著作権法上、アクセスコントロールの回避を禁止する場合、その例外をどう規律するかが、今後の課題となるかもしれません。

4. 法定損害賠償制度

18.74 条 6 項は、著作権等の侵害に対する損害賠償制度について次のように条件づけています。

「各締約国は…著作権又は関連する権利の侵害に関し、次のいずれか又は双方の損害賠償について定める制度を採用し、又は維持する。

- (a) 権利者の選択に基づいて受けることができる法定の損害賠償
- (b) 追加的な損害賠償(懲罰的損害賠償を含む)」

我が国は、侵害がなければ権利者が得ることができたであろう利益の賠償を認める填補賠償を原則とし、その損害と額の立証を要求されるのが原則です。

ここで、「法定」とは、pre-established(証明を要しない)の意であり、文字通り、立証活動を要せず、権利者が選択できる、法律上定められた「損害」の賠償であると解され

ます。そのモデルであろう米国法上の法定損害(statutory damages)は、1 作品あたり 750 ドル以上 15000 ドル以下の範囲で裁判所が正当と考える金額とされています(504 条)。権利者は権利の侵害のみを証明すれば足ります。

この点、現行法は、損害の立証の困難を軽減するために損害賠償額の推定規定(著作権法 114 条)、必要な事実の立証が困難な場合に「相当な」損害賠償を認める裁判所の裁量を認める規定(同 114 条の 5)を有します。しかし、いずれも一定の立証活動の結果として「損害」を認めるにすぎません。

填補賠償を超えた懲罰的賠償は認められておらず、それに類する「追加的賠償」に当たるものがあるとも言えないと思います。よって、推定規定で足りるとの見解もあるでしょうが、私見では、損害賠償についても法改正が必要であると思われます。

5. 著作権侵害罪の非親告罪化

第 18.77 条 6 項(g)は、「当該締約国の権限のある当局が、…告訴を必要とすることなく法的措置を開始するために職権により行動することができる」ことを要件としています。

非親告罪化は、同人誌活動をはじめとする表現活動への萎縮効果が懸念として指摘されてきたこともあり、その適用について、「市場における著作物…の利用のための権利者の能力に影響を与える場合に限定することができる」という注記が付けられています。

したがって、改正にあたり、非親告罪化をある程度大きな規模の侵害行為に限定することなどが想定され、それは妥当だと思われます。なお、政府も、二次創作への萎縮効果等が生じないよう、その対象範囲を適切に限定することをすでに明言しています。

以上、簡単にご紹介しましたが、日本の著作権法に大きな変化が求められることになりそうです。TPP 合意の内容を取り込むだけの改正になるのか、その他、新たな権利制限規定なども視野に入れた改正になるのか、今後の動向を注視する必要があります。

本稿は、平成 27 年 11 月 5 日に公表された TPP 協定暫定案文(英文テキスト)と平成 28 年 1 月 7 日に公表された日本政府の暫定仮訳に依拠している。但し、一部、省略等している箇所がある。

略歴：石新智規(いしあら ともき)

弁護士。西川シドリーオースティン法律事務所・外国法共同事業所属。元カリフォルニア大学バークレー校ロースクール客員研究员。執筆・講演等に「デジタル時代の著作権法」(ソフトウェア情報センター 2015)、「米国における著作権リフォーム」(著作権研究 39、2014)など。

朝日新聞出版

アサヒカメラが創刊 90 年

アサヒカメラ（朝日新聞出版）が今年、創刊 90 年を迎えます。1925(大正 14)年に開催されたアサヒグラフ主催「ニエプス写真百年祭」で全日本写真連盟の設立が提案、その機関紙として翌 1926 年 4 月に創刊されました。戦時下の 1942(昭和 17)年に一時休刊になりましたが、1949 年に復刊して現在に至ります。本誌では「創刊 90 年シリーズ」と題した様々な企画を始めます。まず、1 月号から短期集中連載「アサヒカメラの 90 年」がスタート。島原学さんが 90 年間の写真史を掘り起こしていきます。さらに 5 月号からは複数回にわたる「写真家と行く撮影ツアー」も。そして今年から木村伊兵衛写真賞の選考委員として、石内都さん、ホンマタカシさん、鈴木理策さんを新たに迎えました（長島有里枝さんは留任）。本誌の「90 年目の挑戦」にご期待ください。

（問い合わせ先）

朝日新聞出版

アサヒカメラ編集長 佐々木広人

電話 03-5541-8785

FAX 03-5565-3286

E-mail sasaki-h4@asahi.com

Web <http://dot.asahi.com/asahicameranet/>

ニコン イメージング ジャパン

デジタル一眼レフカメラ「D5」「D500」、
スピードライト「SB-5000」発表



デジタル一眼レフカメラ「D5」

格段に向上した動体捕捉力や高感度画質をはじめとする高いパフォーマンスで、幅広いシーンと被写体に対応したフラッグシップモデルです。新開発のニコン FX フォー

マット CMOS センサーと新画像処理エンジン「EXPED 5」により、ニコン史上最高の常用感度 ISO 102400 を実現。XQD-Type/CF-Type の 2 タイプから選択可能な同種メディア 2 枚が使えるメモリーカードダブルスロットを搭載しています。

デジタル一眼レフカメラ「D500」

「D5」と同等の新世代の 153 点 AF システムを搭載。最高約 10 コマ / 秒の高速連続撮影時にも確実に被写体を捕捉します。また、新画像処理エンジン「EXPED 5」と新開発のニコン DX フォーマット CMOS センサーの採用で、静止画、動画ともに常用感度 ISO 100 ~ 51200 の広い感度域で高画質を実現しています。

スピードライト「SB-5000」

ニコンスピードライトで初めて、電波制御によるワイヤレス増灯撮影が行える「電波制御アドバンストワイヤレスライティング」や、連続発光回数を大幅に向上させる「クーリングシステム」などを搭載しています。

詳細は下記にてご確認ください。

【製品に関するお問合せ】

株式会社ニコンイメージングジャパン

ニコンカスタマーサポートセンター ナビダイヤル

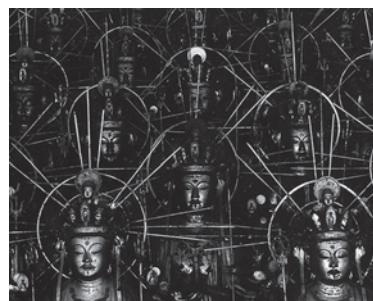
0570-02-8000

www.nikon-image.com

東京工芸大学

土門拳写真展「古寺巡礼」

2016 年 1 月 25 日(月)~3 月 25 日(金)



本展は、写大ギャラリコレクションより、昭和の写真界の巨匠 土門拳の代表作のひとつである「古寺巡礼」シリーズから代表的な作品を展示するものです。同シリーズは、土門が 1939(昭和 14)年に室生寺を訪れ、その後、中宮寺・広隆寺にて弥勒菩薩を撮影したことから始まります。その後約 40 年間に渡り、土門が独自の眼と感性によって選んだ寺院・仏像を撮り続けたライフワークとも言える作品です。戦前から戦後、激動の時代に翻弄される人々へカメラを向ける一方で、古寺・仏像とも向き合い、そこに古来より受け継がれる日本人としてのアイデンティティーを見出そうとした、土門の熱く真摯なまなざしを、本展のオリジナル・プリントから感じ取って頂けたらと

存じます。

尚、本展は、写大ギャラリー開設 40 周年を記念して 2015 年 10 月に新潟市新津美術館で開催された「土門拳写真展 - 古寺巡礼 - 」にて展示された写大ギャラリー土門拳コレクションの中から作品を別選し、展示するものです。(10:00 ~ 20:00 開館 会期中無休・入場無料)

東京工芸大学 写大ギャラリー

担当：吉野・堀田

〒 164-8678

東京都中野区本町 2-4-7 芸術情報館 2F

TEL : 03-3372-1321 (代)

FAX : 03-5388-7996

<http://www.t-kougei.ac.jp/arts/shadai/>

キタムラ

カメラのキタムラ×読売新聞東京本社
日本初！

「読売新聞 10 大ニュース」が入った写
真プリントを開始

株式会社キタムラは、株式会社読売新聞東京本社と提携して、読売新聞読者が選んだ年間の 10 大ニュース紙面を入れた「読売新聞フレームプリント」を、2016 年 1 月 7 日より全国のカメラのキタムラ店頭で受付開始いたします。

「読売新聞フレームプリント」は、スマートフォンやデジカメで撮影した写真を「読売新聞 10 大ニュース」紙面が入ったテンプレートにはめ込んで、A4 サイズの写真にプリントにする、カメラのキタムラ限定のサービスです。記念の年に起きた 10 大ニュースと写真を残すことで、当時の時代背景や出来事を思い出と一緒に振りかえることができます。成人式や誕生などの、時間が経つほど貴重な思い出に変わる写真におすすめです。

また、お祝いの贈り物としても喜ばれます。



問い合わせ先

株式会社キタムラ

管理部・販売促進部 広報担当 佐藤 卓

<http://www.kitamura.jp/>

クレヴィス

写真展「木村伊兵衛 パリ残像」
4月1日(金)～4月24日(日)
美術館「えき」KYOTOにて開催



戦後間もない日本では海外渡航がきわめて難しく、芸術の都パリは遠い遙かな夢の世界でもありました。1954(昭和29)年、初めて念願のヨーロッパ取材が叶った木村伊兵衛はライカと開発されたばかりの国産カラーフィルムを手に渡仏、カルティエ=ブレッソンやロペール・ドアノーと親交を深め、その案内で生きたパリの町並みと下町の庶民のドラマを見ることができました。木村作品のなかでもとりわけ異色なカラー表現されたパリは、撮影後半世紀を経て、アルル国際写真フェスティバルやパリ市庁舎写真展などで紹介され、あらためて国際的な評価を受けることになりました。約130点のカラー作品から往時のパリの魅力が蘇ります。

会期：4月1日(金)～4月24日(日)会期中無休

会場：美術館「えき」KYOTO(京都駅ビル内)

開館時間：午前10時～午後8時

入館料：一般900円(前売700円)ほか

問合せ：ジェイアール京都伊勢丹

TEL 075-352-1111(大代表)

■ギャラリートーク

4月1日(金)田沼武氏

4月9日(土)今森光彥氏

各日①午前11時から②午後2時から 各回約30分

(企画) クレヴィス

担当:木村麻紀子

TEL 03-6427-2806

E-mail info@crevis.jp

HP www.crevis.co.jp

ライカカメラジャパン

新製品ライカSL

ライカカメラジャパン株式会社は、写真の世界の新時代を切りひらく、“Made in Germany”ミラーレスシステムカメラ「ライカSL」および標準ズームレンズ「ライカバ



リオ・エルマリート SL f2.8/24-90mm ASPH.」を発売しました。「ライカSL」は高度な革新技術を取り入れたカメラで、2400万画素のフルサイズCMOSセンサーを搭載し、ライカ品質のレンズ群との相乗効果により、圧倒的な描写力を発揮します。独自に開発した電子ビューファインダー「EyeRes ファインダー」は440万ドットと高解像度で、処理性能が極めて高く、被写体をクリアに素早くとらえることができます。また、高性能な画像処理エンジン「LEICA MAESTRO II」の採用により高速処理を実現し、2GBのパッファメモリーとの組み合わせにより、静止画では最大記録画素数で最高11コマ/秒の高速連写を実現しています。そのほか、動画撮影機能も卓越していて、プロフェッショナル水準の4K動画が撮影できるので、本格的なビデオカメラとして映像関係者の厳しい要求にも応えます。ボディは無垢のアルミニウムから削り出し、ディケートな内部をしっかりと保護するとともに軽量さも実現しています。

ライカカメラジャパン株式会社

企画部 米山和久

TEL 03-5221-9501

e-mail: info@leica-camera.co.jp

サイバーグラフィックス

ISO25 から 3200 まで、35ミリから 8
× 10 まで多彩なフィルムが揃う
ILFORD PHOTO モノクロフィルム

写真的デジタル化が急速に進む中 ILFORD PHOTO モノクロフィルムはラインナップ縮小も無く推移しております。

ISO25 の PANF PLUS、ISO125 の FP4 PLUS、ISO400 の HP5 PLUS の三種類は豊かな階調表現に定評があります。また、ISO100 の DELTA100、ISO400 の DELTA400、ISO3200 の DELTA3200 は新たな技術により超微粒子という特長を持っています。この他、カラーネガ現像処理をする XP-2、赤外線感度をもつ SFX200 まで8種類のフィルムがラインナップされています。これらのフィルムのサイズラインナップも下表の通り豊富です。

名称 (略称)	135-36EX 120	35mm100ft.	4X5	8X10
PANF	○	○	○	
FP4	○	○	○	○ ○
HP5	○	○	○	○ ○
D.100	○	○	○	
D.400	○	○	○	
D.3200	○	○		
XP-2	○	○		
SFX200	○	○		

これからも、ILFORD PHOTO モノクロフィルムをご愛用のほど、お願い致します。

サイバーグラフィックス株式会社

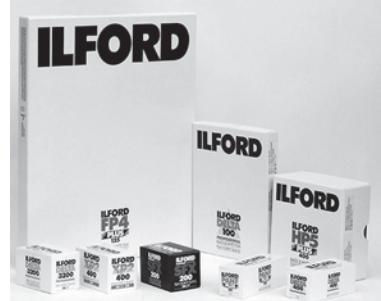
担当: 堀口

〒224-0053 神奈川県横浜市都筑区池辺町 2991-2

TEL: 050-5533-3302

FAX: 045-938-6702

E-mail: cgc_sails.751039@cybergraphics.co.jp



URL <http://www.cybergraphics.co.jp>

キヤノンマーケティング ジャパン

5,060万画素の圧倒的な高画質を実現した EOS 5Ds/EOS 5Ds R

“EOS 5Ds”は、キヤノン独自開発の有効画素数約5,060万画素のCMOSセンサーを搭載し、圧倒的な高解像度の撮影を実現しています。また、“EOS 5Ds R”は、偽色やモアレの抑制よりも解像度を優先するユーザー向けに、“EOS 5Ds”からローパスフィルター効果をキャンセルしたさらなる高解像モデルです。

キヤノン独自開発の有効画素数約5,060万画素の35mmフルサイズCMOSセンサーと、映像エンジン2基からなるデュアルDIGIC 6を採用しており、高画素を実現しながらも、最高約5コマ/秒の高速連写や常用最高ISO感度6400(拡張ISO12800)などの優れた基本性能を同時に達成しています。



■商品に関する問い合わせ先

キヤノンお客様相談センター TEL050-555-90002

canon.jp/5ds

(各社からお送りいただいた原稿をそのまま掲載しました。構成伏見行介)

第9回 JPS フォトフォーラム

(2015年11月7日：有楽町朝日ホール)

主催：公益社団法人 日本写真家協会、朝日新聞出版「アサヒカメラ」 後援：文化庁

今回のテーマ：**「地球を語る！」**

熊切圭介 会長 「挨拶」

このフォトフォーラムは、写真の持つ魅力や表現力を多面的に探していくこうということを始めました。ですからいわゆるハウツーものとはひと味もふた味も違う内容になると思います。最近はデジタル技術の急速な発展によって、写真表現そのものが変わってきてています。そういうなかで、本日の3人の方は、人間あるいは自然を、地球を駆けめぐり回って探っている。ですから3人が東京で集まるというのは、とても珍しいことです。どうぞごゆっくり、お楽しみください。



清水哲郎 Shimizu Tetsuro

「ゲルや草原だけではない、多面的なモンゴルの姿を伝えたい」

海外渡航歴は69回。そのうち40回がモンゴルです。行き始めたのは1997年ですが、なぜ興味を持ったかというと、多摩動物公園でユキヒョウに一目惚れをしてしまったのです。なんとかこれを撮影したいと思い生息地に行きましたが、足跡や痕跡は見つけられてもなかなか撮れない。そこでユキヒョウ取材をちょっとお休みして、モンゴル中をまわって風景や人を撮るようになりました。

最初の2回くらいは通訳を雇っていましたが、節約のために自分でモンゴル語会話集をつくり、徐々に語彙を増やしながら旅をしました。そうやって言葉を習得できたからこそ、撮れたものもある。たとえばマンホールの中で暮らす子どもたち。最初はカメラを持たず町を歩き回り、子どもたちに声をかけて中に入り、ようやく撮ることができました。そういう子たちの存在

をより多くの人に知ってもらいたいと思い、名取賞に応募しました。

最近は原始の風景を撮りたいなと思って、さらに奥地に行っています。人も住めない場所ですが、奇岩なども多く、本当に美しい。砂嵐の時は、撮っているそばから自分が砂に埋もれていきます。



現在、金鉱山の写真を発表する準備をしています。僕も40歳になりました。寒中水泳とか罰ゲームみたいなことをやりつつ撮影していますが、モンゴルのいろいろな面をこれからもお伝えしたいと思っています。

【しみず・てつろう】 1975年横浜市生まれ。日本写真芸術専門学校卒業後、竹内敏信事務所の助手を務め、23歳でフリーランスに。独自の視点で自然風景からドキュメンタリーまで幅広く撮影。2005年「路上少年」で第1回名取洋之助写真賞受賞。2012年写真集『CHANGE』をモンゴルで上梓。日経ナショナル ジオグラフィック賞 2013年ピープル部門優秀賞・2014年日本写真協会賞新人賞受賞。

毎年恒例となったフォトフォーラムが2015年11月7日、有楽町朝日ホール(東京都千代田区)で開催されました。

今回は清水哲朗氏、前川貴行氏、高砂淳二氏を招き、「地球を語る!」というテーマで行われました。

常連の方々も多くみられるなか、今回は451名もの参加者でほぼ満席となり、各氏の講演に続き『アサヒカメラ』編集長の佐々木広人氏の司会でパネルディスカッションが繰り広げられ、写真談議に浸るひと時を楽しみました。また、ロビーではパネリスト4名による作品講評会、JPS展、写真著作権、日本写真保存センターの各コーナーが設けられ、講演の合間に多くの参加者が賑わいました。

前川貴行 *Maekawa Takayuki*

「撮影時に動物に害を与えないよう注意しながら、写真で自然の姿を伝えたい」

30歳でフリーになった際、まずクマの仲間をテーマに据えました。アラスカでグリズリーやブラックベアを撮影したのですが、本格的に取材を始めたのはホッキョクグマからです。その頃から地球温暖化が言われていましたが、現地の人によると、やはり氷の張り方が遅くなっているという。極地は環境の変動が大きく現れるのだと実感しました。

クマと並行して、アメリカの国鳥ハクトウワシも追いました。ニューファンドランド島の崖の近くでキャンプをし、毎日営巣地に通って、子育ての様子を撮影しました。ハクトウワシは家畜を襲うため、かつてかなり駆除されました。また食物連鎖の頂点にいるため有害な化学物質の影響も受けやすく、一時は絶滅の危機に瀕していました。現在は環境保護や農薬の規制のおかげで個体数が回復し、絶滅危惧種から外されています。

最近は大型類人猿を追いかけています。4種いる大型類人猿のうち、ゴリラが生息しているのはアフリカです。アフリカは多くの動物写真家が撮影しているので、今さらという気持ちもありました。しかし2011年にゴリラを撮りに行き、こんなすごい生命の楽園がまだ地球に残っていたのかと痛感し、それ以来通っています。アフリカは撮り尽くされたと言う人もいますが、写真家によって感覚も違うし、腰を落ち着けて粘ればオリジナルな写真が撮れる可能性はまだあると感じています。



【まえかわ・たかゆき】1969年東京生まれ。エンジニアとしてコンピュータ関連会社に勤務した後、26歳の頃から独学で写真を始める。97年より動物写真家・田中光常氏の助手を務め、2000年にフリーの動物写真家に。日本、北米、アフリカ、そして近年はアジアにもフィールドを広げ、野生動物の生きる姿をテーマに撮影に取り組み、雑誌、写真集、写真展などで作品を発表している。2008年日本写真協会新人賞受賞、第1回日経ナショナル ジオグラフィック写真賞グランプリ。

高砂淳二 *Takasago Junji*

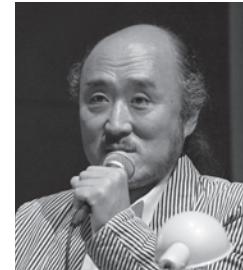
「ネイティブ・ハワイアンの自然観に触れ、撮影のスタンスが変わった」

大学時代、オーストラリアのグレートバリアリーフの海の色に衝撃を受けてダイビングを始めたら、海の中にはそれまで見たことのない世界が広がっていました。「わっ、この写真を撮りたい」と思って水中写真の世界に入りました。

海で撮影をしていると、ウミガメは人がいてもおかまいなしだし、かと思えば海の底でじーっとしているナマコみたいな生き物もいる。なぜ地球にはこれだけ多様な生物がいるのか、疑問が膨れ上がっていきました。そんな時、ネイティブ・ハワイアンのシャーマン的な人に出会い、自然哲学を教わったのです。ハワイアンは昔から自然と共に生きて、感謝と愛情をもって自然に接しています。僕もそういう気持ちで撮ろうと思いました。すると生き物にも、近づきやすくなったり。イルカとヤシの実でキャッチボールをしたこともあります

し、ペンギンの側でじーっと腹這いになっていたら、だんだん近づいてきて僕を覗き込んだり。動物にも好奇心があるんですね。

そのネイティブ・ハワイアンの方から最高の祝福とされる夜の虹の話を聞き、どうしても撮影したいと思いました。結局、それが実って本も生まれ、その後世界中の虹を撮ったり星の撮影もしました。ハワイアンは、地球は母だと思います。僕らはそこに生まれた子どもで、動物もみんな兄弟だと。兄弟姉妹や母をリスペクトする気持ちでいると、写真にも少し影響があるかなと思っています。



【たかさご・じゅんじ】1962年宮城県生まれ。90カ国以上の国々を訪れ、海の中、生物、虹、風景、星空、人など、地球全体をフィールドに撮影活動を続けている。著書は最新刊の『yes』をはじめ、『night rainbow』『ASTRA』『夜の虹の向こうへ』『Children of the Rainbow』『虹の星』『free』『BLUE』『PENGUIN ISLAND』『そら色の海』『南の夢の海へ』など多数。海の環境NPO法人“OWS”理事。

パネルディスカッション

パネリスト

清水 哲朗
前川 貴行
高砂 淳二

司会：佐々木 広人（『アサヒカメラ』編集長）

佐々木 この3人が一堂に揃うところに立ち会うのは初めてです。3人を捕まえるのは本当に大変なので、今日ご来場の皆さんには、すごくラッキーだと思います。

高砂 僕はおととい中国から帰ってきたばかりです。みんな、これに合わせて帰国します。

清水 僕はおととい
バルト三国から帰国
しました。

佐々木 皆さん地球
の奥地に行かれるの
で、本当に連絡が取
れません。編集者泣
かせですが、それを凌駕する作品を撮っておられる。清水さんは、他のお2人の作品を見てどう感じましたか？

清水 前川さんの作品は、すごくかっこいい。一枚一枚に魂が入っていて、それは前川さんの魂でもあるし、動物の魂でもある。高砂さんは逆に癒しを与えてくれるし、「売れるだろうな」と（笑）。

佐々木 清水さんの砂嵐の写真なんて、こんな過酷な現場で撮っているのか、と。まさに命懸けで撮っているのだなあと思います。

清水 片道4日かけて砂漠に行ったら、ずっと砂嵐で何も撮れない状態だったので、最終日にちょっと風に当たりに出たら大嵐になってしまい……。

佐々木 ときには-40℃の湖畔で野宿したり、車が故障して炎天下の砂漠を30キロも歩いたり。身体張りますよね。

清水 宿がないので、仕方なくテントを張って。自分の吐く息がダイヤモンドダストになるんです。日本のカメラのいいところは、壊れない。寒くてもバッテリーをこまめに替えれば問題ないですし。充電できないので、バッテリーは25個くらいもっていきます。

佐々木 前川さんは、お2人の作品をどう見ましたか？

前川 モンゴルというと皆さん、草原とゲルのイメージでしょうけど、清水さんはそれを覆す写真を撮って



見てくれる。モンゴルの開拓者みたいな存在ですね。高砂さんはベースが水中写真でしたが、水中から地上に出ても、高砂さんの世界観がシームレスにつながっている。水中から天空までひとつの線でつながっていると思いました。

佐々木 そういえば前川さん、TBSの「情熱大陸」でゴリラと闘う男みたいな描かれ方をしていましたね。あちこちで聞かれると思うのですが、ゴリラは怖くないですか？

前川 ゴリラやクマは、やはり多少は怖いです。でも慣れてくると、まあ大丈夫かな、と。ゴリラもオスのシルバーバックが食事をしている時とかは、あまり近寄ると気が立つので危ないですが、木に寄りかかってぼーっとしている時もあるんですよ。あと、子どもは自分から近寄ってきて、僕のズボンを引っ張ったりします。逆にそういうのが怖い。親がずっとくどくありますから。実際、お母さんゴリラに腕を掴まれたこともあります。僕がちょっと下がったら、許してくれました。

佐々木 そういう間合いみたいなものは、毎回手探りなんですか？

前川 そうですね。動物の種類にもありますが、性格が一頭一頭違うので、その時々見極めて判断します。

佐々木 人を撮影するのと似ていますね。高砂さんは、お2人の写真いかがですか。

高砂 清水さんは現地でどんどん人間関係を作って、溶け込んで写真を撮る。その能力はすごいなと思いました。細かくメモをとって現場の気持ちを記録するところも、見習わなければ、と。前川さんは、作品を見て、どんなふうに自然に入っていくのかが興味ありました。テレビで拝見しても、ゴリラに負けない魂を持つていて、



カメラを水中ハウジングに入れて、半分海につけて撮影したウミガメ。ハワイ 撮影：高砂淳二

っている感じが、作品の強さにつながっている気がします。

佐々木 清水さんは、命の危険に面したことはありますか？

清水 ないと思います。-40℃の中でもちょっと寝てみただけだし、炎天下の砂漠を30キロ歩いても、帰ってきたら笑える話です。山で遭難したこともあるけれど、意外と追い込まれない。死にそうだなと感じたことはありません。鈍感なのかなあ。わざわざ妙な目に遭いにいっているようなところもあるので。集中水泳の撮影をしているうちに、ミイラ取りがミイラになって、日本代表みたいな感じで飛び込んだり。ちょっと無茶しちゃおうかな、みたいな感じで(笑)。

前川 僕は一昨年、コンゴでマラリアにかかりました。去年はウガンダで足の親指が化膿して、歩けなくなったり。村の診療所で切開手術してもらいました。メスではなくて、カッターの刃なのでびっくりしましたけど。

高砂 僕はかつて毎日潜っていましたが、ふ～っと意識が遠のくことが何度かあって。潜水医学の先生に診ても



北極海沿岸のノーススロープに、季節移動で集まっていたカラリブー。アラスカ 撮影：前川貴行

佐々木 最近の皆さんのテーマは？

清水 複数のテーマを並行してやっていますが、モンゴルの金鉱山もそのひとつです。坑道に入るのですが、後ろ暗い人も集まっているし、けっこうリスクもあります。

前川 僕は、クマの撮影にまつわるエッセイと写真を混ぜた本を作っています。あとアメリカ本土で、オオカミやそれにまつわる動物など、生態系全部を含めた目線で取材する予定です。

高砂 今、まさに地球を意識することが大事だし、もう30年ほど世界を見てきたので、それをまとめて発信できないかなと考えて、この間、中国でカルスト地形の湖、黄龍で撮影してきました。

佐々木 高砂さんが中国というのは、ちょっと意外な感じがありますね。

高砂 ある人から、自然から元気をもらうのではなく、逆に写真を撮ることで自然に元気を与えることをやってみたらどうかと言われて。それで調べているうちに、中国に行きました。

佐々木 それでは質疑応答に移ります。

(質問者)

フィルムからデジタルに変わったことで、表現上で変化はあります



モンゴル北部フブスグル湖付近では馬橇が走る。

撮影：清水哲朗

か？

清水 荷物が軽くなりましたが、撮影の仕方は変わりません。僕はRAW現像はやらずに、プロラボにデータを持っていくので。フィルム代がかからなくなったので、より旅に多く行けるようになりました。

前川 僕は2002年くらいからデジタルですが、露出のプレビューができるので、安心できるのが大きいですね。あと、多少無茶な撮り方もできる。ハクトウワシのクローズアップを撮るには、ギリギリまで近づいた上で600mmでもまだ足りない。600mmのレンズにテレコンバータをつけて、エクステンションチューブをつけて、もう1個テレコンバータをつけてレンズ単体で2000mmくらいにして撮影してみたんです。ISO800ぐらいにして。それでも誌面で使えるクオリティで撮れたので、ちょっとびっくりしました。

高砂 水中だと、フィルムを入れ替えるのにいったん海からボートに上がらないといけないので。以前は36枚しか撮れなかつたのが、今は無限といえるくらい撮れるから助かっています。

佐々木 データの保存はどうしていますか？

清水 僕はノートパソコンを持っていってそこに入れるのと、外付けの小さいハードディスク、メディアをそのまま残すという3通りをやっています。

高砂 僕は容量の大きいカードをそのまま残しておき、同じハードディスクを3つ買って、そこに同じものを入れておきます。

(質問者) 海外に行く際、一番大変なことは？

前川 空港ですね。国によって機内に持ち込める荷物の量が違うので、その場でパッキングし直したりしています。

高砂 フィルムの時代は、手荷物で持ちこむにはエックス線をかけなくてはダメだ、と。そこで喧嘩になることもありました。

佐々木 最後に、これだけは撮りたいと思うものがありますか？

清水 僕はユキヒヨウを撮れずに20年たったので、ユキヒヨウでモンゴルを終わらせたいですね。

前川 一番の願いは、できるだけ長く続けたい。やはり体力勝負なので、歳をとるごとに体力は落ちますから。

高砂 僕は地球を外から撮りたいですね。

佐々木 なるほど。今日はありがとうございました。

盛況！パネリストによる作品講評会 & JPS事業活動コーナー開設

作品講評会コーナー、JPS展コーナー、著作権コーナー、日本写真保存センターコーナー

フォトフォーラム協賛：エプソン販売(株)、オリンパス(株)、キヤノンマーケティングジャパン(株)、(株)シグマ、(株)タムロン、(株)ニコンイメージングジャパン、富士フイルムイメージングシステムズ(株)
(計7社 五十音順)



JPSフォトフォーラム会場ロビーでは、休憩時間にパネリスト4人による作品講評会が行われました。

フォーラムに参加したなかから事前に申し込まれた方々が、各パネリストにプリントを見せその場で講評をいただくもので、3分間の限られたなかではありますが各参加者は充実した受講が出来たようです。各テーブルの周りには多くの見学者が幾重にも重なり、たいへん人気のコーナーとなりました。

また、昨年にひきつづき会員による 清水哲朗氏（右）による作品講評

事業活動コーナーが設けられ、「JPS展コーナー」ではJPS展作品集の販売と次回応募の案内を、「著作権コーナー」では著作権関連の書籍販売を、「日本写真保存センターコーナー」ではその活動案内が行われました。

（記／篠藤ゆり「講演、パネルディスカッション」、出版広報委員：小野吉彦
[ロビーイベント]、撮影／出版広報委員：桃井一至）



前川貴行氏（右）による作品講評



高砂淳二氏（右）による作品講評



佐々木広人氏（左）による作品講評



JPS展コーナー



著作権コーナー



日本写真保存センターコーナー

セミナー研究会レポート

◆平成 27 年度第 1 回著作権研究会◆

学ぼう！「動画」の著作権の正しい知識

平成 27 年 10 月 27 日（火）

於：JCII ビル 6 階会議室 参加者：70 名

講 師：安藤和宏（東洋大学法学部准教授、法学博士）

穂葉慶吾（k's Lagoon LLC、株式会社 Della、

音楽プロデューサー、映像作家）

天神木健一郎（JPS 会員、写真家）

デジタル一眼レフカメラで動画撮影が出来るようになって久しくなっている。現在では多くの写真家が自身の作品に、また映像制作の現場に進出しており、表現方法が拡大しているように思われる。

まず東洋大学法学部で著作権法の講義をしておられる安藤和宏先生に、現行著作権法では「動画」をどう規定しているのか、また写真家は何を知っていなければいけないのかを話していただいた。何故なら著作権法においては「動画」という文字は出てこないからである。

次に音楽プロデューサーで、自分が撮った自然映像と音楽を組み合わせた環境音楽といわれる DVD を多数発売されている穂葉慶吾氏の話となった。氏の作品は自分一人では制作できないので、利益配分を含めた権利処理の契約をした上で商品の発売まで持つて行く話は、とても興味深く、参加者からの質問も多かった。

次に天神木健一郎氏は、話題のドローンを使用して撮影した動画に音楽をのせたゴルフコースの映像を紹介した。企画、制作、撮影、音楽、編集のすべてを自身で行っており、8 分から 10 分ぐらいの作品のクオリティは映画として上映できる域に達していた。今回の作品は自主製作なので権利処理の問題は出てこないが、ドローンの操作を他の熟達者に任せた場合などは、その動画に対する権利処理が改めて必要になるかもしれないとのことである。二人以上が係わる場合、撮影意図と指示を伝えた人が撮影監督の立場になり、ドローンなど撮影機材の操作者は撮影者であるかもしれないが、「補助者」になることに十分注意しなければならないのである。

最後に著作権についてであるが、「写真」の著作権は撮影した者が主体になるから、特別な取り決めがなければ、通常、撮影者（著作者）はそのまま著作権者となる。ところが動画の場合は「映画」の著作権の範疇に入るため、撮影者（著作者）はその映画の著作物の全体的形成に対し創的かつ部分的に寄与した者となり、その著作権は映画製作者に与えられるのである。ここが「写真」と「映



画」で大きく違うところである。具体的には映画監督・撮影・美術・編集・録音等で当該映画の製作に参加した者は、著作者であるが著作権者ではなく、最終的には映画全体の著作権は映画製作者に帰属するのである。

（記／堀切保郎、撮影／佐藤昭一）

◆平成 27 年度第 2 回国際交流セミナー◆

ダライ・ラマ法王取材記

平成 27 年 11 月 9 日（金）

於：JCII ビル 6 階会議室 参加者：40 名

講 師：野田雅也（写真家）

今回のセミナーは世界各地で宗教紛争が問題となっている昨今の国際情勢を踏まえ、チベットでの撮影を精力的に続け、ダライ・ラマ法王の専属カメラマンとして活動する野田雅也氏を講師に招いて行われた。

まずは、20 代の大半を世界放浪に費やした野田氏がチベットの風土とチベット仏教の祈りの世界に魅了されていく過程が当時撮影した鳥葬場などの写真とともに紹介された。一方、外国人の自由旅行が認められていないチベットにある中国の核実験場跡地にも潜入撮影、市井に生きる人びとの本音を聞き出す取材などを通じて、中国政府の厳しいコントロール下に置かれ大手メディアが伝えきれないチベットの現状を、いかにすれば世界に広く伝えられるかを真剣に考えるようになったという。また、以前訪ねた東チベット最大の尼僧寺院ラルンガル寺が武装警察によって破壊されていく様子を記録した映像を、ある尼僧から手紙とともに託されたことが、フォトジャーナリストとして本格的にチベットに取り組む契機になった。

次に、2008 年からダラムサラ政府の公式カメラマン、2011 年からはダライ・ラマ専属カメラマンとして撮影した数多の写真とともに、ダライ・ラマ法王のダラムサラでの日常や訪日時の様子を詳しく紹介した。こうして撮影されたダライ・ラマ法王の写真は、法王の動向を伝えるサイト「dalailama.com」を通じて世界中に配信されている。



セミナー後半は、世界の紛争地の取材を続ける桃井和馬会員を聞き手に、フォトジャーナリズムの視点から捉えたより深い内容へ話が展開した。とりわけ、中国共产党政府のコントロール下にあるチベットで、転生活仏制度を軸としたチベット仏教が今後どのように継承されていくのかという問題について、野田氏は「確かにチベット仏教は危機的状況にあるが、かつての仏教がそうだったように、危機的状況の中から、より洗練された普遍的な教えが世界中に花開く可能性を感じている」と力強く応えた。

（記／竹田武史、撮影／水本俊也）

ニコンの歴史と技術を凝縮した ニコンミュージアム

2017年7月に創立100周年を迎えるニコン。その歴史と技術を一同に集めて展示するニコンミュージアムが、2015年10月、東京・品川のニコン本社ビル内にオープンした。ニコンユーザーはもちろん、カメラ関係者なら気にならない、ニコンミュージアムの様子をご紹介しよう。

■興味深い歴史とともに多彩な製品を展示

ニコンミュージアムでは、ニコンの創立から現在に至るまでの幅広い事業内容とその歩みを俯瞰することができるニコン初めての施設となる。580m²の展示スペースには、創立以来受け継がれてきた技術と伝統、そして、進化を感じられることを目的に、豊富な資料と製品、さらに体験コーナーなどが設けられて展示されている。

ニコン(当時:日本光学工業株式会社)は1917年、欧洲技術に依存しない光学工業の確立を目指して誕生した。ニコンと言えばカメラという印象が強い企業だが、そのスタート時の主たる製品は双眼鏡。開発当時の貴重な資料や製品なども展示されている。

入り口を入ると、正面にニコンミュージアムのシンボルでもある合成石英ガラスのインゴットが置かれている。世界最大級のこのインゴットは、半導体露光装置用に開発された光学素材製造技術の粋と呼べるもので、ニコンの光学素材からの一貫生産体制を象徴するものである。

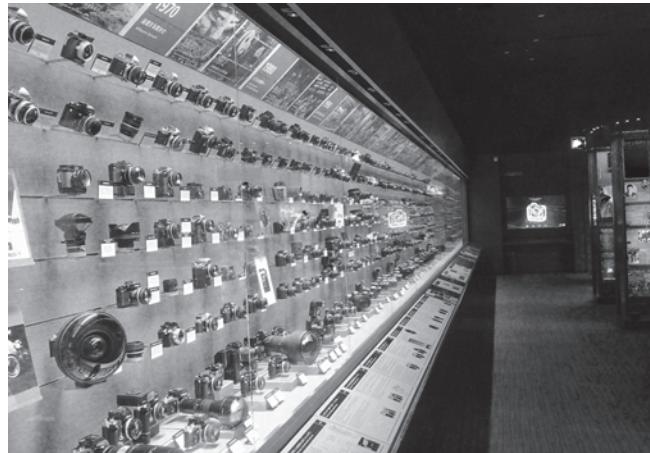
その奥のTheaterでは、作曲家、和田薰氏が手がけたニコン100周年のための交響組曲「LUX CENTURIAE

光に満ちた100年」のオーケストラ演奏と、ニコンの史実や歴代の製品を織り交ぜた動画が繰り返し上映されている。

会場は、そこから時計回りにニコンの多岐にわたる事



1918年、ニコンは双眼鏡からスタートした。初号機から現在に至るまでの製品に対するこだわりが語られている。



「映像とニコン」のコーナーには試作機や限定モデルをはじめ、レンズ交換式カメラは国内で販売されたほぼ全てが展示されている。

業と様々な製品が紹介されている。Theaterの隣に設けられているのが「レンズの実験室(監修:阿部秀之氏)」ここでは光とレンズの基礎知識を理解したり、収差を消すためのレンズ設計の基本、最新レンズの実力体験など、世代を問わず楽しめる体験スペースとなっている。

レンズの実験室に続く「映像とニコン」コーナーには、ニコンI型から最新のデジタルカメラまで、約450点がずらりと展示されている。学生時代に憧れだったカメ



ニコンI型の試作1号機。1947年に20台製作された。ロゴマークなどに量産機との違いが見られる。



試作機やデザインコンセプトなどが展示されている「トピックス展示」のコーナー。

ラ、仕事で使ってきたカメラなど、カメラに関わってきた人にとっては、感慨深い思いで目ににするに違いない。

通路を挟んで「トピックス展示」コーナーには、試作機、報道で使われたカメラ、特別仕様のカメラやデザインコンセプトといったものが展示されている。こちらは、今後テーマを変えて展示内容を変えていくのだとう。

ミュージアム最奥は、「ニコンのいま」と題されたレンズに囲まれたスペースになっており、世界各地のニコンの社員の働く姿を映像化した「Made by Nikon」が上映されている。

■ カメラにとどまらないニコンの技術を紹介

産業関連分野におけるニコンの様々な活動の様子も展示されている。

「産業とニコン」コーナーでは、半導体・FPD（フラットパネルディスプレイ）関連装置、さらにはこれらの測定・検査機器なども実物資料と映像で紹介されている。

最先端医療現場で活躍する顕微鏡の進化を紹介する「バイオ・医療機器とニコン」、天体観測機器から人工衛星に搭載される光学機器、赤外線天文衛星「あかり」の模型とともに解説する「宇宙とニコン」のコーナーへと続いている。



ニコンのCSR活動と教育や文化に対する社会貢献活動の展示コーナー。



植村直巳さんが使用したニコンF3 ウエムラスペシャルも展示されていた。

最後は、ニコンのCSR活動、社会貢献活動の展示コーナー。まさにニコンの活動のすべてが紹介されている。

開館から約3ヶ月となったニコンミュージアムだが、1日の平均来場者数は100人以上ということで、その注目の高さがうかがわれる。

入り口脇に設けられているミュージアムショップでは、オリジナルパッケージの「ニコンようかん」をはじめとするニコンミュージアムの限定商品、ポストカードやトートバッグなどのオリジナルグッズが販売されている。入館記念に何を買ったらいいか迷うほどの品揃えだ。ニコンミュージアムは入場無料で、予約も不要。気軽に訪れる事のできる博物館と言えるだろう。

(文・撮影／出版広報委員：柴田 誠)

◎ニコンミュージアム

開館時間：10:00～18:00（入館は17:30まで）

休館日：日曜日、祝日および館の定める日

入場料：無料

所在地：東京都港区港南2-15-3 品川インターナシティ

C棟2F

問い合わせ：TEL.03-6433-3900

URL：<http://www.nikon.co.jp/profile/museum/>



ニコンミュージアムの限定商品も購入できるミュージアムショップ。「ニコンようかん」は人気商品のひとつ

平成 27 年度高校写真部顧問を対象とした「デジタル写真講座」

写真力を伝える、極める

-協力：(株)ニコンイメージングジャパン、エプソン販売(株)-

全国高等学校文化連盟写真専門部との共催で催している写真部顧問を対象とした平成 27 年度第 9 回「デジタル写真講座」を、6 月 19 日宮城、10 月 3 日静岡で催した。実施に当たってはエプソン販売(株)と(株)ニコンイメージングジャパンの協力で行った。

デジタルカメラの普及は急激で、いまや高校生の大半がデジタルでの写真制作という時代になっている。顧問の先生方もこの流れに遅れまいとカメラの仕組みや使い方、インクジェットプリントの技術を習得しようと約 7 時間の講習を熱心に体験された。

1回目：平成 27 年 6 月 19 日(金)

会 場：仙台市青葉区中央市民センター

講 師：熊切圭介、足立 寛

補 助：宍戸清孝、大沼英樹

豪雨や落雷、火山活動と全国的に自然災害が相次ぐなか、宮城県内の高校写真部顧問を対象とした講座を「杜の都仙台」で実施した。県内各地からの参加者 21 名は、講習用の「ニコン D750・レンズ 24 ~ 85mm」を 1 台ずつ受け取ると、緊張の表情で席に着いた。

宮城県高等学校文化連盟写真専門部の佐々木理事から「平成 29 年に宮城県で開催される、全国高等学校総合文化祭に向けて充実した講習会とし、それぞれの学校に持ち帰って少しでも役に立つようにしていただきたい」との挨拶に続き、熊切会長が「時代の中でデジタルが多くなり、写真は広く身近なメディアとなってきた。今回の講座が生徒さんに役立つことと、デジタル写真を楽しんでいただきたい」と挨拶した。

カメラの操作説明では、撮影する基本操作を、ニコンイメージングジャパンの米岡氏がプロジェクターを使用しながら解説。3 カ月前に写真部の顧問になったばかりの初級者から、使い慣れた手つきでカメラモニターを確認する参加者までと、経験の差を感じた。

午前 10 時、約 1 キロ離れた勾当台公園で撮影実習。



勾当台公園にて女性モデルを撮影(宮城会場)

部活でカメラを持って来るよう生徒に話をしたら、スマートホンを出されて驚いた話や、東日本大震災の被災地の高校は生徒数が減って、写真部員も半分の 3 人になってしまったなど、それぞれが抱える現状を話しながら撮影現場を目指した。

公園では 2 組に分かれ、女性モデルを樹木や石段を背景に撮影。中には撮影開始 20 分で、ショット数が 280 超えの参加者もあり、ロケーションを変えながら、あっという間の 2 時間を楽しんだ。

屋外実習から戻り各自 1 枚ずつの写真を、カメラの背面モニターとパソコンモニターを使って選択し、5 組に分かれそれぞれに割り当てられたノート型パソコンとプリンターで、A4 サイズに作品を出力した。

講評会では、互いの作品を真剣に見ながら、「隣のオネエサンみたいでいいね」などという講師のコメントに、笑い声も交えながら進められた。

講話は熊切会長が、ジャーナリズムの世界から世の中の動きを見てきた「揺れ動いた 60 年代」と題したモノクローム写真約 60 枚を投影しながら解説した。その後、データの管理方法や機材のメンテナンス等の質疑では、ニコンイメージングジャパン、エプソン販売、講師がそれぞれ実例を交えて応答した。

講座終了後のアンケートには、画像加工を知りたい等の要望や、楽しく有意義な時間でしたとの感想があった。

(記／大沼英樹、撮影／宍戸清孝)



データを読み込み、作品を出力する(宮城会場)



熊切会長より作品の講評を受ける(宮城会場)

2回目：平成 27 年 10 月 3 日(日)

会 場：静岡学園高等学校

講 師：松本徳彦、桑原史成

補 助：高宮岳彦、日置真光

静岡県下の 22 校の高校写真部顧問が静岡学園高等学校へ集まり写真部顧問を対象とした「デジタル写真講座」が開催された。

始めに静岡県高等学校文化連盟写真専門部会長、石田邦明静岡学園高等学校校長よりご挨拶を頂き講習がスタート。「デジタル一眼レフカメラの操作説明」をニコンイメージングジャパン畠和宏氏より貸し出された D750 の基本的な使い方のレクチャーを受け、撮影実習に入る。モデル役を務める静岡学園高校写真部 1 年の女子部員 3 人と共に、すぐ近くの清水公園で撮影実習を行った。

静岡駅より 1.5km ほど離れた谷津山の西端に位置する公園の麓には水場や展望台があり、山頂には広場と開けた場所があるなど、バラエティーに富んだロケーションで、3 チームに分かれてそれぞれモデル撮影をすることができた。晴天に恵まれ、光の明暗の強い場所や日陰のところを選んで様々なシチュエーションで行った。モデル役も撮影が進むにつれて慣れてきて笑顔もほころびポーズも軽々とこなし、撮影は順調に進



清水公園での撮影実習(静岡会場)



撮影したデータをセレクトし、プリントを行う(静岡会場)

み、準備した SD カードの容量が足りなくなる受講者も出るほどの盛り上がりを見せて終わった。

撮影実習の場所が近いこともあり移動等に時間を取られることも少なくスムーズに進み、昼食を挟んだあと、畠氏による撮影後の処理作業を経て、エプソン販売松岡達也氏によるデジタル写真プリント基礎の説明があり、続いて「写真プリント制作実習」P C 操作(ViewNX-i)の基本操作に移り、受講者がそれぞれ A4 サイズのプリントを作成した。最新の機材ということに加えてメーカーの担当者のサポートで、ピントや色調のよい写真とプリントの質の高さに多くの受講者が驚いていた。

次いで、松本副会長、桑原理事による作品講評では、単なる写真批評に留まらず、撮影に講師が同行したことで撮影時の留意点から撮影後の写真のセレクトなど、具体的で実践的な講評になり参加者からプロの実技指導ということで満足していた。

講評の後、松本副会長による講話「スナップ写真のルールとマナー」と進み、肖像権や著作権などめったに聞けない講話に感動していた。質疑応答も活発で受講者の大変強い関心が感じられた。その後、桑原理事の作品「激動韓国 50 年」の上映会が催され、実際の写真家の作品と撮影講話に受講者ののみならず講習を手伝った我々も大変興味深く鑑賞した。

(記／高宮岳彦、撮影／日置真光)



松本副会長による作品へのアドバイス(静岡会場)

**第41回「日本写真家協会賞」贈呈式 平成27年12月9日(水) 於:アルカディア市ヶ谷
「株式会社堀内カラー」に贈る**

第11回「名取洋之助写真賞」授賞式

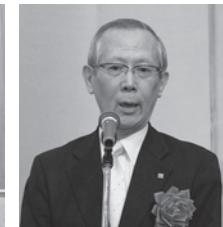
受賞者:鳥飼祥恵 「amputee boy -けんちゃん-」
増田貴大 (奨励賞) 「終わりの気配」



文化庁文化部の佐伯浩治
部長による来賓祝辞



表彰状を授与される株式会社堀内カラー
堀内洋司取締役社長



受賞者・堀内カラー 堀内洋司取締役社長の受賞挨拶
「日本写真家協会賞」記念写真



第41回「日本写真家協会賞」贈呈式および第11回「名取洋之助写真賞」授賞式が、2015年12月9日、アルカディア市ヶ谷にて、322名の参加のもと、盛大に開催された。なお、前号の会報(160号)で即報のとおり、日本写真家協会賞は、株式会社堀内カラーに、名取洋之助賞は鳥飼祥恵さんと増田貴大さん(奨励賞)にそれぞれ贈られることが決定している。

最初に熊切圭介会長から挨拶があり、日本写真家協会賞の贈呈理由について、「昭和34年創業のプロラボとして定評のある堀内カラーが導入した超大型のカラープリント技術は、写真表現の可能性と領域を大幅に拡大した。時代の先端をゆく技術開発として、写真家への貢献は計り知れなく、写真文化の発展に大きく寄与していることに対して」旨の説明があった。

来賓の文化庁文化財部の佐伯浩治部長からは「2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックはスポーツのみならず文化の祭典でもあり、文化庁としては全国で文化プログラムが展開される中で写真が重要な役割を担うことを期待しております」との祝辞があった。続いて、受賞者の株式会社堀内カラーを代表して取締役社長の堀内洋司に表彰状と盾が授与された。挨拶に立った堀内氏から「半世紀以上写真家の皆様と共に歩んできました。急速なデジタル化で銀塩は過去のものになり、ラムダプリントという銀塩とデジタルを融合

させた大型プリント技術に挑戦し、これが評価を受けたと思います。受賞を励みに写真表現の最終形態であるプリントで写真文化向上に努めます」との言葉があった。

続いて、名取洋之助写真賞の授賞式では、選考委員を代表してフォトジャーナリストの広河隆一氏が選考理由を説明した。「現代はテロや戦争が多く命を奪う中で、フォトジャーナリズムが試される時代です。その中で鳥飼さんの『けんちゃん』は、素直な目で人間が輝く瞬間を記録した作品であり、時代の財産が生まれたと嬉しく思います。何を一番に伝えるか、基本に足を置いた作品作りが出来るよう、この賞で背中を押せればと考えています」と述べた。

受賞した鳥飼さんからは「受賞したのは私ですが、作品の中でのヒーローは賢君です。ご協力いただいた賢君とご家族の皆様に感謝するとともに、この作品で心を動かされていただければ嬉しく思います」と受賞の言葉があった。続いて、奨励賞を受賞した増田さんからは「これまで大きな結果を出せないまま写真を続けてきました、不安や迷いがありました。この賞をいただき安心感と今後の励みをいただきました。胸を張って写真を撮り続けていきたいと思います」と受賞の言葉があった。

「日本写真家協会賞」贈呈式と「名取洋之助写真賞」授賞式終了後に、同じ会場にて、平成27年度会員相互祝賀会が盛大に開催された。



選考経過を説明する広河隆一審査員



名取洋之助賞受賞者の鳥飼祥恵氏



奨励賞受賞者の増田貴大氏 「名取洋之助賞」記念写真



第41回「日本写真家協会賞」贈呈式
第11回「名取洋之助写真賞」授賞式
平成27年度会員相互祝賀会

平成 27 年度会員相互祝賀会

平成 27 年 12 月 9 日 (水) 於：アルカディア市ヶ谷

祝賀会は毎年恒例となった集合写真の撮影から始まつた。

熊切圭介会長から「8 月に行った被爆 70 年『知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾』写真展では多くの来場者がありました。来年は創立 65 周年記念写真展『日本の海岸線をゆく—日本人と海の文化』が 3 月 1 日から 13 日まで東京芸術劇場ギャラリーで開催されます。今後も協会は写真を通じて文化に貢献してまいります」と挨拶があった。会員外理事と監事の紹介があり、続いて公益社団法人日本写真協会会長の宗雪雅幸氏より来賓祝辞をいただいた。来賓紹介に続いて、賛助会員を代表して株式会社ニコンイメージングジャパン取締役社長兼社長執行役員五代厚司氏より「本年のカメラ販売は『爆買い』の影響で上向きでした。来年は国内市場に腰を落ちつかせ、写真業界の繁栄に頑張ります」との挨拶と乾杯の発声がなされ、賑やかな祝賀会の開宴となつた。

恒例となっている餅つきでは、会長や受賞者はじめ何人の参加者が杵を振り下ろし、つきたての餅が会場内で振る舞われた。福引抽選会では、賛助会員各社や会員から豪華景品や新米 30 キロなどの提供を受け、例年より多くの景品の当選番号が読み上げられ、会場内には喜びと嘆息の声が交差した。

壇上では平成 27 年に受賞や出版、写真展を開催した会員の紹介と記念写真撮影が行われ、創立 65 周年記念事業実行委員長の島田聰理事からは「日本の海岸線をゆく—日本人と海の文化」の写真展開催紹介が行われた。

開会からおよそ 2 時間のうち、松本徳彦副会長の閉会挨拶と、恒例の三本締めで平成 27 年度会員相互祝賀会は幕を閉じた。

(記／出版広報委員：小野吉彦、
記録撮影／出版広報委員：桃井一至)



会員相互祝賀会の記念撮影（撮影・小野吉彦）



福引抽選会でケンちゃんが豪華景品を受取る



2015 年受賞、出版、写真展での活躍会員



日本写真協会宗雪雅幸会長による来賓祝辞



株式会社ニコンイメージングジャパン五代厚司取締役社長兼社長執行役員による乾杯の発声



受賞者のみなさんによる恒例の餅つき

Message Board

◆佐納 徹（2002年入会）

近年、家庭の事情で、遠方には行かず、近畿エリア並びにその周辺にて、絶景に化す<時>をずっと取材してきました。光、影、風が奏でる一瞬の世界を、夜中ロケ含めて、疾走してきました。この夏前から、久しぶりに写真集の出版のため整理して、この11月末に、私の写真集『天空の舞い』を東方出版より発行し、全国書店に配本となりました。



併せて、日本カメラ10月号にて、この作品の一部にてグラビアを担当もさせていただきました。他の惑星から惑星を見ているようなイメージにて、取材してきた作品が出版という形で発表出来、安堵しています。また、継続してこのテーマにて取材も続けます。

この場をお借りして、出版に際し、JCIIフォトサロンの森山眞弓様に序文もいただいたこと、心より御礼申し上げます。
(奈良県北葛城郡在住)

◆三穂雪舟（1991年入会）

平成27年の1月、山中湖のパノラマ台に行った時です。早朝の富士山と南アルプスが真赤になるのを捉えました。その後、足元は雪とアイスバーンでした。油断して、それに気づかず私は転倒してしまい軽い打撲傷を負いました。カメラと三脚ごと倒れるのを助手君が止めることで収まりましたが、夢中になつて撮る時にも、思わず災難に注意しないといけません。4月の花の都公園でも、足に草がからみ、転倒しました。気をつけましょう。
(東京都狛江市在住)

◆吉川信之（1999年入会）

街歩き用にOM-D E-IIを購入した。普段はフルサイズカメラ中心でマイクロフォーサイズは初めての挑戦だが、使い始めてびっくり仰天した。センサーサイズが小さいため、ワイドでも超近接撮影ができる、手ぶれ防止機構も強力。そしてバックフォーカスが短い設計の広角レンズの描写はとてもすがすがしい。今までの懸案が簡単に解決できてしまったのだ。そして、心配していた「小さなセンサーの画質」もすこぶる良好と、いいことづくめ。しかし、自分のメイン機材がこちらに交替するということにはならなくなそうだ。この2つは全く位相が違うシステムなのである。考えてみ

ると、最近はほとんどの撮影を同じカメラで済ませている。しかし、銀塩の時代には撮影用途によってフィルムサイズを使い分けていたのに。デジタルでもセンサーサイズを使い分けるメリットを頭では理解していたが、やっと「腑に落ちた」感覚である。もっと使いこなせるようになりたいと、アマチュアのような気分で試行錯誤している。

(東京都足立区在住)

◆萩野矢 慶記（1986年入会）

『街にあふれた子どもの遊び』を出版しました。「子どもの遊び」に魅せられ、17年間、遊びの全盛期から、消滅に向かう過程を、原因を探りながら、最後の一人ばっちまで撮った写真集です。子どもは遊びを通して、知力や体力、社会性を獲得しますが、子ども時代に子どもらしい遊びが体験できないと、子どもは能動的な活力が生かされずストレスが溜まるばかりです。消滅後の子ども社会の変貌にも注視し、問題を提起しました。

(東京都台東区在住)

◆青木 勝（1972年入会）

2015年11月11日、三菱航空機の最新鋭旅客機MRJ（三菱リージョナルジェット）飛行試験初号機が、初飛行に成功した。日本にとっては勿論のこと、世界の航空産業界にとって記念すべき歴史的な日となった。戦後初の国産旅客機YS-1-1以来、半世紀ぶりに誕生した国産旅客機である。初飛行は、ヒナ鳥が翼を得てはじめて飛んだという段階にすぎず、これから何千時間もの試験飛行を重ねて、客を乗せて安全に飛行できる旅客機へと成長するのだ。YS-1-1を40年以上追い続けてきた写真家としてぼくは、MRJが世界の空にはばたき、日本の産業を支える大きな柱の一つに成長することを願い、今後もじっくりと撮影を続けていくつもりだ。

(東京都世田谷区在住)

◆吉野雄輔（2001年入会）

今年の6月初めに創元社から出版した写真集『世界で一番美しい海のいきもの図鑑』、発売直後に増刷され、Amazon魚類学で、ベストセラー1位が、半年あまり、続いています。この本

は、自然光で撮影した青一色の写真と、黒バックのいきものの色だけの写真で構成されています。

ありのままの姿をみてもらうのに、黒の背景が似合うからです。被写体そのものが、いきもののすごさを雄弁に語ってくれます。それが、海の好きな方や一般の方や女性、子どもにも受け入れられたのです。
(東京都世田谷在住)



◆樋口健二（1971年入会）

「売れない写真家」の異名をもらった喜び

フォトドキュメンタリーの世界に入りはや50数年、売れないテーマばかりを最優先させ、社会問題、産業公害、原発下請け労働者の放射線被曝の惨状、自然破壊、隠された戦争悲史等を追求して日本列島を駆け巡っているうちに白髪老人と化していた。お陰でマスメディアからも「売れない写真家」の異名を頂戴するまでになった。感謝しなければならなかったのは仕事を理解してくれた編集者達により、25冊の著作を世に問うてくれた事です。

(東京都国分寺市在住)

◆由木 賀（2003年入会）

ナショナルジオグラフィックに顕微鏡と望遠鏡で写した2枚の組写真が掲載されていた。らせん構造をもつDNAと遠い銀河である。驚くほど似ているとキャプションの通りまさに瓜二つと見て取った。DNAも宇宙の仕業と仮定しサイエンスフィクションの立案となる。著書「私の愛した宇宙人＝第十三章、宇宙の彼方より＝宇宙の最少部品である素粒子が自然界において空気、水、大地、人体とありとあらゆるものを作りあげてきた。五十億年後、地球の寿命は尽き崩壊するといわれている。球体の消滅後は残骸とともに地中に埋もれた全人類の灰も宇宙へ



拡散されるだろう。人類の灰が自然界の最少単位一ミリの一兆分の一の一万分の一未満に残留し、宇宙において光速に交り陽子と衝突を繰り返すうち、素粒子に組み込まれ、あるいは融合し、地球のような恵まれた環境の惑星へ降り注ぎ、億年単位の進化を遂げ地球上人を根源とする宇宙人が蘇るという筋書きである。我々は宇宙からやってきて、宇宙へ帰ることに相違ない。しかし蘇ることはできるだろうか。

(和歌山県和歌山市在住)

◆伏見行介（1997年入会）

冬から春にかけて、7年ぶりの写真展を開催中です。題して「Old fashioned portrait 先達へのオマージュ」、モノクロのポートレートの写真展です。

デジタルで何でもできてしまう昨今ですが、レンズ前に拘って撮影しました。

モデルは、仕事で知り合ったモデルさん10人程。会場はキヤノンギャラリー銀座、仙台、札幌、梅田（大阪）の4箇所。この号ができる頃は、半分終わり、残すは札幌と梅田です。

(東京都新宿区在住)



◆本橋成一（1969年入会）

「在り処」IZU PHOTO MUSEUMにて2月7日（日）～7月5日（火）まで開催しています。2月14日には関野吉晴氏（探検家・医師）との対談も予定されています。会期中には映画作品の上映会も開催されます。

(東京都中野区在住)

◆野田知明（2015年入会）

なんかおもしろい。そんな感覚が大事に思えてきた。VR元画像の歪み具合が気に入り、折に触れ展示すると結構好評。素人だましと思っていたが、プロの方々も面白がってくれる。

大事なことと思い、阪神淡路大震災や室生寺の台風被害、東北地方太平洋沖地震も撮りに行つた。それはそれで良いのだが、何



か、こう、壁に飾る気がしない。毎日見て楽しむいうものでもない。人に見せても何か重い。そう、写真と楽しく付き合いたくなつたのだ。

毎日見て元気になる。人に見せて

も一緒に笑える。そんな写真を撮りたいと思う。

(東京都大田区在住)

◆今井孝弘（2015年入会）

JPS入会以前の私はどの組織にも属さず職業カメラマンとして生きてまいりました。

入会後も職業形態は殆ど変わり無いのですが、写真家と云う生き方を強く意識するようになりました。

また同期の仲間や多くの先輩会員の皆様と知り合う事が出来て沢山の刺激を頂いております。

もうすぐ新たな会員の皆様が入会する時期となります。積極的にJPSの行事や役割に参加する様に助言したいと思います。

作品はフォトボランティア展でご購入頂いたチューリップの写真です。

(東京都江戸川区在住)



◆太田眞（2009年入会）

写真展を開催いたします。

キヤノンギャラリー銀座 2016年6月2日（木）～6月8日（水）10：30～18：00（最終日15：00）

キヤノンギャラリー仙台 2016年7月14日（木）～7月26日（火）10：00～18：00

キヤノンギャラリー梅田 2016年8月22日（月）～8月31日（水）10：00～18：00（最終日15：00）

ご高覧下さい。(大阪府大阪市在住)

◆龜田昭雄（2004年入会）

2015年9月に写真集「幻影の囲」を出版した。

2011年の東日本大震災による東京電力福島第一原発の放射能漏れ事故は足尾銅山鉛毒事件と非常に酷似しているようだ。ともに国策事業として展開しており、被害対策についても賠償や加害責任に



かおうとはしていない。

足尾から渡良瀬に、そして福島へと忍び寄る無気味な影とは。

(埼玉県上尾市在住)

◆竹内トキ子（1999年入会）

富士山の魅力に憑かれて30年、通勤

のように通っても自然相手では見込み

外れで撮りそこなった素晴らしい富士の表情は



数多くあり、いつの間にか富士との駆け引きみたいなものが生まれていました。富士山は季節や気象条件によって人を寄せ付けない厳しさもありますが、癒しを与えてくれる優しさがあります。それが今まで続いている要因となっています。

今回は富士山の独特な気流によって発生する、なかなか出会えない貴重な彩雲を中心に展示いたします。

(東京都調布市在住)

◆山縣勉（2012年入会）

アメリカでナンバーワンと言われる写真集専門店、photo-eye books。2016年第一週のベストセラーで、驚くことに拙著「涅槃の谷」が一位になりました。写真集購入のためにいつも眺めていたランキングに自分の作品が掲載されているのを見て信じられないやら嬉しいやら。

今、欧米ではピンテージ、新刊問わず日本の写真集がブームのようです。日本の写真集を中心を集めているコレクターも少なくありません。日本の写真集専門店に聞くと、売上の半数以上が海外への販売だそうです。もはや写真集は国内書店での店頭販売から、世界の特定の需要をターゲットとしたネット販売に大きく移行しています。

先日、海外の書店に「どのような日本の写真集を仕入れていますか？」と聞いたところ、「日本ならではの繊細な装丁と印刷、そしてテキストが英語でも書かれていること」という答えが返っていました。

(東京都墨田区在住)

◆小野吉彦（2004年入会）

～皆様に感謝致します～

昨年の2015年祝賀会で、集合写真を撮らせていただきました。

祝賀会の1ヶ月ほど前、担当理事から電話があり、たまたま繋がったのが運の尽きでしょうか、強く説得され撮影担当となりました。普段は建築写真を撮るばかりで、集合写真は大変不慣れでしたが、大勢の祝賀会実行委員の皆様に助けていただき、任務を無事に完了することができました。

当日写真に写られた300人超の皆様にも被写体として集合写真撮影という経験をさせていただき、おそらくJPSへ入会しなかったら、私は一生体験しなかつたことでしょう。…ただし、その緊張感は二度と経験したくない次第です。

(東京都新宿区在住)

J P S ブック レビュー

協会に寄贈された会員の出版物を到着順に掲載致します。
(2015・9月～2016・1月)
 ①発行所 ②発行年月
 ③サイズ (タテ×ヨコ)、頁数
 ④定価 ⑤寄贈者
 ⑥電子書籍ストア



幻影の圈

亀田昭雄

①アトリエ Winds ②2015年9月
 ③18.5 × 26.2cm, 50頁
 ④4,500円 ⑤亀田氏
 ⑥電子書籍ストア



さかなだって
ねむるんです

写真・伊藤勝敏
文・嶋田泰子

①ボプラ社 ②2015年9月
 ③20.7 × 26cm, 40頁
 ④1,400円 ⑤伊藤氏



伊勢神宮とは何か
日本の神は海からやってきた

植島啓司
写真・松原 豊

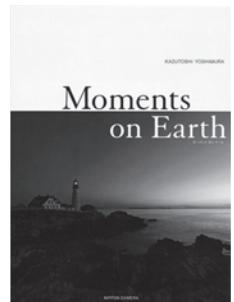
①集英社 ②2015年8月
 ③17.3 × 10.7cm, 222頁
 ④1,400円 ⑤松原氏



ドラマチック 鉄道写真撮影術

山崎友也

①洋泉社 ②2015年9月
 ③21 × 15cm, 175頁 ④2,000円
 ⑤発行所

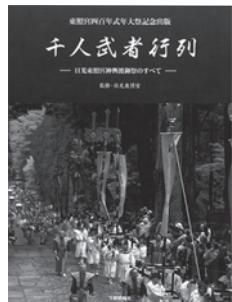


Moments on Earth

モーメンツ オン アース

吉村和敏

①日本カメラ社 ②2015年10月
 ③25.7 × 18.8cm, 110頁
 ④2,700円 ⑤発行所



千人武者行列

監修・日光東照宮
写真・藤井一広、他

①下野新聞社 ②2015年7月
 ③29.6 × 22cm, 132頁
 ④3,800円 ⑤藤井氏



AMERICA 1955

林 忠彦

①徳間書店 ②2015年7月
 ③25.3 × 26.6cm, 143頁
 ④4,000円 ⑤林義勝氏



横浜つるみ区カレンダー 撮影20年の記録 1996年～2015年 若林のぶゆき

①パレード ②2015年9月
 ③19.5 × 13.5cm, 111頁
 ④1,500円 ⑤若林氏



雪の色

吉村和敏

①フォトセレクトブックス
 ②2015年9月 ③21 × 27.8cm, 98頁
 ④2,800円 ⑤吉村氏



yes

写真・高砂淳二
詩・覚和歌子

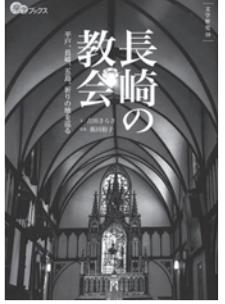
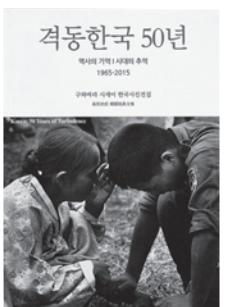
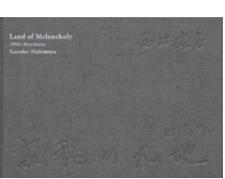
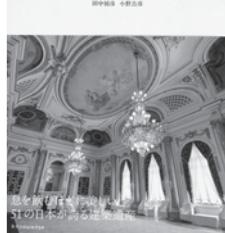
①小学館 ②2015年9月
 ③14.8 × 21cm, 96頁
 ④1,000円 ⑤発行所

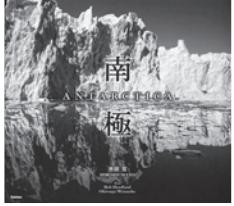


日本鉄道切手夢紀行

櫻井 寛

①日本郵趣出版 ②2015年10月
 ③21 × 14.8cm, 126頁
 ④1,400円 ⑤発行所

 <p>昭和曲馬団 丹野 章</p> <p>① 撮影フォトギャラリー ② 2015年9月 ③ 29.3 × 22cm、88頁 ④ - ⑤ 丹野典子氏</p>	 <p>長崎の教会 文・吉田さらさ 写真・飯田裕子</p> <p>① JTBパブリッシング ② 2015年 ③ 21 × 14.8cm、128頁 ④ 1,600円 ⑤ 飯田氏</p>	 <p>天空の舞い 佐納 徹</p> <p>① 東方出版 ② 2015年12月 ③ 22 × 21cm、83頁 ④ 2,000円 ⑤ 佐納氏</p>	 <p>桃源郷の記 中国バーシャ村の人々との10年 竹田武史</p> <p>① 新潮社 ② 2015年11月 ③ 18.7 × 13cm、191頁 ④ 1,800円 ⑤ 発行所</p>
 <p>回顧 入江泰吉の仕事 入江泰吉</p> <p>① 光村推古書院 ② 2015年11月 ③ 21.2 × 15cm、382頁 ④ 3,800円 ⑤ 発行所</p>	 <p>播磨屋 一九九二~二〇〇四 中村吉右衛門 稲越功一</p> <p>① JCII フォトサロン ② 2015年11月 ③ 24 × 25cm、35頁 ④ 800円 ⑤ 発行所</p>	 <p>Canon EOS 5Ds/5DsR 完全マスターガイド 表紙・目次写真撮影・伏見行介 本誌撮影・文・小城崇史</p> <p>① 朝日新聞出版 ② 2015年9月 ③ 27.7 × 21cm、127頁 ④ 2,300円 ⑤ 小城氏</p>	 <p>モノクロームの私鉄 諸河 久</p> <p>① イカロス出版 ② 2015年12月 ③ 25.7 × 18.2cm、200頁 ④ 2,000円 ⑤ 発行所</p>
 <p>橋の探見録 -5 小橋健一</p> <p>① 遊人工房 ② 2015年10月 ③ 17 × 18.2cm、48頁 ④ 1,800円 ⑤ 発行所</p>	 <p>激動韓国 50年 1965-2015 桑原史成</p> <p>① ヌンビ出版 ② 2015年7月 ③ 21 × 15.2cm、464頁 ④ 3,300円 ⑤ 桑原氏</p>	 <p>哀愁の大地－旧満州－ 西村建子</p> <p>① shashasha ② 2015年9月 ③ 15.3 × 21.7cm、95頁 ④ 4,800円 ⑤ 西村氏</p>	 <p>日本の最も美しい名建築 文・田中禎彦 写真・小野吉彦</p> <p>① エクスナレッジ ② 2015年9月 ③ 24 × 18.2cm、176頁 ④ 1,800円 ⑤ 小野氏</p>

 <p>街にあふれた子どもの遊び 萩野矢慶記</p> <p>①彩流社 ②2015年11月 ③23.5×18.2cm、136頁 ④2,500円 ⑤発行所</p>	 <p>KANRANSHA × 観覧車 吉村和敏</p> <p>①丸善出版 ②2015年12月 ③24.5×30.2cm、96頁 ④3,200円 ⑤吉村氏</p>	 <p>東京・愛犬日和 -平成の下町- 浅井秀美</p> <p>①本坊書房 ②2015年11月 ③22.7×19.5cm、255頁 ④3,500円 ⑤浅井氏</p>	 <p>オヤジの背中 写真家・林忠彦—父・林忠彦 林 義勝</p> <p>①日本写真企画 ②2015年12月 ③23.2×18.7cm、167頁 ④2,500円 ⑤林氏</p>
 <p>路上の伝記 金瀬 胖</p> <p>①現代写真研究所出版局 ②2015年12月 ③25.7×18.7cm、136頁 ④2,500円 ⑤金瀬氏</p>	 <p>新疆印象 馮 學敏、佐藤憲一</p> <p>①馮學敏、佐藤憲一 ②2015年11月 ③20.6×20.6cm、58頁 ④ - ⑤馮氏</p>	 <p>南極 - ANTARCTICA - 池田 宏</p> <p>①学研プラス ②2015年12月 ③24.5×26.5cm、143頁 ④3,000円 ⑤池田氏</p>	 <p>沖縄・八重山諸島 深澤 武</p> <p>①青青社 ②2015年12月 ③17.5×25.7cm、95頁 ④2,000円 ⑤深澤氏</p>
 <p>私の愛した宇宙人 由木 育</p> <p>①ゆうな出版 ②2015年9月 ③18.2×13cm、178頁 ④900円 ⑤由木氏</p>	 <p>インカの世界を知る 木村秀雄、高野 潤</p> <p>①岩波書店 ②2015年11月 ③17.2×10.5cm、194頁 ④960円 ⑤高野氏</p>	 <p>世界のともだち31 イタリア パスタの島のジャンパオロ 山口規子</p> <p>①偕成社 ②2015年12月 ③24.7×21cm、40頁 ④1,800円 ⑤山口氏</p>	 <p>夜景のRAW現像 マスターガイド 丸田あつし</p> <p>①玄光社 ②2016年1月 ③28.5×21cm、143頁 ④1,800円 ⑤発行所</p>

<p>涅槃の谷 山縣 勉</p> <p>①Zen Foto Gallery ②2015年11月 ③17.7 × 26.7cm、47頁 ④2,700円 ⑤山縣氏</p>	<p>民謡山河 須田一政</p> <p>①JCII フォトサロン ②2016年1月 ③24 × 25cm、35頁 ④800円 ⑤発行所</p>	<p>New Type 清水哲朗</p> <p>①日本カメラ社 ②2015年12月 ③25.7 × 26.8cm、160頁 ④4,800円 ⑤発行所</p>	<p>日本列島 花乃聲 鈴木一雄</p> <p>①日本写真企画 ②2016年1月 ③30.3 × 21.7cm、152頁 ④3,000円 ⑤鈴木氏</p>

寄贈図書

横島克己殿.....呉宏明・高橋晋一・編著・南京町と神戸華僑
近藤誠宏殿.....梶田敏彦・監修・近藤誠宏・四国遍路仁王像への旅
青幻舎殿.....浮世絵から写真へ－視覚の文明開化－
日本芸術出版社殿.....AMATERAS A.M.A.作品年鑑 VOL.19
日本カメラ社殿.....キヤノン EOS 5Ds/5DsR WORLD、山田イサオ・私景祝島
全日本写真連盟・朝日新聞社殿.....全日本写真展 2015
千葉盈子殿.....父の撮った寫眞
東京ビジュアルアーツ・校友会殿.....校友会創立 50周年記念誌

クレヴィス殿.....濱谷 浩・生誕 100 年 写真家・濱谷浩
日本写真作家協会殿.....第 26 回日本写真作家協会展 2015-2016、
第 13 回日本写真作家協会公募展
JCII フォトサロン殿.....飛塚英寿・出羽の里びと
.....山端祥玉・山端祥玉が見た 昭和天皇－撰政から象徴まで－
富士フィルムイメージングシステムズ殿
.....2015 富士フィルム営業写真コンテスト作品集
日本風景写真協会殿・四季のいろ 第 6 回日本風景写真協会選抜作品集
日本漫画家協会殿.....(公社) 日本漫画家協会 創立 50 周年記念誌

受賞おめでとうございます。今後ますますの活躍をご期待申し上げます。(50音順)



■「酒田市特別功労表彰」 平成27年11月11日

受賞者：江成常夫（1970年入会）

酒田市土門拳文化賞を全国的にも権威ある賞へと導かれるなど、土門拳記念館並びに本市を全国に発信され、写真文化の振興に大きく貢献されたことに対して。



■「イ・ヘソン写真文化賞」 平成27年12月9日

受賞者：桑原史成（1963年入会）

写真展や出版を介して韓国の写真文化への貢献が大きかったことに対して。



■第1回「まち・ひと活力大賞」 平成27年9月16日

受賞者：山口一彦（1994年入会）

ここ数年北海道室蘭をライフワークとして風景・ポートレートを撮影。写真集、巡回写真展を発表してきたことに対して。

わが子を背負って（表紙写真）—— 浅井秀美

5月の休日に歌舞伎座裏通りを歩いていた時、向こうから車道の端を、わが子のように犬を背負って来る女性が目に飛び込んで来た。すかさずカメラを向け、撮らせてもらった。女性は車に愛犬を乗せ、立ち去った。

平成15年個人情報保護法なる厄介な法律が制定。平成17年4月より施行された為、街のスナップを撮っていた私にとって大きな壁となってしまった。

そこで東京下町を「犬」を通して捉えてみようと思いたち、カメラを向けてみた。すると飼い主の方々は皆とても喜んで下さった。（写真集『東京・愛犬日和—平成の下町—』）

不意の来客（表4写真）—— 永井 勝

アメリカにジョゼフ・コーネル（1903~1972）というアーチストがいた。箱の芸術家とも呼ばれ、小さな木箱の中には魅惑的な小宇宙が広がっていた。一見何の関係もないモノと物とが配置された途端、シュルレアリズムの感覚に囚われてしまうのだった。私は STILL LIFE で彼へのオマージュを創作した。骨董市や森の中、海岸や路傍で自己の分身を収集した。そして偶然の邂逅は物語りを囁き始める。その声に気づく時、最も無垢で柔らかかった頃の想像力へと誘うのだった。（写真展「遺失物保管所 その他」）

寒の戻り—— 鈴木一雄

フクジュソウは、母が特に愛した花だった。毎年冬になると、家のものはいろいろな花の球根を植えた鉢で一杯になるが、ひとときわ大きい鉢にこの花があった。母が亡くなった後に三人の兄弟で分けたが、皆、枯らしてしまったのが今でも悔やまれる。

「鈴木さん、今日、喜多方でも雪が降るよ」。3月末日、裏磐梯の遊人からの電話だった。その夜に裏磐梯に行き、翌朝にフクジュソウの群落地を訪れた。雪の中に黄金色が点在する光景に心を躍らせ、食事も忘れて一日中撮り続けた。母が亡くなった翌年の春のことであった。

春の畝模様—— 阿部俊一

北海道・美瑛では4月中旬ごろに雪融けが終わり、大地が乾くと畑では一斉にトラクターが土を耕します。一番早く植えられる作物は砂糖の原料であるビート（てん菜）です。この写真是ビートの苗を植えたばかりの風景です。ビートの畝が美しく弧を描き、造形的で魅力を感じました。畝模様が楽しめる時期は短く、作物の成長により作物の葉が茂り緑一色となります。また、背景には春の風物詩である残雪のある十勝岳連峰を選びました。

青い麦 スズメ—— 高城芳治

麦は早春の頃、まだ霜が降りる畑に一斉に若葉が青々と生い茂るイメージがあります。麦は若葉の時期に、踏まれる事で丈夫な美味しい実がつくと子どもの時に聞いたことがあり、私も昔やってみた事がありました。その麦の特性が引用され

て、昔の諺に人も若いうちに苦労しなさい！となったように思われます。

この作品は、黄金色の麦の穂になる前にスズメの親がヒナたちに餌として与えていました。何度か行ったり来たりする様子を見ながら、一瞬の横顔にクローズアップして、麦の生き生きとした生命力とスズメの強かさを切り取ってみました。

ファンタジックタイム—— 佐納 徹

土佐の国、有名な桂浜から少し離れたエリアに、風光明媚な景観の地が点在する。太平洋の荒波のイメージが強いエリアとは思えない、いつも穏やかな〈地〉であり、毎年師走の頃、天空より光のショーダンスが舞う。この日も、グラデーション豊かな表情の時間であった。

南極にて—— 池田 宏

日本の37倍の広さをもつ氷の大陸。何万年、何十万年の氷は、南極海で海流、風、波により、個性的な形を創りだし、美しい氷山の大ギャラリーとなっている。

勝闘橋 2012年1月—— 金瀬 育

フクシマのあとはどこへいっても「われなき時、われなき現在」と感じていました。この時期は歴史に太文字で刻まれるできごとが相次ぎました。あるときは行き先も定めずに家を出、なにかとの再会を求めて足の記憶をたよりに歩き、あるときは説明のしようもない衝動によって撮り、そうしているうちに「人間の場所」の喪失が特異なことでなく凡庸になっていることを感じました。わたしにとってこれらの写真是、このいまを忘れえないものにする「光の伝記」にはかなりません。写真是2010年から2015年の秋にかけて東京で撮ったもの。

ボーリング・ゲーム—— 萩野矢慶記

道端で見つけた空き缶が「ボーリング遊び」に発展した。足りない数の空き缶を探し、ルールと順番を決めると、一球が投げられ、大きな歓声が響いた。子どもたちは廃品から無限に広がる遊びを創造した。子どもの遊びに魅せられ、遊びの全盛期から消滅に向かう子どもの素顔を17年間シャッターチャンスで捉えた。いま、ソフトで「ボーリング・ゲーム」を楽しむ時代だ。しかし、子どもは能動的な活動が奪われ、体力や知恵、知識が身に付かない。消滅後の子どもの成育にも重視し、「あとがき」で一矢を投じた写真集です。

樹木に囲まれた流路溝（足尾）—— 亀田昭雄

冬枯れの葦原に佇むとき聞こえてくるものがある。嗚咽とも叫びともつかない無気味な音色。あちらこちらからまるで木霊しているかのように。鉛毒と権力に辛酸を舐めさせられた時代を引きずりながら。

そして今、眼に見えない透明なヴェールに福島の地が覆われてしまった。足尾に吹いた風が渡良瀬に吹く風に。そして福島に新たな風が吹く。

Topics

Japan Professional Photographers Society (JPS) was founded in 1950. One of the main purposes of established JPS is to protect the right of the photo copyright. In January, 2016, JPS published two books regarding to the photo copyright.

"Photo Copyright Second Edition"

JPS published the book as the revision of "Photo Copyright", published in April 2012. The new edition includes such as the new matters of RAW data that regards the evolution of the digital photography. Frequently ask questions of the copyright of photography and movies. This book also includes the recent information of TPP (Trans-Pacific Partnership) for photography and, the future revision to extend the protection of the photo copyright after TPP.

The 1st chapter; "Introduction of the photo copyright", written by Makoto Kawase, Director of JRRC, Visiting professor of Yokohama National University.

The chapter includes the explanations of photography and copyright law, from the beginning of the photography, invention and through the evolution, born to the new matters of photo copyright by recent technologies of digitalizing and internet networking.

The 2nd chapter; "Learn the photo copyright law through Q&A".

There are 6 categories; "Basic elements of the copyright protection", "Photo Journalism and photo copyright", "Publishing and photo copyright", "Commercial photography and photo copyright", "Model release",

and "Agreements and Photo copyright". 115 Q&A items to explain copyright law with the concrete examples those are easy to understand about photo copyright

The 3rd chapter; "The new media and photo copyright", written by Kenta Yamada, Professor of Humanities and Journalism, Senshu University.

This chapter explains the basic elements of understanding photo copyright for new media with consideration of digital photography, SNS, and digital books.

All Columns of JPS bulletin "Articles of Serial Researches -- Photo Copyright"

JPS published this book hosted with Japan Photographic Copyright Association.

First half of this book is the reprint "The Research Articles of the Photo Copyright" that were written in JPS bulletin from 1960's to 1980's. This chapter explains the history and the transition for the photo copyright protection period that was discriminated from other categories of copyrights.

Second half of this book is the reprint of the "Photo Copyright Research by JPS Committee of Photo Copyright", 35 articles form JPS bulletin February 2004. The articles explain varieties of matters of photography by the committee members, copyright expert intelligent such as lawyers and jurists. They discussed enlightenment and raise the consciousness of photographers to understand the matters of copyright management and agreements under the internet network society.

About the Japan Professional Photographers Society

The Japan Professional Photographers Society was established in 1950. Through its activities it strives to define the role of the professional photographer and secure copyright protection while working to develop photographic culture. In 2001 it received recognition as an Incorporated Body from the Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology, in March 2011 it was officially recognized as being a Public Interest Incorporated Association by the Prime Minister's office, and since April 1 of that year it has been active under the title, Japan Professional Photographers Society, Public Interest Incorporated Association.

Since its foundation, the society has succeeded in receiving an extension for the period of copyright protection (to 50 years after the death of the artist), held numerous exhibitions concerning photographic history and expression (A Century of Japanese Photography, History of Japanese Contemporary Photography, Sixty Years of Japanese Children, Women, etc.), and published numerous books on photographic history and collections of photographs. In order to contribute to the promotion and development of photographic culture, it holds the JPS Exhibition as an open exhibition, presents a nationwide Photography Study Pro-

gram for elementary school students, the Photo Forum that aims to develop photographic expression, Digital Photography Lectures for the advisors of high school photographic clubs, and presents the Yonosuke Natori Photographic Award to uncover and foster new talent. At the same time, it carries out a wide range of activities to contribute the development of photographic culture, such as: cultural exchange with overseas photographers, PR through publishing and information dissemination via the Internet.

Furthermore, it presents the Japan Professional Photographers Society Award in recognition of individuals or organizations who have achieved notable achievements in the development of photographic technology, education, or critique.

The Japan Professional Photographers Society has devoted itself to the establishment of photographic museums, such as the Tokyo Metropolitan Museum of Photography, and is currently actively working towards the creation of the 'Japan Photographic Preservation Center' (archive) for the collection and preservation of original photographs.

Japan Professional Photographers Society

JCII Bldg. #303, Ichibancho 25, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0082

Tel: +81-3-3265-7451 Fax: +81-3-3265-7460

E-mail: info@jps.gr.jp Web site: <http://jps.gr.jp/int/index-e.html>



土方 健介 名誉会員

平成 27 年 10 月 9 日逝去。93 歳。

昭和 25 年入会。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

土方健介氏は、昭和 21 年秋山写真工房設立に参加。25 年よりフリーの写真家として主にコマーシャル、建築写真を撮影。47 年より個展を約 18 回、合同写真展に多数出品。

コレクション先に東京都写真美術館、JCII 日本カメラ博物館。著書に「商業写真と特殊技術」「大型カメラの使い方」「トリック写真実戦テクニック」「手作りカメラ図鑑」、写真集に「球体劇場」「創跡」などがある。JPS 創立会員で、2000 年に名誉会員に推挙されました。

初心忘れるべからずの人

田沼 武能

土方健介は、戦後の混乱期に秋山庄太郎、稻村隆正と偶然に出逢い、その時に秋山から一緒に写真の仕事をしようと誘われたのが写真家になった切っ掛けという。スタジオで写真の仕事をすることを父親に反対され、秋山が土方の家を訪ねて父を説得したそうだ。3人は早稲田大学の写真クラブの仲間である。銀座にスタジオを開いたのはよかったが、客は来ない。そのうちに写真部 OB たちの溜り場みたいになり 10 カ月でスタジオは潰れてしまった。そして秋山は近代映画社へ、稻村は写真通信社へ、土方は商業写真関係へ就職した。

昭和 25 年の JPS 創立時には 3 人揃って創立に参画していた。私は初めてここでお会いしたが、言葉は少ないが心の強い人という印象であった。

土方と秋山は性格も正反対で、秋山は文系で感覚的にシ

ヤッターを押して写真を撮るのに対して、土方は理系で理詮めでものを考え、計画をたててからシャッターを押す。作る写真も抽象的な作品が多かった。土方の写真家論によると、注文写真は作品ではない。そこには現実だけで夢が入っていない。作品を作りたいものは、注文写真とは別に作品と向きあうべきである。氏は他人とは違った映像の世界を作りたいと思い、特殊技法をあみ出したり、建築写真を赤外フィルムを使い、新機軸を切り開いたり、タブーとされている写真に手を加えるなど、自分の好きなように表現することに専念している。平成 16 年に写真集『創跡』を、晩年には魚眼レンズ、自作カメラ等を使った『球体劇場』を発表し、自身の写真観を貫いている。土方の座右の銘は「初心忘れるべからず」という。リアリズム写真の全盛期に自らを信ずる抽象的作品を作り続けて 93 歳の生涯を終えた氏の信念に、賛辞を贈ります。(敬称略)

合掌



坂口 よし朗 正会員

平成 27 年 9 月 4 日逝去。

83 歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(昭和 48 年入会)

旅の写真家・坂口よし朗(榮藏)さんを偲ぶ! 山口 勝廣

1988 年旅を愛し、世界の平和を願う写真家が、旅の情報交換・情報発信基地として、旅をテーマに拘る「プロ写真家集団を作ろう!」と集まつた。当時、東京駅八重洲口の観光会館や丸大百貨店には各県観光案内や事務所が集まつておる、ある県の観光事務所の会議室をお借りして構想を練つた。当初はガイドさんや旅行作家の知恵も拝借して、会の活動内容や組織について検討を重ね、5人の写真家(JPS 会員)が発起人となって、2 年の準備期間を経て会の名称、活動主旨や会則等を整備し、1991 年 11 月、銀座三笠会館において日本旅行写真家協会が誕生した。

坂口さんは、通称「旅写」の初代会長であり、北海道で誕生された。おおらかで温厚、紳士的な人柄に纏め役として活躍していただいた時に、議論が高まって激高した意見が飛び交うような場面でも大きな声を出されたことは一度もなく、何時も静かな語り口で場を収めて、会をリードしていただいた。

昨秋「旅写集」を北海道東川町で開催した折、東京から北海道に活躍の場を移されていた JPS の会員が懇親会に顔を出され、その後、旅の写真取材で坂口さんという写真家に大変お世話になったことがあり、その後坂口さんを知りませんかと聞かれた。坂口よし朗さんなら、当「旅写」の初代会長で、この会の設立発起人なんですよお伝えすると吃驚され、當時の北海道移転直後の取材撮影時の苦労を思い出されて、大変感謝されていた。改めて親切で優しい坂口さんの人柄が偲ばれる。

仕事は旅行関係の単行本や雑誌等、保育社のカラーブックスシリーズ『ひとり旅の北海道』、『北海道の旅』、『森と湖のひとり旅』、『地下鉄銀座線各駅停車』等で写真を担当させていた。また、活動は広範囲にわたり、ポスター・カレンダー制作をはじめ週刊誌、企業誌等、幅広く作品を発表されていた。

9 月 6 日、江古田斎場で営まれた通夜では、日本写真家協会・熊切圭会長と旅写の供花が「旅の写真家・坂口よし朗さん」の遺影に語りかけ、悠久な時空に旅立たれた御靈とお別れしてきました。(合掌)



小西 忠一 正会員

平成 27 年 9 月 20 日逝去。

89 歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(平成 20 年入会)

ロマンチスト 小西忠一氏の死を悼む

田沼 武能

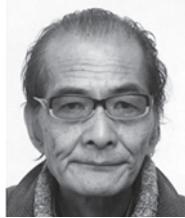
小西忠一氏は生涯ロマンチストを貫いた男であった。自分の夢を実現するために、常に前向きに生きていた。

青春時代、「大陸で活躍したい!」、それを実現するために、東京外事専門学校(現外語大)の蒙古科で学んだ。少年の頃のもう一つの夢は、写真家になることであったが、こちらは受験に失敗し挫折した。

商社マンになった小西忠一の仕事は、中国への機械販売であった。そして中国の文革終了とともに、地方への出張も可能となり、彼は靴にいつもカメラを持ち歩いていた。そして会社の仕事で大陸を東奔西走し貿易に専念した。定年後は、仕事の合間に使いシルクロードに住む少数民族と親交を深め家庭に入ってきた撮影を可能に。新しい目で見た南疆の人びとの暮らしを捉え、1990 年に『南疆ヤクシイ』写真集を発表した。ヤクシイとはウイグル語で「素晴らしい」という意味という。これを契機に氏は会社を辞し、写真に専念することになる。

その後プロ写真家に転向するために 3 年がかりで当協会に入会すべく努力を重ね、2008 年にその念願をかなえ入会した。若い時の夢を実現したのは 81 歳になってしまった。

会員になってからはますますシルクロードに熱が入り、ホロンパイルからノモンハン戦跡をドキュメントする。ことにノモンハン戦に対しては、何のため、誰のために戦争したか兵士も国民も分からぬ、無能な參謀や上官の命令によって命をおとした兵士、その遺族たちは全くやりきれない思いだと語っていた。その戦争の分析も反省も行わず、太平洋戦争に突入した軍部上層部に対する強い怒りを説いていた。彼はホロンパイルやノモンハンの写真集をまとめるべく頑張っていたが、実現できままくなってしまった。小西忠一氏はすべて自分の夢をなしとげたが、唯一やり残したのは、この写真集の完成であった。悔しい思いであったに違いない。私は、また一人写真を愛する仲間をなくしさびしい限りである。(冥福を祈ります)。



池尻 清 正会員

平成 28 年 1 月 9 日逝去。

66 歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(平成 15 年入会)

また一人後輩を喪ってしまいました。

小山貴和夫

1 月 9 日早朝、会員の池尻清氏が北里大学病院で永眠されました。親しくされていた方から、ご逝去の知らせと「葬儀無しで、散骨してほしい。」と故人が言っていたという連絡をいただきました。故人や遺族の意思ということなので、葬儀で故人を偲ぶ時がないのが残念でした。

私は JPS に入会した 1973 年に「フリーの仕事を兼務して良いから」という条件で東京綜合写真専門学校に実習助手として就職しました。学校近くに住んでいたため、授業以外でも昼夜の別なく学生と一緒に生活でした。学生たちの多くとは年齢が近かったためでしょう。

そんな後輩たちの中から、2003 年に 55 歳で逝去された神山洋一会員など分かっているだけで、すでに 5 人の後輩が喪ってしまいました。そして今度は池尻会員が逝去されました。彼は 1949 年生まれで私より二歳年下、1975 年に東京綜合写真専門学校に入学してきました。入学前の経歴は不明ですが、遠回りしてきたため高校新卒で入学した学生より 7 歳ほど歳上で卒業。卒業直後にイギリスに渡り仕事をしたということでの語学が堪能だったのでしょうか。私は助手生活三年目で生活に慣れていたし年齢が近いせいか、よく写真論を戦わせたことを覚えています。当時はコンボラ写真全盛時代、その中でナインブな作品を合評の授業で発表していました。卒業直後にヨーロッパで活躍していましたことを考え合わせると、彼は早熟だったのではないかと思っています。

後輩たちを送るのは痛恨の思いです。合掌

経過報告 (2015年4月~6月)

○4月20日 第33回公益社団法人日本写真家協会理事会

PM200 ~ 300 JCII 会議室 18名、欠席 2 名、監事 2 名

○第1号議案: 平成 26 年度事業報告書承認の件 第 2 号議案: 平成 26 年度決算報告承認の件 第 3 号議案: 第 41 回「日本写真家協会賞」承認の件 第 4 号議案: 平成 26 年度会費滞納による正会員資格の喪失の件 第 5 号議案: 任期満了に伴う理事選任のための候補の件、他

○5月12日 日本写真保存センター企画「被爆から 70 年 知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾」展記者発表

PM1:30 ~ 3:00 JCII 会議室 5 社 9 名

○5月14日 第1回技術研究会

PM3:00 ~ 6:00 凸版印刷工場見学セミナー 参加者 20 名

○「凸版印刷工場見学セミナー」～デジタル時代の製版・印刷を学ぶ

○5月22日 平成 27 年度(第16回)定時会員総会

PM1:30 ~ 3:30 アルカディア市ヶ谷 5F 「穂高の間」 本人出席者 129 名、代理委任 7 名、議決権行使書 859 名、計 995 名、会員外理事 4 名、監事 2 名、名譽会員 7 名、賛助会員 14 社 23 名

○報告事項: 1、「平成 27 年度事業計画書」の件、2、「平成 27 年度予算書」の件、3、第 41 回「日本写真家協会賞」の件、4、会費滞納による正会員資格の喪失の件、5、平成 27 年度正会員理事候補選出結果の報告、決議事項: 第 1 号議案: 平成 26 年度事業報告及び決算承認の件、第 2 号議案: 任期満了に伴う理事選任の件、第 3 号議案: 監事(正会員)逝去に伴う監事選任の件

○5月22日 第34回公益社団法人日本写真家協会理事会

PM3:30 ~ 3:50 アルカディア市ヶ谷 6F 「伊吹の間」 18 名、欠席 2 名、監事 3 名

○第 1 号議案: 平成 27 年度代表理事及び業務執行理事の選定の件、他

○6月11日~26日 第40回 2015JPS 展(東京)

東京都美術館 入場者 3,067 名

○6月13日 表彰式、祝賀会、講演会・「フォトコン」編集長と熊切圭介会員による対談「編集長に聞く～コンテスト応募指南～」、イベント「プロアレクチャーアー」

○6月18日 三団体協会懇談会

PM6:00 ~ 8:00 J P S 会議室 17 名

編集後記

○前 160 号の Digital Topics で取り上げた記録メディアについての記事、実は担当を兼務するホームページの方でも独自取材記事として掲載予定だったのに原稿執筆に苦労…。会報発行から 2 ヶ月以上を経てようやく公開。あらためて会報担当委員の編集・執筆能力の高さに脱帽です。 (加藤)

○年末始の暖冬気候から寒さが嫌いな私は、このまま「春になれ」と期待していたら、一か月遅れで冬が来てしまった。近年の気候変動で日本ののみならず世界各地で、洪水や大寒波などの異常気象のニュースが増えがる。この冬の「変な気候」もその一環なのだろう。冬の嫌いな私が、日本の色彩豊かな「四季」が「三季」になってしまったのはやはり寂しい。 (飯塚)

○昨年 2 月から準備を進めていたエプソンとの企画写真展「エプサイト プライベートラボでつくるインクジェットの本流～JPS 会員によるプリント競演展～」が 1 月 29 日に開幕し、本号が出る頃には無事に終了している見込みです。皆様のご協力に感謝申し上げます。 (関)

○昨年末の祝賀会で、集合写真を撮らせていただいた

きました。カメラメーカーさんから、発売されたばかりの新設計のレンズを借りました。もちろん最高の描写で、それを知ってしまうとやはり欲しくなります。結局、持っていた旧型と買い替えました。こんな事を繰り返していたら、経済的に大変だ…。 (小野)

○1 月末に会員の元に届けられた著作権記事一覧冊子の編集・制作を担当した。過去に JPS 会報に掲載された著作権に関する記事をまとめたものだ。抜き出してみると写真著作権の歴史と写真家の動きがよく見えてくる。是非、ページをめくっていただきご一読願いたい。 (小池)

○今年の CP+ は、新機能として 4K 動画を前面に打ち出しているメーカーが多いようだが、その一方で一度は止まったかに見えた高画素化も、また大きな数字に向けて歩み出したように感じられる。写真のあり方がまた大きく変わるものを感じている一方で、では「人間でないとできないこと」って何だろうと考える今日この頃。 (小城)

○今年はオリンピックイヤー & フォトキナイヤー。年始早々の CES2016 では、いくつもの新製品が発表されていたが、CP+ 2016 ではさらに多くの新製品が登場するに違いない。取材する立場としては嬉しいことだが、購入する立場となると話は別。ちょっとベースが早すぎ。頼むから、新製品の発売はもう

少し待ってくれないかなあ。 (柴田)

○7 年ぶりに写真展を全国 4 領域のキヤノンギャラリーで開催中です。内容はモノクロの女性ポートレート。フィルム経験が有る年代の方は懐かしがつていただき、若い方は新鮮に思われる方が多いようです。デジタル時代のモノクロ写真、フィルム時代と違った捉え方をされるようですね。3 月は札幌、4 月は大阪で開催します。お時間が許せばおいで下さい。 (伏見)

○クラウド上の画像保存に大手が参入、賑やかになってきました。先ごろ Amazon がプライム会員向け(年会費 3,900 円 / 込)に容量無制限の「プライム・フォト」を開始。便利な反面、突然の廃止や会費高騰を懸念すると、業務用にはなかなか乗り出せません…。 (桃井)

○中国の若手写真家 M はあつという間にアメリカでデビューし、わずか 2 ~ 3 年でプリント価格が 3 倍になった。同じ中国の写真家 O は北米の美術館にプリント 100 枚を収蔵。物価が日本の 1/3 ~ 1/5 の国では夢のようなサクセストーリーだろう。中国の写真家たちは躍起になって彼らのあとを追いかけています。一方、日本ではまだプリントを売る意識は低い様子。いや、むしろ芸術に金の話は不純だという空気が。 (山縣)

日本写真家協会会報 第161号 (年3回発行) 2016年2月20日 印刷・発行 ○編集・発行人 熊切圭介

URL <http://www.jps.gr.jp/> Email info@jps.gr.jp 本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます

頒布 1 カ年・3 回 3,500 円(消費税・送料共込)

出版広報委員 加藤雅昭(理事)、飯塚明夫(委員長)、関 行宏(副委員長)、小野吉彦、小池良幸、小城崇史、柴田 誠、伏見行介、桃井一至、山縣 勉

発行所 公益社団法人日本写真家協会 (JPS)

〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地 JCII ビル303 電話 03(3265)7451(代表) FAX 03(3265)7460

印刷所 株式会社光邦

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3丁目11番18号 飯田橋 MK ビル 電話 03(3265)0611(代表)



写真家に知っておいていただきたい著作権のこと。

あなたが写真を撮った時に、
写真の著作権はあなたの**財産**となります。
そのためにはなんの**登録**も必要としません。

あなたの写真は、著作権というとても**強い権利**で、
あなたの**死後も50年間にわたって**守られますが、
著作権を**譲渡する契約**によって撮影された写真は、
その権利を**失い**、回復することは**困難**です。

写真家はできる限り、
「写真の著作権を保持するべきだ」
と私たちは考えています。

写真著作権を大切に。

**写真を撮る人が押さえておくべき
知識を集約した、**

必携の書に新版登場！

ユニーク・ブックス・シリーズ No.19

Q&Aで学ぶ 写真著作権

Q&A on Copyright:
Essential Knowledge
for Photographers

**著作権は写真家の
生命なのだ。**

近年写真是銀塩フィルムからデジタルに移行している。即ち写真データの管理が非常に難しくなっている。ましてや海外に送つた写真データの管理は一層困難になる。これをどう解決してゆくかは今後の写真著作権にとって重要な課題である。

(巻頭言より)

第2版



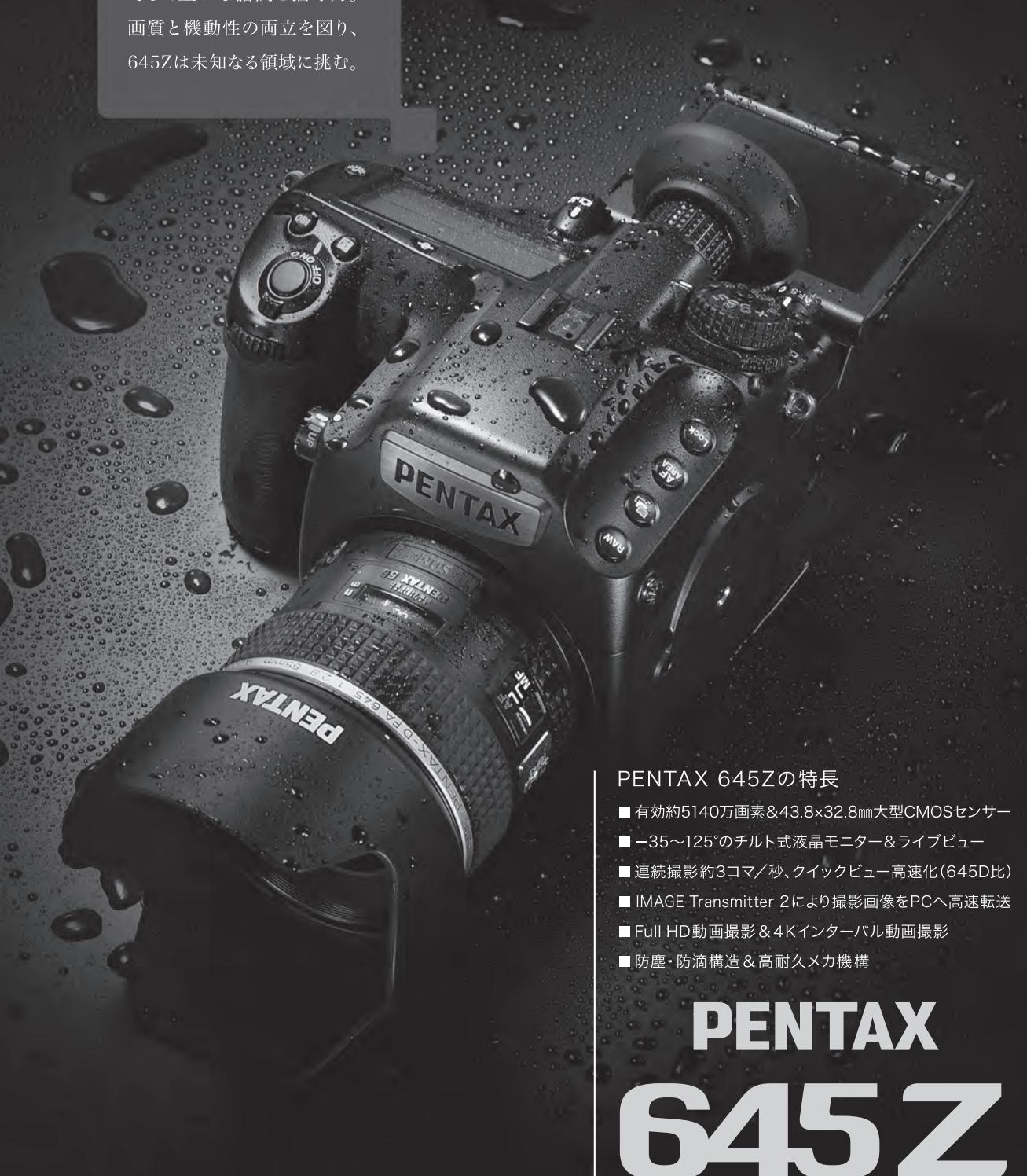
- 口絵 ●巻頭言 ●第2版に寄せて
- 著作権用語集 ●第一章 写真著作権概論
- 第二章 Q&Aで学ぶ写真著作権
著作権保護の基本／フォトジャーナリズムと
写真著作権／出版と写真著作権
広告写真の著作権／肖像権／契約と写真の著作権
- 第三章 新しいメディアと写真著作権
付録 ●あとがき ●執筆者一覧

太田出版

東京都新宿区愛住町22 第3山田ビル4F TEL.03(3359)6262
FAX.03(3359)0040 <http://www.ohtabooks.com/>

孤高の頂へ。

見る者を圧倒する、解像力。
そして豊かな諧調と描写力。
画質と機動性の両立を図り、
645Zは未知なる領域に挑む。



PENTAX 645Zの特長

- 有効約5140万画素&43.8×32.8mm大型CMOSセンサー
- -35～125°のチルト式液晶モニター＆ライブビュー
- 連続撮影約3コマ／秒、クイックビュー高速化(645D比)
- IMAGE Transmitter 2により撮影画像をPCへ高速転送
- Full HD動画撮影＆4Kインターバル動画撮影
- 防塵・防滴構造＆高耐久メカ機構

PENTAX
645Z



19世紀に誕生した銀塩写真は、芸術、報道など様々な分野で歴史を写し続けてきました。デジタルが中心の時代になっても、フィルムが描く独特な表現はその輝きを失いません。そして、富士フィルムが総合感材メーカーとしてフィルム開発のなかで培ってきた、独自の技術とアイディアによる高画質へのこだわりは、最新のデジタルカメラ「Xシリーズ」にも綿々と受け継がれています。伝統のフィルムと最先端のデジタル、その表現手法は違っても、製品の開発、製造にかける富士フィルムの情熱は同じです。



かけがえのない写真文化を伝えたい。
富士フィルムのプロフェッショナル写真製品

FUJIFILM
Professional
Photo Products

堀内カラーのネットオーダーサービス



大サイズプリントとパネル加工を同時にオーダー

ネット@ザ・プリント

銀塩の表現力を最大限に活かしたラムダプリントで、作品表現に最適な組み合せが選べ、ドライマウント・マットパネル・アルミフレームのパネル加工も同時に注文できます。

プリント

- ペーパー：コダックプロ、メタリックの2タイプ
- サイズ：六ツ切～B1までの19タイプ
- フチ取り：白フチ、黒フチ、フチなしの3タイプ

パネル加工

- 高級アルミフレーム（額縁／シルバー、ブラック）
- マットパネル（オフホワイト、ブラック）
- ドライマウント



高品質なフォトアルバムやポートフォリオの制作に

ネット@ザ・フォトアルバム

多彩な編集機能と仕様でさまざまな用途に合わせ、表紙はハードとソフト、本文は高級銀塩写真とオンデマンド高精細印刷の各2タイプでオリジナリティ溢れる作品集ができます。

〈PRO〉シリーズ

- 高級写真タイプ：銀塩光沢印画紙+液ラミ
- サイズ／ページ：160SQ、A5、197SQ、A4、10～50p
- カバー：ソフト（ブックケース付）、ハード（くるみ表紙）

〈ENJOY〉シリーズ

- 高級精細印刷タイプ：表紙／マットPP加工
- サイズ／ページ：200SQ、A4、20～50p
- カバー：ソフト（並製本）、ハード（上製本）



HORIUCHI COLOR
FINE ART PRINTSERVICE

インクジェット・プリントを極める

ファインアート・プリントサービス

作品イメージを極限まで表現した「ファインアート・プリント」を国内外有数の6種類のアーティスト用紙で提供します。

漆喰の特性をインクジェットに生かす

『フレスコジクレー』

- タイプR（ラフ）

繊細さと優雅さが特長の

『ハーネミューレ・ファインアート』

- ファインアート・パライタ／フォトラグ

インクの重なりが表情豊かに仕上げる

『ヴァンヌーポ』 ●ファインアート・ヴァンヌーポSW

柔らかで優しい印象に仕上げる

『伊勢和紙 Photo』 ●雪色／芭蕉

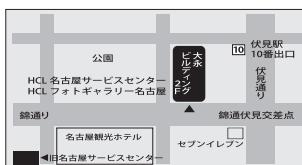
個展・グループ展などの開催を受付けています。



HCL フォトギャラリー新宿御苑

東京都新宿区新宿1-6-5 ☎03-3226-9602

- 平日=10:00～19:00 ●土曜=10:00～17:00
- 最終日=10:00～15:00 ●休館日=日曜・祝日・年末年始
- 地下鉄丸の内線「新宿御苑前駅」新宿門より徒歩1分



HCL フォトギャラリー名古屋

名古屋市中区錦1-11-20 大永ビルディング2F ☎052-211-6151

- 平日=9:00～18:00 ●土曜=9:00～17:00
- 最終日=9:00～13:00 ●休館日=日曜・祝日・年末年始
- 地下鉄鶴舞線・東山線「伏見駅」10番出口より徒歩1分

堀内カラー

フォトアートセンター

東京都杉並区和田1-6-7 ☎(03)3383-3358

フォトイメージングセンター（旧新宿事業所）

東京都新宿区新宿1-6-5 ☎(03)3226-9581

青山サービスセンター

東京都渋谷区神宮前3-41-6 ☎(03)3479-5351

神田サービスセンター

東京都千代田区神田小川町2-6-14 ☎(03)3295-2191

東京サービスセンター

東京都杉並区和田1-6-7 ☎(03)3383-3321

名古屋サービスセンター

名古屋市中区錦1-11-20 ☎(052)211-6151

関西営業部

大阪市北区万歳町3-17 ☎(06)6313-2351

サービスの詳細やご注文はホームページから…www.horiuchi-color.co.jp

2015 堀内カラー フォトコンテスト 入賞作品展

《東京会場：HCL フォトギャラリー新宿御苑》

2016年2月18日(木)～2月24日(水)

《名古屋会場：HCL フォトギャラリー名古屋》

2016年3月1日(火)～3月7日(月)

■詳細はホームページで：<http://www.horiuchi-color.co.jp> ■お問合せ：堀内カラー フォトコンテスト係 ☎03-3295-1083



金賞 堀内カラー賞「夏休み」石川賢一



銀賞 ノンジャンル「いざ！」西村美代子

Canon

make it possible with canon

Another 5.



約5060万画素、もうひとつの5D登場。

EOS 5Ds

約5060万画素フルサイズCMOSセンサーを搭載した、もうひとつの5D。

EOS 5Ds R

5Dsの解像性能を最大限に引き出す
ローパスフィルター効果キャンセルモデル。

- 新開発 有効画素約5060万画素フルサイズCMOSセンサー
- 映像エンジン「デュアル DIGIC 6」
- 常用ISO感度100～6400 拡張ISO:12800
- 最高約5コマ/秒の連写性能
- 61点高密度レティクルAF
- 顔や色を検知して被写体を追尾する「EOS iTR AF」
- 高画素による繊細な質感を表現する新ピクチャースタイル「ディテール重視」と新シャープネス項目「細かさ」「しきい値」
- モーターとカムギアでミラーの駆動と速度制御を行いカメラブレを軽減する「ミラー振動制御システム」
- 徹底的なブレ対策のために強化した高剛性三脚座
- ミラーアップとシャッターボタン押しに伴うカメラブレを解消する新機能 レリーズタイミング任意設定
- EOS初、約1.3/1.6倍クロップ撮影機能

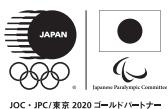
EISA Best Product

2015-2016

PROFESSIONAL DSLR CAMERA

Canon EOS 5DS/5DS R

EOS 5Ds / EOS 5Ds R
は欧州で権威のある
写真・映像関連の賞
「EISAアワード 2015-
2016」を受賞しました。



JOC・JPC 東京 2020 ゴールドパートナー
(スチルカメラ)



EOSは2015年11月10日に累計
生産台数8,000万台、EFレンズは
2015年6月22日に累計生産本数
1億1,000万台を達成しました。



TOP PARTNER



◎キヤノン EOS ホームページ

canon.jp/eos

キヤノンマーケティングジャパン株式会社



JPSと共同企画による写真展を開催!! 迫力ある素晴らしい作品40点を展示

エプサイトは2016年1月29日(金)から2月18日(木)に、日本写真家協会会員8名による企画展「エプサイト プライベートラボでつくるインクジェットの本流～JPS会員によるプリント競演展～」をエプサイトギャラリーにて開催しました。

◆JPSと共同企画による写真展

エプサイトと(公社)日本写真家協会(JPS)は、日本写真家協会会員の優れた写真作品を通じてインクジェットプリントの可能性をより広めたいという狙いのもと、「エプサイト プライベートラボでつくるインクジェットの本流～JPS会員によるプリント競演展～」と名づけた写真展を、2016年1月29日(金)から2月18日(木)の3週間に亘ってエプサイトギャラリーにて開催しました。なお、日本写真家協会とこのような合同での企画写真展は初めての取り組みとなります。

会期初日となる1月29日には夕方からオープニングパーティを開催。あいにくの雨となりましたが、招待客などを含むおよそ40人が参加し、賑やかなスタートとなりました。

ギャラリーにはそれぞれの出展写真家の特色が表れた延べ40点の迫力ある素晴らしい作品が並び、3週間の会期を通じてプロ写真家やアマチュア写真家など多数の来場があり、盛況裡に幕を閉じました。



8名の出展写真家の皆様

◆プライベートラボで制作した作品を展示

今回の企画展に展示された作品は、それぞれの出展写真家がエプサイト内の「プライベートラボ」(プリント制作スペース)を利用してプリントしたもので、プリンターには、最大64インチ(約1,600mm)幅のプリントが可能なエプソンの大判プリンター「PX-20000」、A2ノビ/17インチ幅ロール紙対応の「SC-PX3V」、および、2015年10月に発売されプライベートラボに設置されたばかりの新インクテクノロジー「UltraChrome HDXインク」搭載の10色顔料インクモデル「SC-P9050G」(B0ノビ対応)が使われました。

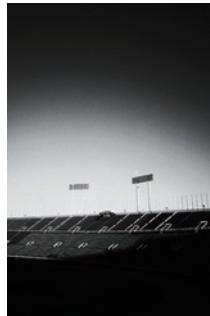
なお、プライベートラボおよびギャラリーのご利用や日本写真家協会会員向け特典などについては、下記までお問い合わせください。

エプソンイメージングギャラリー エプサイト
〒163-0401 新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル1F
TEL 03-3345-9881 FAX 03-3345-9883
<http://www.epson.jp/epsite/>



SC-PX3V

- 印刷方式 / 最高解像度：MACH方式 / 2880dpi × 1440dpi
- インターフェイス(ネットワーク含める)：Hi-Speed USB × 1 (PC接続用×1<背面>)、10BASE-T/100BASE-TX、IEEE802.11b/g/n
- インク：顔料タイプ各色独立インクカートリッジ(フォトブラックまたはマットブラック、シアン、ビビッドマゼンタ、イエロー、ライトシアン、ビビッドライトマゼンタ、グレー、ライトグレー)
- 対応用紙サイズ：L判/KG/2L判/ハイビジョン/六切/四切/半切/A6縦～A2ノビ縦(17インチ)/ファインアート紙・厚紙(フロント手差し)用紙厚1.5mm、専用ロール紙(A3ノビ/329mm)～A2ノビ/431.8mm(17インチ)幅)
- 外形寸法(幅×奥行×高さ)：収納時：684 × 376 × 250(mm)
- 質量：約19.5kg

<p>内野志織 「オーロラ・瑠璃色に光る夜空の宝石」 A1 ノビ×5点 使用ペーパー：プロフェッショナルフォトペーパー＜厚手光沢＞</p>  <p>「オーロラの魅力に惹かれて 1999年から2007年までカナダに在住し撮影活動を続けたのち、出産を経て、2013年3月に撮影を再開。出産と育児で自分の人生から少し遠のいてしまったオーロラを再び引き寄せたい。そんな想いで、以前から訪れたいと願っていたアイスランドへと向かいました。」</p>	<p>大高 明 「先史時代・先住民からの伝言」 A1 ノビ×4点 使用ペーパー：PX/MC プレミアムマット紙ロール</p>  <p>「氷河期の終わりにユーラシア大陸から北米大陸へと渡った先史の先住民たちが岩に彫り刻んだペトログリフ（岩絵）の正確な意味や目的は謎のままである。しかし現在でも強いメッセージで語りかけてくる。岩やペトログリフのテクスチャを表現したいと考えて、ペーパーを選択しプリントした。」</p>
<p>小宮 広嗣 「国立霞ヶ丘陸上競技場最後の日々」 A2 × 6点 使用ペーパー：プロフェッショナルフォトペーパー＜厚手光沢＞</p>  <p>「旧国立競技場最後の年となった2015年、私は記録撮影を行うため半年ほど通いつめる日々を送っていた。世の中では新しい競技場建設に関するさまざまなニュースが飛びかかっていたが、旧競技場は平穏な静けさの中にあった。この写真は解体が始まるまでの、競技場の覚悟とも思える静寂さの記録である。」</p>	<p>三田 崇博 「Icelandscape」 A1 ノビ×4点 使用ペーパー：プロフェッショナルフォトペーパー＜厚手絹目＞</p>  <p>「アイスランドのシンクヴェトリル国立公園一帯は、ユーラシアプレートと北米プレートが交わるなど自然としての価値を持ちながらも、世界最古の近代議会として紀元930年に『アルシング』という全島集会が開かれた由縁により、世界文化遺産として登録されている。2015年3月撮影。」</p>
<p>橋本 武彦 「女星写真」 A1 ノビほか×9点 使用ペーパー：写真用紙＜光沢＞</p>  <p>「高感度が常用領域となったデジタル化による新しい表現として、2010年から、ギリシャのエーゲ海を舞台に星明かりと月明かりを利用したポートレートを撮影しています。ファンションモデルやベリーダンサーとともに遺跡を訪れ、星空を眺め、合成なしの1発撮りで作品を制作しています。」</p>	<p>松原 豊 「三重ノ銭湯」 A0 ノビほか×6点 使用ペーパー：プロフェッショナルフォトペーパー＜厚手絹目＞</p>  <p>「在住する三重の銭湯の記録を続けている。普段は入れない女湯に足を踏み入れたとき、タイル画は富士山ではなくアルプスの山々だったこともある。そんな多様性のある銭湯も老朽化と高齢化により廃業が相次いでいる。大判カメラとネガフィルムで撮影し、エプソンのフラットベッドスキャナでデジタル化した。」</p>
<p>満田 聰 「MUSE」 A0 ノビ×4点 使用ペーパー：プロフェッショナルフォトペーパー＜厚手絹目＞</p>  <p>「ライフワークとして人を写したいと求める中で、自然に音楽の世界にたどり着きました。音の写らない写真でいかにその芸術性と音楽を感じさせるか、試行錯誤の日々が続きます。いつの日か音楽家の息づかいと音楽を感じさせる作品を残したいと思います。(写真はバイオリニストの五嶋みどり)」</p>	<p>わいだ 蒼田 純一 「江戸川乱歩の書棚 蔵 北棚」／「葬居ーグラフィック・デザイナー 鈴木一誌氏のアトリエ」 B0 ノビ×2点 使用ペーパー：プロフェッショナルフォトペーパー＜厚手光沢＞</p>  <p>「書棚には本だけではなく小物や手紙やへそくりまで色々な物が紛れ込んでいます。書棚のある部屋の棚の並び、その部屋の光り、空気感もまた、懐ただしい日常から私たちを別の世界へと連れ去ってくれるものです。」</p>

(50音順に配置、敬称略)

プリントテクニック情報は、エプソンのフォトポータルサイトへ。 <http://www.epson.jp/katsuyou/photo/>

エプソン販売 株式会社

SP35 mm & SP45 mm



新「SP」から、その先の未来へ。

極めて高い光学性能と驚異的な近接撮影能力、
手ブレ補正機構の搭載。これまでにない革新的な
2本のF/1.8単焦点レンズ、誕生。

TAMRON

www.tamron.co.jp

TAMRON
15 1 ∞ ft m
SP 35mm F/
Di VC USD

EPSON

EXCEED YOUR VISION

A3ノビ対応プリンター
SC-PX7VII NEW
オープンプライス

すべての光を
顔料で捉える。

EPSON ULTRACHROME
K3TM

A2ノビ／17インチ幅ロール紙
対応プリンター

SC-PX3V

オープンプライス

*ロール紙ユニットは、
オプション対応となります。

すべての色を
黒で極める。



EPSON ULTRACHROME
K3TM
A3ノビ対応プリンター
SC-PX5VII
オープンプライス

どんな作品も、作り出せる品質がある。

Epson Proselection

エプソンプロセレクション

*出力物はイメージです。*写真はハメコミ合成です。*オープンプライス商品の価格は取扱販売店にお問い合わせください。*この広告に記載の仕様、デザインは2015年9月現在のものです。技術改善等により、予告なく変更する場合がありますので、予めご了承ください。下記電話番号はKDDI株式会社の電話サービスKDDI光ダイレクトを利用しています。下記電話番号がご利用いただけない場合は、携帯電話またはNTT東日本・NTT西日本の固定電話(一般回線)からおかけください。かっこ内の番号におかけくださいますようお願いいたします。

[SC-PX3V・SC-PX5VII] KDDI光^{ひかり}ダイレクト 050-3155-8100 (042-585-8444) [SC-PX7VII] KDDI光^{ひかり}ダイレクト 050-3155-8011 (042-589-5250)
[インフォメーション]

ご購入はお近くの販売店 または ☎ エプソンダイレクトで検索 » お電話でも **0120-956-285**

エプソンのホームページ <http://www.epson.jp> エプソン販売株式会社 セイコーエプソン株式会社

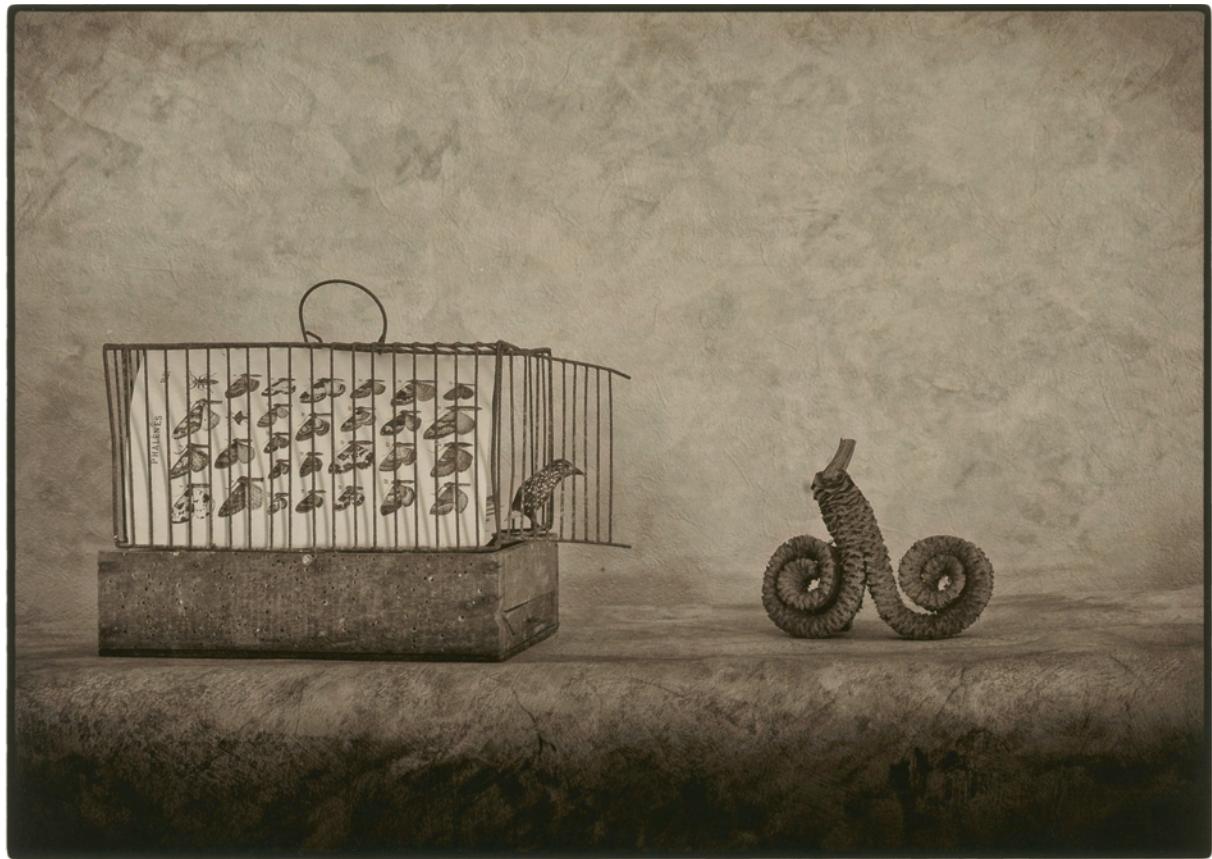


Photo Nagai Masaru